Library and Information Science No. 11 1973

慶應義塾大学図書館・情報学科のカリキュラムの現状

A Comprehensive Review of the Curriculum of the School of Library and Information Science at Keio University

図書館・情報学科
カリキュラム委員会
SLIS Curriculum Committee

Résumé

The framework for current curricula of our School had been revised in 1972 and is now fully operational. Although every curriculum is subject to constant improvements, the basic structures must be explicitly stated in order to secure good communication among teaching staff themselves and between students and teachers.

The present issue is specially dedicated to summing up the skeleton of entire undergraduate curricula. The undergraduate course must be complete in its own right, and to cover all aspects of librarianship and some new topics in information retrieval, it is based on "articulated diversification" of some subjects, extended over 3 academic years.

The subjects presented here are, for convenience's sake, grouped into five larger categories; fundamentals, recorded materials, organization of materials, information systems, and miscellaneous (including practice and thesis). Each category is broken down to specifics, and every description is composed of purpose, units and structure, methods of teaching, and problems and prospects.

We invite comments on and criticisms to any subjects desplayed here. To our regrets we have to postpone part of the subjects, which will, together with those presented here, form an integral whole of our curricula.

序にかえて

基礎科目群

Ⅰ. 図書館　情報学概論
Ⅱ. 原典講読
Ⅲ. 図書・図書館史
Ⅳ. 資料選択論

資料系列科目群

Ⅰ. 資料論Ⅰ　(社会科学資料)
Ⅱ. 資料論Ⅲ　(人文科学資料)
Ⅲ. 資料論Ⅱ　(科学技術資料)
Ⅳ. 資料論Ⅴ　(児童図書資料)
Ⅴ. 資料論Ⅵ　(理工学資料)

資料組織系列科目群

Ⅰ. 資料組織概説
Ⅱ. 資料組織法
Ⅲ. 資料組織論Ⅰ
Ⅳ. 資料組織論Ⅱ
Ⅴ. 情報検索論Ⅰ
Ⅵ. 情報検索論Ⅱ

情報システム系列科目群（次号）

Ⅰ. 情報システム概論と情報システム経営
Ⅱ. 情報システム管理Ⅰ　(大学図書館)
Ⅲ. 情報システム管理Ⅱ　(専門図書館)
Ⅳ. 情報システム管理Ⅲ　(公共図書館)
Ⅴ. 情報システム管理Ⅳ　(学校図書館)
Ⅵ. 情報システム管理Ⅴ　(児童図書館)

その他の科目群（次号）

Ⅰ. 図書館・情報学特殊
Ⅱ. 演習・実習・卒業論文

序　に　か　え　て

ここに特集した「図書館・情報学教育」は昨年度改訂したカリキュラムの編成理念を明らかにし，かつこれを各教科ごとに実態化したシラバス案を提出することを目標としたものである。カリキュラムの根本的改訂は制度的な面からみて，毎年行なうことは不可能であり，また必ずしも望ましいことでもない。これに反し，その構成部分としてのシラバスは，学問および実地の進歩発展に即応して常時これを改訂し，充実させていくことが必要であり，可能でもある。さらにその実施の場における工夫・考案も次第に蓄積されよう。

別の面から考えると，図書館・情報学の専門教育は，どのように社会的に規定し得るか，また期待されているか，という問題がある。この特集号においても，部外者からの批判を仰ぐため，相当多方面の方々に依頼したのであるが，残念ながら予定どおり玉稿を頂けなかった。従って図書館・情報学教育の討議は今後の課題として残されているわけである。

わが国の諸情勢からみても，また外国の状況に鑑みても，私どもはいま大きな転換期にあると考えている。しかし，単なるフィーリングとしての対応でなく，確実なアプローチをとるための出発点として，このカリキュラムを理解して頂ければ幸である。　(小林　胖)

基 礎 科 目 群

I. 図書館・情報学概論

はしがき

この科目は，2年になって図書館・情報学科を専攻として選んだ学生が原典講読などとともに，最初に必修の専門科目として学ぶ通年の科目であるばかりでなく，2年，3年，4年で学ぶすべての専門科目への導入口に当る大切な科目である。この科目で学生の図書館・情報学に対する態度の下地が出来てしまうと考えてよいし，もし勉学の意欲を失わせるような結果になると，卒業後の就職にも図書館関係の職場を選ぶ気持を無くさせてしまうということになりかねない。

そのように非常に大切な科目であると同時に，又非常にむずかしい科目である。1年間で図書館学の全分野にわたる基本的な考えや知識を，情報の流れの中の図書館学という観点から学ばせねばならないが，この科目を担当する教員にとっては，当然自分の不得意な，又はほとんど知らない事柄も沢山出てきて，授業の準備それ自体が自分の勉強のようなものである。他面，学生のほとんどは，図書館学も，文献を主体とした情報学も全く知らないというばかりでなく，実際の図書館の活動についてすらほとんど予備的な知識を持っていないのが普通であり，従ってそのような学生達に，この科目の内容を充分に理解させるためには，科目の担当者が十二分にその教育内容に通じていなければならないという矛盾が存在する。現在この科目は，関係教員の協力で作られたシラバスに従って，原則的には1年交代で教えられているが，科目の重要性と，むずかしさから考えて，果して現行の1人の担当者が，1年交代で教えることが妥当であるかどうかは疑わしい。

A. 概　　要

この科目の目的は，明らかに，初めて図書館・情報学という専門分野に接する専攻の学生にこの分野全体の目的，枠組み，構造，その進んでゆく方向などについての総括的な知識を修得させることにある。

従ってその内容は図書館・情報学の全分野にまたがり，しかもそれが理屈に合った順序に紹介されて行き，学生にとつては，種々雑多なことを漠然と学ばされるのではなく，科目で取上げられる事柄が積み重ねられてゆき，1年の終りには，図書館・情報学全体の構成がなんとなく摑めるところにまでたどりつけるようになることを狙わなければならない。

昭和 47～48 年の図書館・情報学科の要覧によると，この科目の内容は，

「情報の生成・伝達・変換・蓄積・検索および資料の収集・組織・保管・利用という一連の過程にかかわる原理および技術を相互に関連ずけながら検討し，さらに各種の資料を専門的に扱う図書館・情報センターの類型・機能などについて概説する。」 となっている。

即ち，文献を主体とした情報活動の諸要素と，従来からの図書・雑誌の収集，これらの資料の組織化，およびその提供という面を主体とした図書館学を構成する諸要素を，情報の流通の中での図書館の役割り，機能という面から関係づけて，この分野全般の枠組と，そこに含まれる諸問題間の関連を理解させるように，すべての主要な事柄について，少くともその概略にふれるか，それらに到る道筋の糸口を紹介し，学生が2年，3年，4年で修める専門教育へのしつかりした基盤を作り得るようにすることを考慮して，その内容が決められている。

前述のように，実際の内容は，図書館・情報学科の何名かの教員の協力によって編集されたシラバス（附録参照）に従い，その章だての順を追って各項目とその項目に関係する諸問題を追求してゆく。

即ち，

第1章　情報と図書館
　1．1　情報の概念と特性
　1．2　記録情報
　1．3　図書館の意義と概念
第2章　図書館・情報学
　2．1　図書館学
　2．2　ドキュメンテーション
　2．3　図書館・情報学
第3章　情報の発生から利用まで
　3．1　情報の発生
　3．2　情報の記録
　3．3　情報の収集
　3．4　情報の蓄積・検索
　3．5　情報の配布
　3．6　情報の利用
第4章　情報システム
　4．1　情報システムの概念
　4．2　情報システムの分析と設計

4．3　情報システムの評価
4．4　情報システムおよびネットワークの種類
4．5　情報システムとしての図書館および情報センター
第5章　図書・図書館の発達
5．1　図書の発達
5．2　図書館の発達
5．3　現代社会における図書館・情報センター
第6章　図書館の構成
6．1　図書館資料
6．2　図書館職員
6．3　図書館施設・設備
6．4　図書館利用者
第7章　図書館の機能
7．1　資料の収集
7．2　資料の組織
7．3　資料の提供
7．4　参考調査活動
第8章　各種の図書館
8．1　国立図書館
8．2　大学図書館
8．3　専門図書館
8．4　公共図書館
8．5　学校図書館
8．6　特殊図書館
第9章　図書館の協力
9．1　収集の協力
9．2　整理の協力
9．3　相互貸借
9．4　共同保管
9．5　書誌調整
9．6　図書館の統合
9．7　類縁機関との協力
第10章　図書館・情報学関係法規および団体
10．1　図書館・情報学関係法規
10．2　図書館・情報学関係団体
10．3　図書館・情報学関係研究・教育機関

以上がシラバスの章だてであり，この章だてに沿って原則的には毎年違った教員が交代でこの科目を担当してゆく。

上記の章だてを見れば明らかなように，その対象とする範囲は広く図書館・情報学の全分野を包含している。しかし，シラバスが作られてから既に数年を経ているため，文献情報活動の面であるとか，コンピュータの図書館・情報学分野での応用などの面の強調が，現状としては少しおとなしすぎると思われるような点で，時代の移り変りに依って生じた強調すべき点の変化による食い違いなどが，わずかながらも見られる。

さて，この各章の各項目で取上げられる主題であるが，それらもシラバスでその観点，範囲などについてのガイドラインが与えられている。例えば，第1章の最初の項目である1．1の〝情報の概念と特性〟を取り上げてみると，次のように書かれている。即ち，

「情報には種々の学問上の立場あるいは観点から，さまざまな定義が与えられているので，これらの定義を紹介し，さらに情報伝達，情報量，情報の意味および効果の面から情報の特性について解説する。その上で，以下において扱う情報，データ，インテリジェンスについて概念規定をする。」とし，又1．2の〝記録情報〟では，

「情報は記録情報と非記録情報に大別することができる。図書館が扱っている資料は典型的な記録情報源であるが，時間的，空間的制約を排除するこの種の情報源の特性を解説する。」

とし，1．3の〝図書館の意義と機能〟では

「図書館は記録情報を収集・組織・保管し，それを利用に供することを主要な機能とするが，図書館(Library)およびこれに相当することばの語源や語義の解説を通じて，図書館の意義および機能を明らかにする。とくに歴史的・社会的条件のもとで，図書館の機能がどのように発揮されているかを説明する。」としている。

このようなガイドラインに沿って，この科目の担当者はそれぞれの主題を自分の考えに従って展開してゆく。

例えば48年度のこの科目での，この主題の扱いは次のとおりである。

第1章　情報と図書館
1．1　情報とは
1．1．1　定義および特徴
1．1．2　種類及び傾向
1．1．3　情報の重要性
1．2　文献情報（記録情報）
1．2．1　定義及び特徴
1．2．2　種類及び傾向
記録情報と非記録情報(口頭による情報の伝達など)
一次資料と二次資料，文字情報とその他

の記録情報，ニュース的情報と知識として蓄積される情報

1．2．3 Invisible college と文献情報

1．2．4 書誌調整

1．3 情報の流れ

1．3．1 情報の流れとは

1．3．2 口頭情報と文献情報

1．3．3 口頭情報からコンピュータ化された情報のネットワークまで，

1．3．4 情報要求者の needs と情報の流れ

1．3．5 情報の流れのパターン

1．4 図書館とは

1．4．1 定義及び特徴

1．4．2 数及び種類

1．4．3 図書館の目的と機能

1．4．4 機能の変化

1．4．5 情報の流れの中における図書館・情報センター

ここで見られるように，ガイドラインに沿って，しかし担当者の考えも入れて内容の肉づけをしている。つまり，ガイドラインには特に情報の流れという項目は入っていないが記録情報としての文献情報を浮彫りにするために，非記録情報としての口頭による情報の伝達と対比させ，更に，最新の情報が記録され，組織化される一連の仕組みを情報の流れとし始めの段階で紹介しておくことの重要性を考えて，これを取上げている。

もう1つ，第3章の〝情報の発生から利用まで〟の中の3．3〝情報の収集〟を例にあげてみる。シラバスでは，

「各種の情報源のうち，情報収集の対象として，記録，情報源がどのような位置を占めているかを明らかにし，さらに一次情報と二次情報の意義を検討し，それらを選択，収集する有効な手段について解説する」

としているが，これを実際に取扱うときは，現在の，この科目の担当者として次のような内容と順序でこの主題に取組んでいる。即ち，

3．3 情報の収集

3．3．1 情報収集と記録情報

3．3．1．1 生情報と記録情報

3．3．1．2 ニュースと知識としての記録情報

3．3．1．3 記録情報の種類

文献情報として→文献
スライド
マイクロフイルムと
マイクロフイッシュ
地図
製図
その他
} visual

レコード（ディスク）
テープ
ラジオ
その他
} audio

ビディオ
テレビ
映画
その他
} audio-visual

3．3．1．4 図書館における資料

文字情報→文献→印刷物

AV 資料

生涯教育と AV 資料

広報活動と AV 資料

その他

3．3．2 一次資料と二次資料

3．3．2．1 定義

3．3．2．2 一次資料の種類

雑誌

研究報告書

特許資料

学位論文

モノグラフ

その他

3．3．2．3 二次資料の種類

a 索引誌，抄録誌類

内容短縮

探索のための道具

リスト

b ハンドブック，データブック，便覧

c 名簿類（機関及び人名）

d 辞書，百科辞典類

e 教科書，その他

3．3．2．4 一次資料収集の問題点

3．3．2．5 二次資料収集の問題点

としている。

ところでここに，注目すべき点は，前の例の記録情報としての文献情報の中でも既に一次資料と二次資料ということに，わずかではあるがふれているのに，又この〝情報の収集〟の項で再び一次資料と二次資料を取上げて

いる点である。一見して無駄な重複のように見えるが，前者で文献情報の説明として軽くふれたものに対して，後者ではこれをより丁寧に説明している。しかも，第6章の図書館の構成の中の 6. 1 の〝図書館資料〟のところで又これら一次資料や二次資料について異った角度からふれることになるが，それぞれ取扱う観点が少しずつ違っていることから必要な繰り返しであると考えられる。勿論，扱い方によっては全く無駄な重複にもなりかねないから，気を付けてそれぞれの章での観点を明白に出してこれを取扱う必要がある。

同様な重複は「概論」という性格上，図書館・情報学の諸問題をいろいろの角度から取扱うため避け難い。それで，それらのすべての重複についても，その事柄を扱うときに，同様の注意が必要である。

この科目の全体の構成は，シラバスの概要の部分で明らかなように，第1章で情報と図書館を関連ずけ，第2章で図書館学やドキュメンテーションの定義を紹介しながら，情報と図書館というものをどのような立場から追究するのかという点を明らかにし，第3章で記録情報の流れと，それぞれの段階で起る問題を取上げ，第4章で図書館活動をシステム論の角度から検討する。即ち第1章から第4章までは第5章以下の情報という観点からみた図書館学の各章に入る前の準備として，情報であるとか，システムであるとか言った新しい考え方を紹介する部分である。

第5章は図書館の歴史，第6章は図書館の資料，職員，施設，利用者などの事柄を通して，現代の図書館サービスの特性を浮彫りにすることを狙っており，第7章で記録情報としての図書・資料というものの収集・組織・保管・利用などの機能を説明し，第8章で各種図書館の特徴を明らかにする。そして第9章の図書館間または類縁機関との間での協力活動と最後の図書館・情報学関係の法規と図書館関係の団体についての章で終っている。

B. 教育方法

この科目の教育は①シラバスに沿って行なう講義と，②関連文献を読む宿題と，③東京都内の幾つかの代表的な図書館の見学の3つの方法を併行使用する。

この科目が情報の流れというものの中での図書館の役割り，機能の全体と，そこで使用される新しい諸技術など，図書館・情報学科で学ぶすべての事柄の基礎となる部分を広く包含することになっているので通年科目ではあるけれど，時間的に充分余裕がないので，必然的に講義に頼ることになる。しかし，その講義も教える人次第で内容が変るようでは困るし，又取上げる個々の主題に偏りがあってもいけないので，教員数名が協力して編集したシラバスを使用して，それに沿って講義を行なっている。

講義で充分扱いきれない主題や，又重点を置きたい主題については関連文献を読ませることによって，その不足を補っている。例えばシラバスで充分扱っているとは言いかねる情報検索といった主題については，特定の図書を指定して読ませるということを行なっており，更に学生にそれらの文献を充分に丁寧に読ませることを目的として，読んだ部分の抄録を提出させる宿題を継続的に出している。勿論シラバスにも参考文献のリストがつけられているが，これは作られてから数年のずれがあるために，年々修正したリストを使用する必要がある。

科目を履習する学生は，図書館・情報学の専門科目に初めて接する2学年の学生であるため，ほとんど全部の学生が図書館学の常識的な知識も持っていないし，多くの場合，図書館そのものについても何も知らない。従って講義を聴くにしても，文献を読むにしても，皮相的な理解しかできないという弱点を補うために，館種の異る活発に活動している図書館を幾つも見学させて，漠然とでも皮膚感覚で「図書館とはこんなもので，そこで行なっているサービスその他の活動はこんなものなんだ」ということを知る機会を与えることにも努力している。

そしてもう一つの教育方法での特徴は，原則的には毎年担当者を交替させることによって，マンネリ化や，取扱う主題内容が，担当者の好みや能力によって偏りが生ずるといったようなことが行なわれないようにと考慮が払われている。

C. 問　題　点

この科目を取る学生達は，図書館・情報学科については全く予備知識も持っていない場合が多く，興味も持っていないものすら居る。そのような学生を教育・指導するには，科目の担当者が各々の授業時間に取扱う種々の主題に充分に精通していて，とまどったり，躊躇したりせずにぐいぐいと学生達を取扱う種々の主題に充分にひきずり込んでゆけるだけの迫力を持っていけなければならない。しかしながら，図書館・情報学の分野も最近急激に発展しているので，対象分野もひろがり，そこで扱われる諸問題も複雑多岐にわたるようになってきている。従って誰も1人では自信を持ってすべての主題について学生を教育・指導していけなくなっている。この事実がこの科目での最大の問題であろう。

又，学生が自分で文献を読んで，この分野全般にわた

っての基礎的な知識を手に入れようとしたとしても，すべての対象範囲を1冊で包含しているような秀れた教科書は未だ存在していない。従って個々の主題について書かれている断片的な雑誌論文や，図書館・情報学の一面又は一部分だけを論じている書物の類に頼るしか方法がない。

この科目のシラバスは，前述のように何人かの専門分野を異にする図書館・情報学科の教員によって協同で編集されているため，バランス良く万遍なくすべての関連主題が取扱われている。しかし，このように濃淡がなく全ての主題にふれているシラバスは，一面それに沿って授業を進めてゆく場合に，担当者の持ち味を充分に生かすことのできない固苦しい枠組となり易い。そして授業そのものが，すべての関連主題の表面だけをなぜて通るような，味気のないものになってしまう危険がある。もしこの時，この科目の全部分を包含する，しっかりした教科書が存在すれば，担当者はシラバスで取上げられている主題全部をもれなく論じなければならないという負担を，それ程強く感じる必要もなく，従って，強調したい主題に重点を当ててゆくことができ，科目全体が抑揚のない味気ないものになってしまう危険をさけることができるであろう。

「概論」の段階での見学は，見学する対象を特定の事柄に絞ることができないので，あらかじめ見学対象の図書館について説明を行なう場合にも焦点がしぼりにくいという問題がある。いま一つの問題点は，見学に使う時間の確保のむずかしさである。まず第1に，この科目で扱うべき主題全体をこなそうとすれば授業時間も上手に使わなければならず，常に時間の不足を感じさせられる。それにもかかわらず何回かの授業時間をさいて図書館の見学を実行するのは時間のやりくりを非常に苦しいものにしてしまう。しかも一回の授業時間の中で一つの図書館の見学を行なうのは，行き帰りの時間を考慮した場合ほとんど無理である。従って，前後の時間のどちらかを借り受ける必要がある。これが更に全体の時間のやりくりを苦しいものにしてしまう。即ち，見学は明らかに効果のある授業であるけれども，時間の配分から言って高価につく方法であるとも言える。

D. 将来の改善策

まずこの科目の第1の問題点である1人の担当教員の知識の範囲を超える広い対象分野を扱わなければならないことについての改善策としては，科目全体に対して責任を持つ担当者を一人決めるにしても，他の教員も，それぞれの専門の事柄を扱う時間は協力分担し，場合によっては，外部からの専門家の応援を頼むことによって，担当教員が，自分の充分に知らない事柄までも無理して講義しなくてもすむようにすることが考えられる。しかしこの場合，担当教員が協力して貰う教員と充分に相談し合いつつ，科目全体の構成がモザイクのようになってしまわないように注意する必要がある。又手伝って貰う教員が同じ時間帯に，他の科目を持っているという事がないように時間割りを組むときに注意しなければならない。もしこれらの点を上手に行えばこの「概論」は，一本調子の皮相なものになる心配もなくなり，初めて図書館・情報学の専門科目に接する学生達にとっても変化のある，興味のある科目になり得る。

全面的に講義という形式の教育方法にのみ頼る欠点を補うためには，関連論文を読ませる宿題を充分に学生に与え，興味を持った事柄についての知識を自分で追究することが出来るような方法を充分に併用するのも一法であるが，読んだ論文の抄録を書かせたりすることによって，熟読玩味させる方法などを併用することも必要であるし，又時間さえ許せば幾つかのグループに分けて，各々のグループに異った問題を与えて，それについて調べてきたことを発表させるといった方法などを取り入れて変化を持たせることも効果があるかも知れない。

しかし，なんといつてもこの科目改善の中心は，シラバスを基にして，これを肉ずけし，一冊の教科書を作り上げることにより，学生が図書館・情報学の全体を摑み易くすることであろう。ただこの場合，とても一人の教員で，対象となるすべての事柄を正確に書くことはむずかしいので，何人かの教員で協同執筆する必要があるであろう。

講義を進めてゆくに当っては，取上げる主題に関係のある図書館・情報学の諸科目との関係というものを指摘して行くことが出来たら，この学科の「概論」としてはより効果的であろう。従って，シラバスの中でもその点を指摘しておくと便利である。

見学は多い程望ましいと思うが，問題は時間の配分と，見学を行なう時期である。ただ漫然と図書館活動全体を紹介するために見学を行なうのでなく，講義で取り上げた主題を例示することに眼目を置いて，これを行なったらより効果であろう。一回の見学は通常の授業時間の長さでは，時間が足りなくなる恐れがあるので，この科目を時間割りの中に組入れるときに，その前後の時間が必要に応じてこの科目のために使い得るような配慮が出来

ると便利である。

以上の改善点のすべての基になるのは，学生にこの図書館・情報学の面白さをなんとか理解させようという科目担当者の心構えと努力であろう。　（津田良成）

附　　録

図書館・情報学概論：シラバス

概　　要

第1章では，図書館・情報学の対象概念として，情報と図書館をとりあげ，その意義，特性を明らかにすることによって，両者の関連を捉える。第2章では，図書館・情報学がこれらの対象をどのような立場から考究しようとするものであるかを明らかにするために，まず図書館現象を対象とする図書館学の主要な定義を紹介する。図書館学の方法は多様であり，その見解も多岐にわたるが，その研究方法は狭い図書整理技術の枠内に閉塞されていたといってよい。ところが，20世紀中葉以来，記録情報の増大と多様化に伴って，情報利用の立場から，それらの情報資料を処理する専門的な技術としてドキュメンテーションが脚光を浴びるに至った。しかし，ドキュメンテーションにおいても，その一連の技術を支える十分な科学的基礎の探求という点では，必ずしも成功しているとはいえない。このような状況にあって，図書館・情報学は情報学的アプローチを導入することによって，理論的基盤を求めその上に立って図書館学，ドキュメンテーション技術の高度化を図っている。

情報学は情報の発生から利用までの一連のプロセスにおける原理の追求を一つの主要な目的としているので，第3章では，主として記録情報の流れを考慮しながら，各処理段階における個別的問題を検討する。このような個別システムが有効にはたらくためには，相互に有機的な関連を保ちつつ，それぞれの機能が発揮されなければならない。したがって，第4章では，システム概念をとり入れ，情報システムにおけるサブシステムの相互の関連を明らかにし，さらにトータル・システムとしての図書館，情報センターなどを中心にすえて，そのシステム上の問題を解説する。

ところで，情報化時代にさしかかったといわれる今日，図書館は大幅な変革を迫られているが，それは本来果すべき図書館の社会的役割が一層重要になったことのあらわれでもある。今後図書館が進むべき方向を誤らないためには，これまでの図書館が各時代に果してきた社会的役割を理解しておく必要があるので，第5章では，内外の図書館の発達史とともに，それと密接な関係をもっている資料の変遷を簡単にたどることにする。その上で，第6章において，図書館資料，職員，図書館施設，利用者などの面から現代の図書館の特性を検討する。

さらに，第7章では，記録情報を収集，組織，保管し利用者に提供する典型的な機関としての図書館をとりあげ，その機能を明らかにするために，資料の発注・受入れからその配架・格納にいたる一連の作業手順に十分留意しながら解説する。

図書館の機能のうちでも，対利用者活動は図書館その他情報サービス機関の性格によって大きく制約されるので，第8章では各種図書館の具体例を紹介しながら，その機能，利用者の面から館種の特徴を明らかにする。その際，館種にかかわる経営上の諸問題にも当然言及する必要がある。

また，個々の図書館がどのように充実していようとも，それには自ら限界があり，孤立していたのでは十分な機能を発揮することはできない。したがって今日では，図書館が他の図書館あるいは類縁機関と協力体制を整え，連携強化を図る気運が高まってきている。そのような意味から，第9章を設けて協力の問題を扱うことにした。

最後に，第10章において，図書館・情報学関係の法規と関係団体をとりあげたが，これらは今後図書館・情報学の研究を進める上での資料として役立つよう意図されたものであり，参考文献とともに研究の指針を与えるはずである。

1.　情報と図書館

1．1　情報の概念と特性

情報には種々の学問上の立場あるいは観点から，さまざまな定義が与えられているので，これらの定義を紹介し，さらに情報の伝達，情報量，情報の意味および効果の面から情報の特性について解説する。その上で，以下において扱う情報，データ，インテリジェンスについて概念規定をする。

1．2　記録情報

情報は記録情報と非記録情報に大別することができる。図書館が扱っている資料は典型的な記録情報源であるが，時間的・空間的制約を排除するこの種の情報源の特性を解説する。

1．3　図書館の意義と機能

図書館は記録情報を収集・組織・保管し，それを

利用に供することを主要な機能とするが，図書館(Library) およびこれに相当することばの語源や語義の解説を通じて，図書館の意義および機能を明らかにする。とくに，歴史的・社会的条件のもとで，図書館の機能がどのように発揮されているかを説明する。

2. 図書館・情報学

2. 1 図書館学

〝図書館学〟は〝Library Science〟とか〝Bibliothekswissenschaft〟の訳語として使われはじめたものである。したがって，これらの語義について解説を加え，図書館学の主要な定義の発展系譜をたどり，あわせてこれらに対する諸見解を紹介し，図書館・情報学を検討する手がかりを求める。

2. 2 ドキュメンテーション

ドキュメンテーションということばの使用は多岐にわたり，その意味がさまざまに解されているが，ここでは主要な定義を紹介，その発展系譜をたどり，ドキュメンテーションと図書館学とがどのような関係をもっているかについて解説する。

2. 3 図書館・情報学

生物学，心理学，言語学などの研究が進展し，情報の問題に総合的検討が加えられ，新しい総合科学としての情報学の確立が目指されている。しかし，情報学というのは現在のところ一つの学問分野をあらわすというよりは新しい研究方法をさすといった方がよい。したがって，立場によって情報学の定義もさまざまであるが，その主要な定義を紹介し，図書館学，ドキュメンテーションの技術を支える情報学の理論と技術は何かを明らかにし，図書館学と情報学の両面からのアプローチを目指す図書館・情報学について解説する。

3. 情報の発生から利用まで

3. 1 情報の発生

情報は自然的に発生する場合と，人間の創造性によって意図的に生産される場合に大別できる。ここでは調査研究，実験観察，見聞などによって新知識を獲得したり，新理論を構成したり，創作をしたりする人間の知的活動としての情報の生産の問題を中心にとりあげる。

3. 2 情報の記録

情報と情報源との関係，さらに情報の記録化の意義を明らかにする。とくに，記録の諸手段を比較検討し，記録情報源の特性を解説する。

3. 3 情報の収集

各種の情報源のうち，情報収集の対象として，記録情報源がどのような位置を占めているかを明らかにし，さらに一次情報と二次情報の意義を検討し，それらを選択・収集する有効な手段について解説する。

3. 4 情報の蓄積・検索

情報の蓄積・検索の意義を明らかにし，情報の種類，利用目的などに即して講じられる蓄積・検索上の諸手段および検索システムについて解説する。とくに分類概念を明確にする。

3. 5 情報の配布

各種の伝達形式，表現様式をとる情報配布の方法をとりあげて解説し，それぞれの特色について，情報要求との関連において検討を加える。

3. 6 情報の利用

情報要求をもつ利用者の種類およびその要求の動機，型などを明らかにし，適切な情報提供手段を講じる必要のあることを述べる。なお，情報の利用はしばしば情報の創造を目的としていることについても言及する。

4. 情報システム

4. 1 情報システムの概念

システム概念に関する諸見解を紹介した上で，情報の発生から利用までの一連のプロセスにかかわる情報システムの基本概念を明らかにする。

4. 2 情報システムの分析・設計

システムを情報の側面から捉えたのが情報システムであると考えられるが，このようなシステムの分析および設計の必要性を述べさらにその手法について解説する。

4. 3 情報システムの評価

経済性，迅速性，生産性その他の効率の面から情報システムを評価する必要があることを明らかにし，各種の評価手段を紹介する。なお情報の価値評価は著しく困難であることについても言及する。

4. 4 情報システムおよびネットワークの種類

システムの下位概念としてのサブシステム，上位概念としてのスーパーシステムの相互関連について，情報システムの場合をとりあげて説明する。さらに，個別システムによって形成されるネットワークの種類についても説明する。

4．5　情報システムとしての図書館および情報センター

典型的な図書館および情報センターの具体例をとりあげ，情報システムとしての観点から分析し，評価を加え，その経営管理上の基本原則を明らかにする。

5．　図書・図書館の発達

5．1　図書の発達

粘土板，パピルスなどの古代の図書から今日の図書にいたるまでの図書の形態的変遷をたどり，それぞれの機能と図書館に及ぼした影響について解説する。なお，印刷術の発達によって図書その他の印刷資料が急速に増大したことおよび各種のコミュニケーションメディアの多様化したことが人びとにどのような影響を与えてきたかを明らかにする。

5．2　図書館の発達

古代以来，現在にいたるまでの図書館の発達のあとを概観し，各国の主要な図書館の沿革を紹介し，図書館が資料の保存機能に加えて，利用機能の充足に関心を払うようになってきたことを明らかにする。なお，図書館の発達に貢献した歴史上著名な図書館員，収集家その他の人びとも紹介する。

5．3　現代社会における図書館，情報センター

科学技術の進歩によってコンピュータ，通信機器その他の機械が高度に発達し情報の大量処理，大量伝達が可能になったことと相まって，社会が拡大し複雑になったために，情報に対する人びとの要求は著しく増大した。このような現代社会の特性を述べ，情報化社会，都市化社会に臨むべき図書館および情報センターのあり方を検討する。

6．　図書館の構成

6．1　図書館資料

図書，逐次刊行物，パンフレットその他の印刷資料およびフィルム，テープ，ディスクなどの視聴覚資料，さらにマイクロ化資料の種類をあげ，形態，内容の両面からこれらの特性を検討し，あわせて図書館資料の生産・流通機構にかかわる諸問題，関係者などについて解説する。

6．2　図書館職員

知的専門職(Profession)としての図書館員の社会的位置づけを明らかにし，その社会的使命について理解を深めるとともに，そのための専門的知識および技術の必要性を説く。なお，その資格に関連して，非専門職としての事務系・技術系職員との職能分担についても言及する。

6．3　図書館施設・設備

図書館の機能を十分に発揮できるような図書館建築の必要性を述べ，新築・改造の際の基本的留意事項について解説し，世界の代表的な図書館建築物を紹介する。なお，あわせて図書館において不可欠な設備・備品などにも言及する。

6．4　図書館利用者

図書館は利用者あってはじめてその存在価値を認められるものである。その観点にたって図書館活動の対象となる利用者を意味するコミュニティーの特性要求を把握認識する意義について解説する。

7．　図書館の機能

7．1　資料の収集

蔵書の構成を目的とする資料の収集において，個々の資料の評価・選択が重要であることを明らかにし，選択方針にかかわる諸要因，選択機構，発注，受入れ以後のプロセスについて解説する。あわせて，蔵書の評価，資料の廃棄などの問題にも言及する。

7．2　資料の組織

図書館資料の有効な保管と利用を目的とする資料の組織の一般原則を明らかにし，各種の分類・編成方式の決定にかかわる諸要因を検討する。さらに，図書館資料を活用するための検索媒体の種類と特性を明らかにし，とくに蔵書目録作成上の問題を中心にすえて，記述・編成の基本を解説する。

7．3　資料の提供

図書館資料を利用するための閲覧・貸出し業務および主要な貸出し方式について説明する。なお，今日では図書館資料自体の貸出しの代りに，資料を複製して提供する複写サービスが盛んに行なわれているので，これを貸出し業務との関連において解説する。

7．4　参考調査活動

レファレンス・ワーク，読書相談および資料に基づく各種の能動的情報サービスの意義を明らかにする。さらに，これらの閲覧・貸出し以外の利用者援助サービスが多様化しつつあることを，各種のサービス様式を紹介することによって明らかにする。

8．　各種の図書館

8．1　国立図書館

国内刊行物の収集・保存センター，書誌センター，国際的資料交換センターなどとして，全国民に奉仕する国立図書館の中央館的機能について説明する。また，その代表例を紹介して経営上の問題を指摘し，あわせて納本制度，立法・行政機関へのサービスなどにも言及する。

8．2　大学図書館

大学における教育と研究の二大目的の達成に資する大学図書館の意義と機能について，代表例を紹介しながら説明する。また，大学の組織と学内の各種図書館の調整の問題，その利用者の類型と要求の傾向などを考慮し，経営上の問題点を指摘する。

8．3　専門図書館

研究調査機関，企業体，政府機関などに属し，それぞれの機関の職員の情報要求に資する専門図書館，特定の専門資料を収集・整理して専門的な利用に資する専門主題図書館の意義と機能について，代表例を紹介しながら説明する。また，利用者の要求の特殊性，緊急性などを考慮して，経営上の問題を検討し，あわせて情報センター活動にも言及する。

8．4　公共図書館

文化遺産の継承，情報の提供，地域社会の教育啓蒙，知的娯楽の提供など，公共図書館が果すべき役割を明らかにする。とくに公共図書館では不特定多数の利用者を対象として，閲覧，貸出し，読書相談，館外活動，児童奉仕など，多岐にわたる活動を行なうために，多くの経営上の問題をかかえている。これらの点について代表例を紹介しながら説明する。

8．5　学校図書館

小学校から高校までの教育課程の展開に役立つ図書その他の印刷資料，視聴覚資料などを統合調整し，利用指導をするメディア・センターとしての意義と機能について説明する。また，教員の教材としての要求，児童生徒の学習活動，自由読書のための要求などを考慮した経営のありかたについて実例を紹介しながら説明する。

8．6　特殊図書館

特殊な生活環境にある人びとを対象に読書資料，視聴覚資料を選んで利用に供することを目的とする図書館のうちから，盲人図書館，病院図書館，刑務所図書館，船員図書館，家庭文庫などをとりあげ，それぞれの機能を説明する。なお，この種の図書館の代表例を紹介する。

9．　図書館の協力

9．1　収集の協力

単独館の資料収集においては，予算，職員，主題分野などの面からの制約をうける。したがって，二つ以上の図書館が協力購入，分担収集を行なうことによって，無駄な重複を避け，より充実したコレクションをつくる必要があることを説き，その実例を紹介する。

9．2　整理の協力

同一地域内あるいは同一組織内の二つ以上の図書館が整理業務を集中化し，資料を一元的に整理することによって他の諸活動が促進されることを説き，とくに，プロセシング・センターの効果と機能について実例をあげて説明する。

9．3　相互貸借

図書館協力の一環として行なわれる資料の相互貸借について，利用者が直接利用する図書館を通して他の図書館の資料を利用できる方法として説明し，図書館相互における現物の貸借，複写による提供の方法を紹介する。

9．4　共同保管

資料の保管スペースを有効に利用するために，利用頻度は少ないが保存しておく必要のある資料について，二つ以上の図書館が協力して収蔵し，必要に応じて利用できるようにする共同保管の方法を説明し，保存図書館の実例を紹介する。

9．5　書誌調整

図書館協力の鍵となる国際的・全国的書誌調整の意義を述べ，総合目録，全国書誌その他の二次資料作成などの書誌サービスにおいて，全国的・地域的あるいは主題領域による協力体制を整える必要があることを説明する。

9．6　図書館の統合

個々の図書館はそれぞれの規模において活動の限界があり，地域的にも主題的にも広範な範囲にサービスや活動を普及させることができない。このような限界を克服するために地方的或は全国的図書館組織の統合が進みつつある。実例をあげてその意義について解説する。

9．7　類縁機関との協力

図書館がコミュニティーの有効な情報源となるためには，類縁機関との協力が必要である。各種の研究調査機関，サービス機関，博物館，公民館等の機

関と協調し，図書館本来の機能をどのようにして発揮すべきであるかについて検討する。

10. 図書館・情報学関係法規および団体

10. 1 図書館・情報学関係法規

図書館・情報学関係の主要な法律，規則をとりあげて簡単に解説する。なお，あわせて主要な勧告，答申，実態調査報告などについても言及する。

10. 2 図書館・情報学関係団体

国際的・全国的図書館・情報学関係団体の設立目的，沿革，組織構成，活動現況，主要刊行物について説明する。

10. 3 図書館・情報学関係研究・教育機関

日・米・英・独・仏などの主要な研究・教育機関をあげ，各国における研究・教育の変遷を概説し，それぞれの教育制度の違いにも言及する。

II. 原 典 講 読

は じ め に

一年間の教養課程を終了し，図書館・情報学科に進んだ文学部学生が，2年次に履習する必修科目として，「原典講読」(以下「原典」と略称)，「図書館・情報学概論」(以下「概論」と略称)，「資料組織概説」，「情報システム概説」，「参考調査資料」の5つがある。このうち，「原典」は通年科目で，2単位が与えられており，「概論」と共に進級条件科目であるため，2年次に必ず単位を取得することが義務づけられている。これは，「原典」と「概論」が，その他の専門科目を履習するために，欠くべからざるものであることを示している。したがって，この点を考慮して「原典」がどうあるべきかを，「原典」の目的，他の基礎科目との関連，授業方法などの面から以下に論じていくことにする。

A. 目　　的

「原典」では，図書館・情報学に関する基礎文献の講読を行う。[1] これは，テキストとして与えられた著名な原著論文を，学生各自が読み，それを理解する能力を養うことと同時に，その過程を通じて，この分野を構成する重要な概念を習得することを意図するものである。したがって，「原典」の目的は次の2つと考えられる。

1. 新しく当学科に進学した学生が，図書館・情報学および図書館活動の，領域，性格，特色，意義などをおおづかみできるように，この分野に対する目的意識，知的関心，興味を深めること。

2. 外国語で書かれた著名な文献を読み，専門用語を理解することを通じて，原著論文を読解できる能力をつけること。

もともと図書館・情報学では，抽象的な側面よりも実際的な側面が強い。これは，この分野が，図書館活動と密接に結びついているためである。当学科は，文学部の他の専攻学科に比べ，実社会との結びつきは強く，授業内容にもそれが反映されている。一方，象牙の塔ということばでしばしば代表されるように，日本においては，抽象的な概念で包まれたものや，実社会とかけはなれたものを，大学から求める傾向がある。このため，当学科の授業内容に，とっつきにくさや違和感を感じる学生がいる。とくに，図書館活動および図書館・情報学に関して，充分な予備知識，知的関心，あるいは目的意識を持たずに，当学科へ進学した学生の中に多くみられる。学士入学や編入学の場合を除き，1年の終りに各人がそれぞれの進むべき専門課程を，決定せねばならない現制度の影響も大きい。

アメリカでは，実用的な知識や技術の提供も，大学の大きな使命と考えられているため，図書館・情報学の授業に関して，既述したような違和感はない。また，日本とは異なり，アメリカにおける library school (図書館学科) のすべては，大学院課程であり，他の分野の学部課程を終了した学生が，各人の専門分野を基礎として，図書館活動に専心する意図を持って library school に入ってくる。さらに，library school と図書館界との結びつきが非常に密接であり，実務に従事する図書館員が，容易に library school で授業をうける機会が与えられているため，library school には常に外界からの刺激がある。このため学生は，高い目的意識と知的関心を持ち，勉強に励むことになる。

学生の意識あるいは関心に大きな差があるわが国では，まず，この意識や関心を植えつけ，伸ばすことが必要である。しかも，専門課程に入った時点で，それが始められるのが適切である。この意味から，専門科目群の基礎となる科目の一つである「原典」で，その第一歩がなされるのは有効であろう。したがって，「原典」で取り上げる教材としては，図書館活動，情報サービス活動および図書館・情報学分野の研究領域を概観するもの，ならびにそれらに関する理論や原理をあつかうものに，重点をおくのが適当である。これは，当学科の目標が，すぐに役立つ図書館実務の知識や技術を習得させることよりも，図書館活動に身をおき，具体的な問題に直面した場合に，有効適切な判断を下す能力を養うこと[2] か

らも妥当である。

また，語学能力を高めることも，「原典」の目的である。歴史的に，図書館・情報学分野のすぐれた研究および活動の多くは，アメリカならびにイギリスを中心に行なわれてきたため，すぐれた単行本や論文の多くは，英語で書かれたものである。したがって，専門科目の授業および卒業論文作成において，英語文献を参照することは必須であり，原著文献をさしたる困難なしに読解できる能力を持つことが重要である。このため，「原典」では量的になるべく多くの文献を読ませ，原著文献を読むことに慣れると共に，文献中に現われる専門用語を理解させるよう指導する。

ところで，アメリカには，当学科の「原典」に対応する科目は一般に存在しない。つまり，「原典」は，わが国における図書館・情報学や，図書館活動の歴史およびその特殊性から生まれたといえる。したがって，「原典」の授業を考える際には，この歴史や特殊性と，日本の大学教育の性格を考慮する必要がある。

B. 他の基礎科目との関連

図書館・情報学科の基礎科目として，「原典」，「概論」，および「図書・図書館史」（以下「歴史」と略称）があり，「原典」と他の基礎科目との関連を考える必要がある。

この中で，「原典」と「概論」との関連を考慮することは，「原典」の授業を進めるにあたって特に重要である。「概論」では，情報の生成，伝達，変換，蓄積，検索および資料の収集，組織，保管，利用という一連の過程にかかわる原理および技術を，相互に関連づけながら検討し，さらに各種の資料を専門的に扱う図書館・情報センターの類型・機能などについて概説する。つまり，記録情報が我々の社会でどのように生まれ，処理され，将来の利用のため蓄積され，利用されるかを，系統的に把握させるのが，その意図である。その他の各専門科目は，この系統的な流れの中の各部分を，それぞれ深く追求していくものであり，「概論」は，「原典」よりも各専門科目とのつながりが強いといえる。

これに対し「原典」は，各専門科目への直接の導入部と考えるよりも，図書館・情報学全体への広汎なオリエンテーションの役割を果すものと考えられ，授業の進め方にかなりの融通性が認められる。したがって，単に図書館・情報学に関する知識や専門用語を習得させるだけでなく，著者の考え方，理念，アプローチ，および図書館・情報学の理論および原理の基礎的な実例などにもふれる。しかし，「原典」を「概論」と全く独立に進めてよいというわけではない。「概論」でとりあげる重要主題と併行して，関連するすぐれた原著文献をとりあげることが望ましい。[3] たとえば，「概論」で取扱かわれる各重要主題の中から抽出するか，あるいはこれらの重要主題をグループ化するかして，最終的に5つぐらいのトピックを選び，それと密接に関連する原著文献を，教材にすることが考えられる。ただ，取り上げるのが原著文献なので，その論文の難易度をも考慮して，「概論」とのつながりを調整する必要がある。

「歴史」との関連は，「概論」とは違った角度で取り上げられる。「歴史」は「……図書館の社会的機能を通史的に考察し，あわせて現代社会における情報センター発達の経緯にも言及する」。[4] したがって，「歴史」との関連は，いわゆる守備範囲を分担するという形で表わされる。つまり，「歴史」の一断面を示す原著文献を「原典」で取り上げることはもちろんあるが，当分野の重要な主題を主として歴史的な側面から言及したものの多くは，「歴史」で扱うことになる。

C. 授業方法

「原典」は，原著文献をテキストとするとはいえ，語学の授業とは異なる。それは，原著文献を理解するにあたって，個々の文章あるいは単語の文法的ならびに解釈の正確さよりは，文献の要旨や専門用語の理解に重点がおかれるからである。

現在は，学生を指名してテキストを章節単位に読ませ，それを訳させる方法をとっている。読みおよび訳の重大な誤りは訂正するが，内容を理解させることを主眼としているため，少々の誤りは無視し，記述されている内容を，自分のことばで表現させることに重点をおいている。そして，この表現の過程で個有の問題点を自然に導き出し，これをテーマとするディスカッションの場を作り出すよう努めている。

理論的あるいは哲学的なアプローチをとる文献を読解するには，主題知識だけでなく，充分な語学力を必要とするが，この分野の文献には複雑な文章構造，あるいは表現を持つものはさほど多くなく，数をこなせば読解力も増し，早く読めるようになるものが多い。しかし，大学の1，2年次で読む外国文献の数は少く，原著文献に接する習慣が，各人に確立しているとはいい難い。このため，テキストを訳すことで手一杯で，記述内容の把握にまでは致らない場合も多い。

専門用語の解説，ならびにテキスト中の重要な個所やそれと関連する事柄（たとえば，文献の書かれた意図や

その背景などについての詳細な説明あるいは講義も，授業の重要な部分を占める。これは原著論文の講読だけでは困難である重要概念の理解を容易にするためである。このほか，reading assignment および内容の把握の程度をチェックするためのレポート提出などを課する。試験は，年2回の学期末試験を含めて，数回行なわれる。試験の形式は，設問に対して，答える形をとっているため，テキストの内容を把握することが要求される。また，平常点，つまり出席回数および発表回数なども重視されており，年2回の学期末試験と同じ程度の重みをもっている。

使用されるテキストとしては，各種論文および単行本が考えられるが，論文が使用されることが多く，一冊の単行本でその年度を通す場合は，ほとんどない。現在まで，英語文献のみがテキストとして使用されているが，これは，他の言語で書かれた文献は不適当という意味ではない。この分野の発展に合わせて，英語文献以外でもテキストに採用する必要があろう。ただ，現状は，技術的に困難な状態にある。テキストは，毎年異ったものを使用するが，その選択は担当者にまかされている。使用されるテキストの数は，年間約 4～6 件である。これだけで，「原典」の目的を達成することは困難であり，reading assignment およびレポート提出で，カバーしている。

D. 問題点と対策

実際的内容のものに違和感を持つ学生の傾向を考えれば，その良し悪しは別として，この学生気質を把握し，まず，図書館・情報学の科学的あるいは理論的側面を理解させ，この分野に対する知的関心を高めることが必要である。ところが，バトラーがその著作 *Introduction to library science* の中で述べているように，図書館人はこの分野の科学的側面にふれることを，さけてきたきらいがある。[5] このため，理論的あるいは科学的側面を扱う文献が，多いとはいえない。また，少々難解な文献を教材とすれば，語学力の不足から，内容を充分把握できないこともある。したがって，この分野の科学的あるいは理論的側面にふれさせようとする意図と，語学力とのバランスをどうするかは，テキスト選択に関しての問題点の一つである。

バランスをとるための一手段として，副読本の使用が考えられる。たとえば，既述した Butler の本は，図書館学を専門とする学生にとってこの分野に対する理解を深めるのに役立つ図書であるが，「原典」の教材とするには，語学力から考えて少々無理である。したがって，難解な重要文献の日本語訳を作り，副読本として使用すれば，「原典」の効果を高めると思われる。

既述した目的に沿うためには，適当な文献を選択し，それを読ませ，専門用語および付随する事柄の説明をするだけでは充分でない。選択された文献の中から題材を選び，それについて討論させたり，発表させる機会をもっと積極的に取り入れる必要がある。また，スライドや映画などのAV資料の利用，講演，および見学なども検討すべきであろう。　（細野　公男）

1) 慶応義塾大学文学部図書館・情報学科. **要覧**, 昭和 47-48 年度. p. 28.
2) *ibid.*
3) 長沢雅男. "図書館・情報学の教育". *Library and information science* no. 10, 1972, p. 9.
4) 慶応義塾大学文学部図書館・情報学科. *op. cit.*, p. 28.
5) Butler, Pierce. *An introduction to library science*. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1961. 117 p.

III. 図書・図書館史

A. 学科要覧にみられる推移の概要

学科開設の当初にあたり，この科目を担当されたのは，コロンビア大学図書館学校の訪問教授 Bertha M. Frick 女史である。女史は，目録・分類の専門家であるが，同校では"図書と印刷の歴史""図書と図書造りの歴史"[1] を永年講義され，アメリカ図書館界で愛書家として有名な方である。1951/53 年にはフリック女史の教え子の Jean M. Moore 夫人が担当され，1953/54 年には Ruth Strout 夫人（現在 Carnovsky 夫人）が担当，そのあとを中村が担当している。R. L. Gitler 主任教授以来の原則"担当科目は常に変更の対象たらしめること"からいうと，あまりに　固定してしまった観がある。[2] この科目は講義科目2単位で，後期に毎週2回（50分）行なわれていた。学科は当初は，1年期間の訪問教授が主体となっていた関係もあり，図書館学関係の科目はすべて1年間に集中されていた。[3] 図書館学関係の科目（専攻専門科目）が2年間に分散されるようになってからも，週2回（後期のみ，または前期のみ）の講義は当分の間続き，通年になったのは 1960/61 年からである。学科が，

文学部の他の学科，専攻と歩調を合せて3年間に専門科目の履習を分散させるようになったのは1962/63年からである。1972/73年からは週1回通年の講義でなくなり，後期週1回（90分）の講義となった。

この科目は1961/62年までは選択科目であったが，1962/63年以降は必修科目となっている。[4] 最初のうちは，学部2年生，3年生のうちに履習するようにガイダンスで指導していたが，現在はその制限はしていない。

B. フリック女史の扱い方

まずその概要9項目を紹介してみよう。

文字の起源　スメリア，バビロニア，エジプト，中国

アルファベットの起源とその伝播

図書と図書館　東洋と西洋について
中国 9—13 世紀
日本　平安—足利（794—1573）

活字印刷　15 世紀
朝鮮，中国，日本，ヨーロッパ

図書造り　16—17 世紀
ヨーロッパ，アメリカ，インド，日本（天草）

図書造りと図書館　アメリカ 17—18 世紀

中国に於ける図書と図書館　16—18 世紀

図書生産工程の機械化　ヨーロッパ 19 世紀

明治時代における図書館事情（素描と年表）

50分授業30回程度，しかも大半は通訳に時間をとられてしまうことを考慮した場合，この9項目は実に美事に選びぬかれた主要論題であると言えよう。〝何も教えないのも良くないが，何でもみんな教えておこうとするのも良くない〟ということがよく言われるが，〝この論点だけは，学生に重点として印象づけ，そのうちのどれか一つについては関連問題を自分から調べる気をおこさせる〟という列挙のし方である。アメリカの学生にではなく，日本の学生に対しての科目であることもよく顧慮してある。その扱い方については，図書生産工程の機械化，ヨーロッパ 19 世紀以下を例に説明しよう。

フリック女史は，製紙機械の発達，輪転機の発明，またそれを能率的にさせる前提となったステレオタイプ，ライノタイプ，モノタイプなどについて触れ，写真術の導入とか製本術の進歩などを要領よくまとめた上で，次の〝明治時代における図書館事情〟をとりあげている。概要にも「素描と年表」と断わってあるが，これはむしろ，学生達の問題意識を刺激するための時間である。そしてそれがこの科目のしめくくりともなるのである。女史は中間とこのしめくくりのあとで，テストを実施されていたようである。テストは，考える力とこの科目に意欲的に参加していたかどうかをみるための，真偽問題とか名称なり言葉を補足する問題が主であったようである。

参考のためにつけ加えておくが，女史がアメリカのコロンビアで講義するときは〝ヨーロッパ〟といった限定はつけていない。[5] また時間の充分にある，このコースでは，そこで製本術の改善などに触れた機会をとらえ，次の〝19世紀の手しあげ製本と William Morris〟に結びつけている。これは愛書家としての女史としては是非紹介しておきたいところであろう。そのあとで 20 世紀における手しあげ製本術について講義している。英国と大陸（といつてもドイツを例にして）に1回，アメリカ合衆国について1回と割りあてている。〝標準的造本とその良さの規準〟〝稿本が印刷されて本になるまで〝造本についての最近の発展と傾向〟でこのコースはおわっている。中間と最後にテストを課するのは日本での場合と同じである。[6]

フリック女史が，この科目を通じて，学生に何を会得させようとされたかは，要約することは容易ではない。しかし女史が，この「図書・図書館史」に並々ならぬ意欲を燃やしておられたことは想像するに難くない。本国コロンビア大学では同僚 Ray L. Trautman 教授[7] のコースとの関係もあったが，日本では，科目名が「図書・図書館史」となっており，しかも相手は日本の学生であったということも，女史にとっては大きなチャレンジであったに違いない。

図書館員が収集し，整理して，必要に応じて提供出来るようにしておくもの，即ち図書の物質的，外形的構造とか，またその中に含まれている意味内容について知っていることが望ましいことは当然である。その図書館員を志している学生に対して，このコースは何を与えるべきであろうか。すべての目標を列挙しきれるものでないことは，女史は充分に承知されつつも，次の5点を銘記しておられる。

1. 人間の知識や霊感や，有形具体的な記録として表現したものが図書（資料）であるという考えを育ててゆくこと。
2. それは固定した様式・形体のものではなく，古代から現代に至るまで，それぞれの文化・文明の流れにそって，またそれぞれの国の産物・技術に応じて，

もっとも便利で得やすい形をとってきたものであることを学生に会得させてゆくこと。

3. 図書の生産法，その配分，収集法が変化してゆくのは，常に世界史上の主要事件や各文明，各国の技術・工学とかかわり合いを持っていることを学生に考えさせてゆくこと。
4. 図書とは知識・霊感を有形具体化したものであるが，その図書のデザインに見られる趣味の良さなどを鑑賞してゆく審美眼を育ててゆくこと。
5. 世界の図書館がどのようにして誕生し，また衰びていったかを学生に知らせておき，学生が図書館で仕事をするようになってからの判断の参考に役立てること。

C. ムーア，ストラウト夫人らの扱い方

1952/53 年の科目概要は，フリック女史のそれと較べ，あまり大きな差はみられない。しかしそれでも〝文字の起源〟のあとに，〝古代諸文明における図書〟を追加し，中国，スメリア，バビロニア，アッシリア，エジプトにわけて具体的な書名をあげて紹介している。勿論これらの書名は，フリック女史も〝図書と図書館〟の個所で触れたが，後任者は中国については紀元前 6 世紀にまでさかのぼって，範囲を拡げている。[8)]

またフリック女史が，〝図書造りと図書館・アメリカ 17—18世紀〟として横断面を学生に紹介しようとしたところは，〝新世界（大陸）における図書と図書館〟と題し，縦割りで，図書館発達の事情を示そうと試みた。その他は，おおむね，前任者の構成に従って進めている。

1953/54 年の科目概要は，〝すじ〟としては決してフリック女史の樹てたものから外れてはいないが，残されたプリントから判断すると，細目は徹底的にかわっている。

〝文字の起源〟〝古代諸文明における図書〟（ムーア夫人追加）〝アルファベットの起源〟とその伝播に続いて，中国，日本の図書と図書館を多くの時間をあてて紹介している。中国を例にとって紹介すれば，紀元前 207 までの年表を作成，配布しておいて，前漢，後漢，五代，宋，元と時代区分して，学生に調査させたものを発表させるといつた具合に進めていった。日本についても適当に時代を区分して，学生に分担発表させている。それをうけて，ヨーロッパの図書と図書館の発達史（ルネサンスまで）を簡潔に紹介して，そのあとはフリック女史の概要に準じている。

D. 1955/56年以降について

1. 先任者の記録と Alfred Hessel

この年度は 9 月 1 日に私が着任し，10月から後期が初まるのに対し，1 箇月間であわてて作成した概要がのこっている。フリック女史の概要の優れている点は認めつつも，自分の能力を知っていた私は，西洋・東洋と分割しての図書・図書館史として構成することにした。ただ僅かに，最初の 4 章と最後だけはフリック女史の狙ったものが幾分なりとも果せればとの願いをこめて，開始してみた。5 章から 8 章までは，Alfred Hessel の *Geschichte der Bibliotheken* 1925 並びにその英訳（Rouben Peiss 補訳 1950）に大分厄介になった。また討議の時間の前には，Encyclopaedia Britannica Film Inc. の 16 mm フィルム *Writing through the ages* 1 巻（11分）を必ず見ることにした。

a） 文字の起源
b） アルファベットの起源と伝播
c） 古代に於ける図書（材料・文字）
d） ヨーロッパの図書
e） 図書館の発達（アッシリア，ギリシヤ，ローマからヨーロッパ中世迄）
f） いくつかの関連する論題
g） ヨーロッパとルネサンス
h） 17世紀以後の図書館
i） 極東に於ける図書と図書館（中国，朝鮮）
j） 日本
k） 図書館活動と図書館協力の必要（まとめ）

f の細目としては，最初は〝民族の大移動と古典の保持〟〝コンスタンチン帝の遷都〟〝大学の起源〟〝十字軍〟〝托鉢僧団の出現〟〝活字による印刷術の発明とその伝播〟をほぼ同じ時間を配当して扱ったが，1958/59 年からは〝印刷術の発明〟だけに重点をおいて紹介したこともある。

i の中国は，殷から元まで時代を追って紹介したが，重点は，周・秦・漢・唐あたりに置いた。当時は，石田幹之助先生が「和漢図書館資料」と題して，四庫全書（清）についての書誌学的講義をしておられた。

j の日本では，最初の一般論の a～c を反芻するかのように，漢字が入ってきたこと，仮名の発明，図書寮の制度，陀羅尼経開校（764—770）などを紹介した上で，奈良・平安・……と時代を追って図書館や開校（図書出版）の事情を述べていった。その細目を見ると，〝明治

維新と「西洋事情」", "明治以後" "太平洋戦争と図書館" "新らしい図書館の概念の花ざかり" といった表現がある。そのあとがkのまとめになっている。以上の概要紹介だけからみると,いささか唐突の感がおころう。しかし私としては,すじみちをつけた心算であった。hの"17世紀以後の図書館"では,細目をつけて,西洋に関してではあるが,国立図書館の理念,会員制図書館,図書館法,図書館団体,専門図書館,特殊資料・特殊図書館の発達に触れておいて,20世紀になってから図書館協力に対する要望が拡大してきたことを当然の成りゆきとして結論づけた。[9]

最初の3章まではなるべく3人の先任者をみならって講義してみようと計画したが,細部にわたってはその通りにいかなかった。"有形具体的な記録として表現したものが図書である"ということを徹底して考えた場合,文字を原点に考えるのは当然のことであろう。しかし私にはそのまえに言葉だとか,言葉で表現しようとする概念だとか思想の存在についても触れる必要があるように思われた。口頭による伝達では不可能な場合にも伝達を拡大しようということから文字が生れ,文書だとか図書が成立しているのだということは忘れてはならない。それからまた書かれた言葉,文章,思想としての文書も考えてみたいと思った。3人の前任者が"思想伝達の原始的方法"の一つとして,ごく簡単に触れていたことを50分間の講義にひきのばしてしまった。

ヨハネ伝冒頭の"はじめに言葉ありき……"の解釈で言葉は前後の関係(文章では文脈の中に)で解釈すべきこと,部分的真が全体としてみて偽になる可能性のことなどを紹介しだした。勿論誰が如何なる状況下に言ったかも解釈には大きく影響することなども述べた。言葉の背後にある意味・思想にまでふみ込めるとまでは期待しなかったが,それに近づくことにこんな困難が伴うものであるということを学生諸君に会得させたかった。

2. 必修科目になってからの扱い

選択科目であった時にも,折に触れ論じたことはあるが,必修ともなると,"卒業のためには"という自発的ならざる要素が多くなると考えたので,最初の時間に私が学生に対して抱いている期待とか,講義の中にもり込もうとしている努力目標を述べることを銘記した。フリック女史が述べた5つの目標は全部述べておくが,講義そのものは,どうしても図書館の盛衰,それも管理上の参考となると考えられる館種に重点がおかれることが多くなった。また,"図書館と学術の進歩"に触れたり,図書の造本美に関連して,資料源の紹介なども行った。

参考のために, 1962/93年の講義概要をもとに若干の説明をつけておく。

a) 序論
b) 図書・図書館の概念
c) 古代三文明での図書
d) ヨーロッパ中世の図書・図書館
e) 紙の発明とその伝播
f) 金属活字による印刷術の発明
g) ルネサンスと宗教改革
h) 新大陸と図書館活動の発展
i) 国立図書館と納本制度
j) 東洋における図書館の動き
k) 日本における図書と図書館
l) 20世紀の図書館の発展
m) 図書館相互協力の必要
n) 国際書誌調整と学術の進展

bの"図書・図書館の概念"では,東洋・西洋を通じての概念規定に努めた。図書とは今日的に,広義に用い"図書館資料""資料"とも呼ばれていることを明かにし,また図書館も単なる資料の集合体,置き場所ではなくて,"利用を前提として組織化されているもの"という概念を強調した。当然"図書は何が故に求められるか"などに触れ,粘土板の図書館,粘土板の目録・利用規程,さらにパピルスのピナケスから資料交換所・情報センターでの索引組織体系にまで論及した。

cの"古代三文明での図書"は,典籍そのものを知らない私にとっては苦労の種であった。あくまでも"巨人の肩を借りる"[10] 方針をとった。フリック女史の編さんされた関係文献リスト,[11] 内田魯庵,寿岳文章,庄司浅水,田中敬氏等の著書(随筆), Eric de Grolier, F. G. Kenyon, Mikhail Il'in (本名 I. Y. Marshak) 等の邦訳のお世話になったことも多かった。そして1966年に新潮社の新社屋のロビーの壁面に"人類の文字"の浮彫りが出来てからは,その説明パンフレットも活用した。[12]

いつの年度でもとりあげて紹介しておいた実例は,洪水伝説,聖書,プタハホテプの智慧文学,それに中国の石鼓,石経などであった。最古の刊記のある図書という意味で大英博物館蔵の金剛般若経(868)も紹介した。[13] 日本の百万塔陀羅尼経(764—770)については,ブリタニカ百科事典の評価を紹介した。

1961年に，ギリシヤ語で書かれたパピルスとしては現存最古のものと言われている〝アルテミシアの歎き〟（紀元前4世紀）をウイーンで見てきてからは，そのことも紹介することにした。しかしそれとても，何も私が古代ギリシヤ語が読めたわけでもなく，説明して下さったフンガー博士の〝とりつぎ〟にしかすぎなかった。他の例，私の見たこともない，またホンの一断片を壁に複製したものを見ての紹介同様に，迫力のないものであったろう。しかし私は〝2300年を経ても人間関係は相変らず似たようなことが〟ということの認識と，〝司書とは，必要に応じ見たこともない図書を語る技術を持っている人〟ということと，ニュートンの所謂〝巨人の肩を借りる〟ということとの関係を討議題にして欲しかったからである。

dのヨーロッパ中世の図書・図書館とその後の章で，図書を語らなければならないときに，私は R. B. Downs[14] を幾度か引用した。特に John Milton の *Areopagitica* は図書の紹介というよりはむしろ，出版統制というものについて，学生同志でよく考えて討議する際の準備として提供した。

E. 問題点と今後の展望

以上，断片的かもしれないが，当学科における20年間の変遷（あるいは無変化）を紹介してみた。これが果して，社会状勢の変貌に対応してきたのかどうかについて私は自分から語るべきではなかろう。しかし私にとって大きな疑問としてのこっていることは次の点である。

1. 図書の歴史と図書館の歴史は分割して行うべきか，それとも一緒に講じた方が効果的なのであろうか？
2. 主対象が日本の学生である場合，外国の図書・図書館をどの程度扱うべきであろうか？

1でいう図書とは，既に述べたように，広義の資料，図書館資料を意味させる。私自身の意見は，〝資料の生産は，資料の収集・組織化・管理に当然結びつき，資料と図書館（資料センター，情報交換所と称されようとも）とは相関させながら講ずべし〟である。私共の業務は〝分化させると際限なく分化することも出来るが，総合的に見てゆくことの方がより重要である〟という信念（あるいは仮説）に基づくものであって，〝客観的・理論的〟のものではない。（あるいは確証されたものではない。）

コロンビア大学の図書館学校で，フリック女史が〝図書と図書造りの歴史〟と題しながらも，その I—V 章（中世後期）までは章標題に〝図書と図書館〟という表現を用い，IX—XI 章（18 世紀）までは細目として常に〝図書館〟を出しておられることも見逃してはならない。

図書と図書館を二分割して講義してゆくことは，〝図書の歴史〟の方で，その内容にまで深入りして，それぞれの分野の講師に依頼することが可能であるとか，いくつかの便宜が得られることも確かであろう。イリノイ大学の図書館学校では，T. Eaton 女史が 1951 年以来〝図書の歴史〟を立派に講義しておられる。[15] また専攻論文として発表される場合に，この二分割が扱いやすいものであることは，庄司浅水，Alfred Hessel その他の方々が発表しておられることからも容易に推察されることである。

次に2の点について言えば，極端な場合次の二つの考え方が可能である。

a) 図書館学が国境を越えたものであり，今後の発達も国際的活動が前提となる以上，地域にはこだわらずに，世界史的に顕著なものをとりあげてゆくべきである。
b) 図書館業務にたずさわるようになってからの判断を下すときの参考に役だてるというのが重点であるならば，あくまでも日本における図書館の盛衰，社会の要求というものを主軸にすべきである。

実際には，両者の中間に解決点はあるわけで，両者をどうバランスさせてゆくかについては，実例でみてゆくことにしよう。

最初の例は，大学における講義の例ではなく，オーストラリアのヴイクトリア公共図書館附置の講習所で行っているものである。非公開資料 *Notes on book and libraries* [1964?] は，まず最初に，〝印刷術の先駆（木版本など）〟〝初期の印刷術〟〝紙〟〝複製技術の最近の発達〟〝造本〟〝文字と書体〟といつた項目を，自国，本国などとは無関係に，一般的に取り扱っている。図書館のことを論ずるにあたっては，キャンベラの国立図書館，シドニーの Michell Library，英国の John Relands Library，London Library，アメリカ合衆国の John Crerar Library の歴史・現状を紹介した上で，オーストラリアの図書館法を講義している。このコースでは〝簡略世界図書館史〟とでもいうべき別冊（400 字原稿用紙換算 30 枚程度）を配布している。

アメリカ合衆国の場合についていえば，比較的建国の歴史も新らしく，ヨーロッパ文化の継承とみられること

が多いので，ギリシヤ・ローマ以後については，いわゆる〝西洋図書館史〟でよいのではないか。資料とかその材料という意味での〝木版印刷物〟〝紙〟といったものに関連して，東洋に触れることで，19世紀以降の国際社会における図書・図書館の位置づけをまとめてゆくことが出来よう。

フリック女史は序論のあとを20単元にわけられ，Ⅰを〝世界最古の図書と図書館〟にあてられⅡ—Ⅺまでを，ギリシヤ・ローマにはじめて，ヨーロッパ中心に講義をすすめておられた。Ⅻで〝アメリカ植民地時代の印刷〟そのあとは一般的な扱いにしておられる。その中には〝製本（手工業）〟〝良い造本の基準〟〝著者の原稿が印刷出版されるまで〟〝最近の出版界の動向と司書の責任〟ともいうべき単元が含まれている。

日本における講義のあり方としては，すくなくとも19世紀前年までは，極東（中国・朝鮮・日本）に時間をかけるべきであろう。そのほかに，90分15回授業になったことを考慮にいれて構成を考えてゆくことも必要である。〝古代三文明での図書〟の次に，極東の〝図書と図書館〟を5—6回程度にもりこんでゆくことも考えられる。それからまた，適任者を求めて，〝出版概論〟，〝図書の装飾，さし絵，製本〟といつたものを開講してゆくことも考慮されるべきであろう。　（中村　初雄）

1) Columbia University. School of Library Service. *Syllabus for the study of history of books and book making*, prepared by Bertha M. Frick, 1943 [first ed. 1936] 79 leaves.
——— *Outline for the course in history of books and bookmaking*. Prepared by Bertha M. Frick. 1957 [first ed. 1953 had title: *History of Books and Printing*] 61 leaves.

2) 但し要覧には1956/58年にかけて浜田敏郎の名があげられている．

3) 次年度に他の関連専門科目を履習するために在学する学生とは，わずかに，アセンブリーの時間，その他の行事で結びつけられていたという時代である．

4) その理由についてはここでは触れないが，科目数が増してきて，選択の自由が大になってくると，履習する学生数が激減するのと，公共図書館の司書資格単位であることと関係ずけて解する人もあるが，私はそれは大した理由でないと思う．
本学科発足の際には〝図書館・司書及び社会〟が1961/62年には〝図書館学要論〟，1961/62年には〝図書館学概説〟（いづれの場合も，必修科目）となり，内容に相当の変化が見られたこととあわせて解釈してゆかねばならない．

5) Columbia University. School of Library Service. *Outline for the course in history of books and bookmaking*. Prepared by Bertha M. Frick. 1957. leaf 31—

6) テスト以外に，タイプ8枚以上のリポートを提出させるか，または図書関連テーマでの展示の企画，準備，などをさせて，キメのこまかい指導を行っていた．

7) Ray L. Trautman 教授は読書指導コースの担当であり *A history of the school of library service, Columbia University* [コロンビア大学図書館学校の歴史] の著者であるが，1950/51年には *Outline for the course in books and libraries in the growth of civilization* [文明の発展における図書と図書館]を作成している．1957/58年の教授の講義は〝*American libraries: their development and organization*〟[アメリカの図書館：その発達と組織] であった．

8) フリック女史が銘記しているのは9世紀（唐末）で，現存最古の刊本　金剛般若経（868）とか太宗（626—649）の図書館（歳書 20万巻）に触れれば文字の国中国の偉大さは了解されるであろうとの計算であったろう。ムーア夫人は，しかしながら，秦の始皇帝による焚書（紀元前213）以前にまで，周までさかのぼる必要を認めたのであろう．老子が守蔵吏をしていたこと，孔子（紀元前551-479）四書五経のことを述べておられる．

9) それは〝目標〟を言っているのであって，私にこの標的が射程距離内にあったと主張しているものではない．私のこの初期の講義を聞いて，現在図書館で働いている人達にそのことを質問する気はない．

10) *Sir* Isac Newton が使ったといわれるこの表現に従い，私はニューヨーク公共図書館の Karl Kup 氏が来日されれば，〝Chronicle of the Council of Constance〟のお話を学生にして頂き，展示の説明など国立国会図書館支部上野図書館の方々にお願いすることが多かった．ブリタニカの16mm フィルムも私にとっては巨人であった．

11) これは1957年の2版をもとにすると280点（単行本は 180 種）にのぼるが，これの他版（1943），他の教授のリスト，本学科蔵書との関係は他の機会に紹介したい．

12) 〝人類の文字〟には近世を除くと，16 種の著作からの一部が抜すいされて浮彫りされている．日本5，中国3，その他8という配分になっている。その他8とは聖書3（ギリシャ語写本，ガリアの詩篇写本，ラテン語刊本），プタハホテプの智慧文学，死者の書，イリアス，グデア像銘文，カルタゴの青銅碑文である．

13) 拓本をとることが（あるいは印章をおすことが）

印刷とみなせるのであれば，刊本はもっと早くからあったことは自明である．
14) Downs, Robert B. *Books that changed the world.* Chicago, American Library Association, 1956. 200 p.
Downs, Robert B. *Famous books since 1492: Outlines of 111 great works that have shaped modern civilization.* 1961. 396 p.
Downs, Robert B. *Books that changed America.* New York, Macmillan, 1970. 280 p.
15) Eaton, Thelma. *The history of the book: A syllabus and reading list.* 5. ed. 1963. 92 p.

IV. 資料選択論

はじめに

現在，図書館・情報学科で，「資料選択論」(Selection of Recorded Materials) という科目名のもとに開講されている科目は，「図書選択」(Book Selection) として知られていると思われるので，「資料選択論」という用語になじみの薄い向きは，これを「図書選択論」と読みかえてもさしつかえない。

また，最近では，とくに米国において，building library collection[1] や collection building[2] などという用語が使われている。これらについて適切な日本語訳は，今のところないようだが，これらの表現のほうが内容をよく表わしていると考えられる向きは，そのように読みかえてもよいだろう。いずれにしても，このコースでは，用語の違い程カリキュラムの内容において，本質的な違いはない。[3] その限りにおいては，用語についての議論はここでは不必要である。

「資料選択論」は，学部課程3年次の必修科目であり，半期，すなわち，前期4月から9月まで週1時間(90分)のコースである。筆者は，昭和 47 年度よりこのコースを担当しているが，このコースに関する専門的背景は，昭和 45 年4月より現在まで，慶應義塾大学三田情報センター，テクニカルサービス部収書課課長代理として，大学図書館の選書と収書業務の管理にたずさわってきたことである。

A. 講義内容

昭和 48 年度「資料選択論」の講義要項の概略は，別に掲げるとおりであるが，以下では，本稿の主旨にもとずき，このコースを担当している立場から，講義の内容と指導要領についてまとめ，あわせて，若干の所感を述べたい。

序論（第1章）は，コースのオリエンテーションにあてる。まず，図書館・情報学教育における「資料選択論」の意義やカリキュラムにおける位置づけを述べ，次に，配布資料にしたがって，講義要項の概要やコースの進行について説明する。また，ペーパーや試験，さらに，第7章でとりあげる練習問題について概略を説明，最後に，参考文献について解説する。

このコースは，三つの主要なテーマ，(1)資料選択の原理原則，(2)出版および図書の流通，(3)資料選択の作業および収書業務を含んでいるが，序論では，とくに，資料選択におけるこれら三つの要件の意味について解説する必要がある。すなわち，それらはすべてが，「資料選択論」の理論構成にかかわる要素ではなく，専門職としての図書館員が図書館における実務としての資料選択を実施するときに必要となる基盤であり，知識であり，技術であるといえる。

第2章では，「資料選択論」の目的と範囲を明らかにする。このコースでは，資料選択は，図書館蔵書の構成[3] と維持・発展のための機能をもつ，図書館業務の一つであると定義する（付属資料C[2]）。そして，その理論的基盤を論じ，さらに，図書館における資料選択の業務内容を概説する（付属資料C [3]）。また，過去における主な図書選択論をとりあげ，それぞれの主張を理解するとともに，そのあとをたどって，「資料選択論」の展開について検討を加える（付属資料C[4]）。

この章でとりあげる資料選択の理論的基盤とは，資料選択の原理原則が立脚する基盤という意味であるが，このコースでは，その三つの基本的要素を，(1)社会，(2)読書，(3)図書の機能とし，それらが蔵書を形成し，維持・発展することを目的として行なわれる資料選択とどうかかわりをもつかについて論ずる。すなわち，図書館蔵書構成・維持・発展の理論的基盤は人間行動としての読書にあり，その起因は人間自体とその生活の場である社会の中で発見できる。したがって，資料選択の原理原則は，基本的には，現代社会の特質を背景にした現代人の読書行動から見出さなければならない。また，読書行動を成立させる読書材としての図書は，その商品的価値は別としても，それが読書行動の対象として求められている限り，図書の，とくに現代社会における図書の役割について考察することは，読書行動を明らかにするもう一つの重要な手がかりである。

第2章における，「現代社会の特質」と「配書」と「図書の機能」の資料選択の重要な関連性の論述は，さらに，

第3章および第4章に展開される。すなわち，第3章では，前の議論をうけて，蔵書構成の観点からみた現代社会の特質を考察するとともに，その中での読書を明らかにする。

現代社会の分析については，社会学やその他の社会諸科学，あるいは，文明評論や社会評論の成果（付属資料C[5]）を利用し，未来志向的に社会の諸現象と特質を理解するように進める。そして，それらが人間の読書に対する欲求や読書材への要求にどう結びついているか検討する。

読書行動の分析については，諸々の読書論や読書心理学や読書世論調査などの成果（付属資料C[6]）を利用して，(1)読書の動機，(2)読書行動の形態，(3)読書欲求に対する図書の役割・機能を明らかにする。しかし，これだけでは読書行動を十分に解明したとは云いがたいので，読書行動を確実に理解するためのいろいろな方法について検討する。とくに，行動科学の手法（付属資料C[7]）を導入する可能性について論ずる。

第4章では，第2章における資料選択の原理原則の理論的基盤を明らかにするために，図書の機能について考察する。図書については，当学科学部課程の他のコース，「書誌学」，「資料組織法」，[4]「資料論」，[5]「図書・図書館史」などの側面からのアプローチと競合しないように，このコースでは，図書の機能を現代および未来社会の中で，他の情報伝達のメディアとの関連においてとらえようと試みる（付属資料C [8]）。

第3章および第4章は，資料選択の理論的基盤を明らかにするという観点で，〝現代社会の特質〟，〝読書〟および〝図書の機能〟をとりあげているが，これら三つのものは，別の角度からみれば，図書館専門職に欠くことができない予備知識を学生に与えるという副次的効果が期待できる。また，第2章から第4章までは，主として資料選択の原理原則にかかわる講述を中心にしたが，第5章以下は，作業としてみた資料選択と収書業務に直接必要な知識と技術の実務的な論述が中心となる。

第5章では，出版と流通の現状について解説する。このコースにおけるこれらのものへのアプローチは，作業としての資料選択と収書業務の実務的知識として重要であるという観点から行なわれる。

〝出版〟，〝流通〟というテーマは，社会経済的な観点から，たとえば，マスコミュニケーションの一つの分野としてとらえられることもあり，また，出版産業，あるいは，情報産業という形でとらえられることもある。また，図書館・情報学の分野においても，出版・流通の過程を，資料の生産―配布―利用としてとらえ，情報の伝達過程を純粋に理論化しようというドキュメンテーションの立場も考えられる。しかし，このコースではそういった理論構成の可能性について簡単に述べるだけにとどめ，専ら，商品としての図書の流通の問題を図書館での資料の選択と入手にかかわる知識，あるいは，実際的な技術として解説することに主眼をおく（付属資料C[9]）。

第6章は，作業としての資料選択と収書業務を主な内容としている。それらに関する実務的な面をより具体的に論ずるために，このコースでは，現在，筆者が直接業務を行なっている慶應義塾大学三田情報センターの選書と収書業務をとりあげて解説する。こうした具体的な作業を理解した上で，選定者と選定組織，蔵書構成・維持・発展の方針と計画と基準の問題を論じ，また，作業面で重要なシステム管理についても論述する（付属資料C[10]）。

従来の「図書選択論」では，実務的な知識と技術として，資料の選択や入手のためのトウールの解説，資料タイプと入手法や資料の購入にかかわるビジネスなどの解説などにかなりの重点がおかれてきた。このコースでは，それらの解説は隣接する他のコース，たとえば「参考調査資料」や「資料論」各論にまかせ，実務的練習問題を使って学生に実習させながら，クラスでは代表的な問題をケーススタディーの形式で検討を加える。第7章は，すべて，この形式で授業を進める。

練習問題は，別に掲げるようなものであるが，昭和48年度は100題の例題を前もって学生に課した。学生は，それらの問題を通じて，例題のシチュエーションを理解することから始まって，適切な資料選択や入手法を考え，効果的に問題を処理することが要求される。クラスでは，学生の発表する素朴で，常識的な処理方法を出発点として，例題の背景にある状況を解説しながら，より専門的な処理法に展開させていく。

第8章は，作業としての資料選択と収書における現状の中から基本的な諸問題をトピカルにまとめて考察したり，論述したりすることを目的に設けている。過去2年間には，別に掲げるような問題をとりあげている。これらの問題は，かならずしも，資料選択プロパーのものではないが，いずれも資料選択の目的とする蔵書構成・維持・発展にかかわる重要な問題である。

財政問題は，主として，図書費あるいは図書予算をとりあげて論ずるが，日本の図書館関係統計（付属資料C

[11]) を分析して,現状と諸問題を考察する。協同収書については，これが最も進んだ形で行なわれている米国図書館におけるいくつかの例，たとえば，PL480プラン，LACAP，NPAC などをとりあげて論ずる（付属資料C[12])。また，作業としての資料選択と収書をより有効，かつ，円滑に行なうためには，図書館は資料を供給する流通サイドの協力を必要とする。その協力は，具体的には，書店のビジネスの中にあらわれているが，そうしたビジネスはとくに米国のホールセラーズにおいて行なわれている。この章では，資料選択と関連あるコマーシャルサービスとして，いくつかの実例をあげて考察する。

また，こうした資料選択にかかわるトピックスを，毎クラスごとに適当な時間をさいて論じ，学生が現実の動きと資料選択論を結びつけて学習できるように配慮する。過去においては，「ドル・ショックと図書選択――円切上げと洋書購入価格」,「図書は土地，建物，機械などと同じか――学校法人会計基準と図書経理・管理規程」，「ポルノグラフィと図書館」「本屋ストの問題点」,「古書ブームの意味」,「原料不足――紙不足の影響」などをとりあげている。

B. 問　題　点

図書館学教育からみた「資料選択論」の対象は，図書館における資料の選択である。図書館における作業としての選択は，図書館サービスの最も重要な要素の一つである蔵書を作り上げ，それを引続き維持・発展させることを目的として行なわれる。学生が卒業後これにたずさわる場合，実際の作業の面では，新たに蔵書を作りあげるというよりは，すでに存在している蔵書を維持・発展させるということが多いと考えるが，資料選択の重要性は変らない。したがって，このコースは，図書館専門職候補生である学生が，卒業後，資料選択にたずさわるときに，その作業の重要性を理解し，有効かつ適確に行なえるような内容をもたなければならない。

「資料選択論」の問題点は,基本的には,こうしたコースの目的および内容と，実際の作業としての資料選択をどのように実質的に結びつけるかという点に存在する。すなわち，実際の資料選択には，①特定図書館の目的と状況の理解，②特定図書館の利用者の実態と要求の把握，③特定図書館の蔵書の内容についての理解，④資料の内容を理解するための主題の知識と言語的な読解力，⑤出版と流通にかかわる知識と資料入手に必要な実務的知識と技術が必要である。そして，さらに，⑥これらの知識や技術を総合して，一冊一冊のものを蔵書として加えるかどうかを決定する判断力である。しかし，これらのものをどのように「資料選択論」の内容にとり入れることができるだろうか。

このコースにおいても，また，これまでの「図書選択」においても，それらのものをすべて，そのままの形で実質的にとりあげることができなかった。図書館の目的や状況，また，利用者の実態や利用者の要求の確実な把握は，資料選択の基本的な要因であるが，それを論ずることと〝特定〟の図書館における資料選択を理論的に結びつけるといったことが，実際可能であろうか。一般的に，図書館の目的やサービスの状況，そして,一般的に,利用者というものを莫然ととらえてみたところで，それが，たとえば，専門図書館における，あるいは，学術図書館における，あるいは学校図書館，公共図書館における資料選択の重要な要因を明らかにしたことになるだろうか。まして，〝特定〟の図書館の資料選択の準拠すべき何ものとなろうか。

〝特定〟の図書館における蔵書の内容もまた，その図書館における資料選択の要因である。蔵書の内容は，一般的にも，とらえることができない。まして，このコースで，特定の図書館の蔵書内容を検討することなど不可能である。図書資料の内容を理解するための主題の知識と言語能力の重要性は明白であるが，これらのものについても，「資料選択論」は全く無力である。このコースが，なんとかとりあげることができるのは，資料の生産・流通にかかわる知識と資料入手に必要な実務的知識である。他の「図書選択」でも，いずれもこの点にかなりの重点をおいている。

しかし，「資料選択論」として，カリキュラムの一つの構成科目として設置するかぎり，このコースが，単に，図書館における資料選択に必要な出版や出版物の流通・販売や資料入手法としての，書誌的トウールやその使い方の解説のみに終止するわけにはいかないだろう。それらは，「資料選択論」の中核となるべき資料選択の理論構成に対しては，むしろ，決定因子ではなく，内容構成子の一つであり，その地位にあるものである。「資料選択論」では，ここで云う決定因子および他の内容構成因子を統合したものが，作業としての資料選択とうまく結びつく形で必要である。しかし，作業としての資料選択の準拠するものは,先に述べた特殊性を要求するために,理論と実際の連結がむずかしい。

むずかしいというのは，「資料選択論」の内容構成においてであるが,とくに，コースの時間的設定（2単位,

半期ということ）および他の関連コースとの内容的複合の状態などの点にかかわる。たとえば，図書館の目的やサービスの状況，および利用者の実態やニーズは，「資料選択理論」プロパーの理論決定因子ではなく「図書館・情報学概論」で論じられる図書館サービスの理論のそれであるということ，また，もしそれらを資料選択の観点から論ずるとすれば，先に述べた特殊性の問題を解決するために緻密なアプローチが必要となり，それを現在の半期のコースであつかうのは非常にむずかしくなる。

このコースでは，それ故，資料選択の理論，つまり「資料選択論」の内容決定因子として，現代社会の特質，読書，図書の機能をとりあげ，それらを検討することによって，一般的に，図書館サービスの目的と状況，および，図書館利用者の実態と要求を明らかにするというアプローチをとった。もちろん，これらのものをただ図書館サービスの目的や利用者の実態を明らかにすることではなく，資料選択，すなわち，このコースでは蔵書構成・維持・発展という目的をもって考察することになる。しかし，それらの云わば，図書館学の原点と云いうるようなものから，特定のタイプあるいは，「特定」の図書館における資料選択の準拠となるべきものを究明することは極めてむずかしい。その結果，他のコースにおける講義内容およびこのコースの半期という時間的制約とも関連して，講義内容，および，コースの意図するところのものが中途半端に終ってしまうという感じが払拭できない。

（渋川　雅俊）

1) Carter, M. D. C. and Bonk, W. J. *Building library collections.* 3d ed. Metuchen, Scarecrow Press, 1969. 319 p.
2) *Encyclopedia of library and information science* vol. 5. Editor: Allen Kent [and others] New York, Dekker 1971. p. 260—8.
3) このコースでは，クラスの中では，〝蔵書建築〟という用語を使って，蔵書を作りあげ，発展させるという動的な行為を表現しようとした．
4) 従来，本学科では，「目録法」とされていた．現在では，「情報要求に基づいて収集された資料を組織化するにあたり，適用すべき標準的な組織化のシステムの基本理念を講述する」（昭和48年度講義要録）という「資料組織概説」の他に，演習を主とした「資料組織法」，主題分析と書誌記述を進んだ形で論ずる「資料組織論」がある．
5) 資料論には，「参考調査資料」，社会科学分野の資料を論ずる「資料論 Ⅰ」，科学技術分野の「資料論 Ⅱ と Ⅵ」，人分科学分野の「資料論 Ⅲ」，視聴覚資料を論ずる「資料論 Ⅳ」，児童文献の「資料論 Ⅴ」がある．

付属資料 A. 資料選択論講義要項概略

1. 序　論
2. 資料選択論の目的と範囲
   （1） 蔵書構成 (Building Library Collections) の定義
   （2） 蔵書構成・維持・発展の基盤
   　　現代社会の特質，読書，図書の機能
   （3） 図書選択論の展開
3. 蔵書構成の観点からみた現代社会の特質
   （1） 現代社会の分析
   （2） 現代社会と読書
4. 現代社会における図書の役割
   （1） 図書の機能における歴史的変遷
   （2） 情報化社会における図書の機能
5. 出版と図書の流通
   （1） 出　版
   （2） 図書の流通
6. 図書館における図書の選択と収書
   （1） 図書選定と収書業務——慶應義塾大学三田情報センターにおける選書と収書業務
   （2） 選定者と選定の組織
   （3） 蔵書構成・維持・発展の方針，計画，基準
   （4） 収書業務の管理
7. 資料選択と収書業務に必要な知識と技術（練習問題別掲）
8. 資料選択と収書の現状と諸問題
   （1） 蔵書構成・維持・発展の財政的現状と諸問題
   （2） 協同収書計画の現状
   （3） 図書館と書店——資料選択および入手と書店のビジネス

付属資料 B. 資料選択論練習問題

以下の各問は，図書館における資料選択と収書業務の中で発生する実際的な問題をもとに，「資料選択論」第7章の練習問題として作成したものである。学生諸君は，練習問題の処理にあたって次のような手順で行なうべきである。

1. 問題の確認：　問題をよく読み，理解する。とくに，その問題の背景や状況を理解すること。

2. 問題点の発見：　問題点の確認を経て，その問題が何を要求しているかを明確にすること。
3. 問題に含まれている事実の確認：　問題によっては，その問題に含まれている事実を明らかにしておかなければ，的確な解答が得られないものがある。そのような場合には，その事実について知らなければならない。
4. 解決策の呈示：　解決策は一つではない。いくつかあるなかから，適切と思われるものを選ぶ。その場合，頭に浮んだ幾つかの解決策を採用して問題を処理すれば，どんな結果が得られるか予測してみることも大切である。
5. 問題の処理：　解決策のなかで最も適切なもので，問題を処理し解答を得る。
6. 解決策の一般化：　明らかにされた問題点や解決策を一般化し，類似のものに応用できるよう整理する。また，とくに指示のないかぎり，問題の解答を提出することはないが，クラスにおいて，問題をとりあげ検討を加えるから，それに参加できるよう準備しておく必要がある。（以下は，昭和48年度に実施した練習問題のうちの若干の例である）

（1）慶應義塾大学工学部では，昭和 49 年度から数理工学科を新設することになった。学科新設のため，理工学情報センターでは，この分野のコレクションを充実する必要がある。また，学科新設に関する文部省申請に必要な手続きを開始しなければならない。資料選択と収書に関して，このケースをどう処理すればよいだろうか。

（2）今年は，ドイツの画家デューラの生誕500年目にあたる。生誕500年記念で，何か出版企画があるだろうか，もし，画集が出版されるなら，是非購入したいので，その内容についてくわしく知りたい。

（3）最近新聞広告で志賀直哉の全集が出版されることを知った。この全集は，どこから出版され，全何巻のものか，またその全巻の構成を知りたい。

（4）日本全国の各都道府県の統計資料を集めたい。どんなタイトルのものがあるか調べ，それらの入手に関しては，入手先をどう決めればよいか決定しなさい。なお，予算に限りがあるので，全部購入するとすれば，どれくらいの金額になるか知っておきたい。

（5）「グラフィケーション」という雑誌を購入するよう，利用者より依頼された。選択に必要なデータを知りたい。

（6）「婚因，誕生，葬礼」（昭和8年，一誠社刊）が，最近の古書展で売りに出たと聞いた。この本は，以前より，利用者の一人から購入するよう依頼されていたものだが，どうすればよいだろうか，

（7）大江健三郎の「鯨の死滅する日」（文芸春秋社刊）の書評を探し，それぞれの書評を比較しなさい。

この練習問題については，書評をできるだけ多く集め，それらを比較しながら，書評のありかたについて考え，レポートしなさい。レポートのポイント：①書評とは何か，②書評のタイプ，③図書選択と書評，④書評のはたらきとその社会的責任

（8）Flores Ivan の *Job control language and film definition* の入手に必要なデータを知りたい。

（9）台湾から「続修四庫全書提要」を直接輸入することにした。まず，その購入価格であるが，原価2000元である。日本円でどれぐらいものか。また，輸入に必要な手続きを調べよ。

(10) G.K. Hall という出版社についてできるだけくわしく知りたい。また，その日本における代理店があったら調べよ。

(11) *Historical abstracts* (Q) の年間購読料を調べよ。

(12) 戦前に出版された「下毛群誌」は，古書目録では，15,000円となっている。できるだけ安く入手したい，どんな方法があるか。

(13) 最近，英米のリプリント出版界では，「パッケージもの」と名づけられるような，セットものを出版している。その特長は，O.P. の中から，ある特定のの主題の図書を集め，それらを叢書にして，リプリント出版していることである。蔵書建築という観点からみるとメークセンスであるが，選択のためには，その特定主題と集められる一冊々々の図書が問題がある。したがって，叢書の内容を知る必要がある。ここに，*The American Negro* (Arno Press), *English Revolution* (Cornmarket Press), *The Development of Industrial Society* (AMs Press)

などがあるが，これらの内容が知りたい。

(14) 最近，一般大衆誌がより専門的な，あるいは，より特殊なものを主題とした大衆専門誌として分化していると云われている。この事実をくわしく調べレポートしなさい。

(14) 日本図書館協会では，図書選定委員会をもうけ，新刊書の中から選定図書を選び発表しているが，そのリストは，どこで入手できるか。また，アメリカの場合には，どんなものがあるか。

付属資料 C. 参 考 文 献

参考文献〔1〕は，講義要項概略とともに学生に示すもので，「資料選択論」の対象とすべき範囲の全般をあつかっているもの，資料選択の諸問題を総合的にあつかっているもの，およびこのコースを履修している学生が資料選択の実際的な知識や感覚を得るために常に接している必要があるものなどを掲げてある。

参考文献の〔2〕から〔11〕は，講義に関連するものやリーディングアサインメントである。

〔1〕竹林熊彦．図書の選択——理論と実際．東京，蘭書房，1955．149 p.
弥吉光長．新稿図書の選択．理想社，1961．
弥吉光長編．図書の選択，東京，日本図書館協会，1967．196 p.
McColvin, L. R. *The theory of book selection for public libraries.* London, Grafton, 1925．188 p.
Wellard, J. H. *Book selection; its principles and practice.* London, Grafton, 1937. 205 p.
Haines, H. *Living with books; the art of book selection.* 2d ed. New York, Columbia Univ. Press, 1950. 610 p.
Carter, M. D. C. and Bonk, W. J. *Building library collections.* 3d ed. Metuchen, Scarecrow Press, 1969. 319 p.
Kujoth, J. S. ed. *Libraries, readers, and book selection.* Metuchen, Scarecrow Press, 1969. 470 p.
Gaver, M. Y. ed. *Background readings in building library collections.* Metuchen, Scarecrow Press, 1969. 2v.
Wynar, B. S. *Library acquisitions; a classified bibliographic guide to the literature and reference tools.* Rochester, Libraries Unlimited, 1968. 275 p.
出版年鑑
出版ニュース
日本古書通信
図書新聞
日本読書新聞
週刊読書人
朝日新聞，毎日新聞，日本経済新聞，読売新聞などの読書欄と出版広告

〔2〕*Encyclopedia of library and information science.* A. Kent [*et. al.*] ed. New York, Dekker, 1969— ("Collection building") ("Acquisions")
Wynar, *op. cit.*, p. 9-16.

〔3〕Wulfekoeter, G. *Acquisitions work; processes involved in building library collection.* Seattle, University of Washington Press, 1961．268 p.

〔4〕弥吉光長．新稿図書の選択．*op. cit.*, p. 6-17.
河井弘志．"J. H. ウェラードと図書選択論," **図書館界**, vol. 24 no. 2, 1972, p. 44-61; vol. 24, no. 3, 1972, p. 102—116.

〔5〕トフラー．A．未来の衝撃．徳山二郎訳．東京，実業の日本社，1970．582 p.
林雄二郎，金山宣夫．日本モザイク社会．東京，ダイヤモンド社，1973．255 p.

〔6〕弥吉光長．脱活字化の世界．東京，講談社，1970．p. 123-162.
清水英夫．現代出版社．東京，竹内書店，1972．p. 69-85.
岡田 明．最新読書の心理学．東京，日本文化科学社，1973．272 p.
全国読書世論調査 1973年版．毎日新聞社，1973．174 p.
デュマズディエ，J．余暇文明へ向かって．中島巌訳．東京創元社，1972．p. 200-27.

〔7〕吉田正昭，村田昭治，井関利明編．消費者行動の分析モデル．東京，丸善，1969．196 p.
同編．消費者行動の調査技法．東京，丸善，1969.

〔8〕エスカルピ，R．出版革命．清水英夫訳．東京，講談社，1967．252 p.
清水，*op. cit.*, p. 86-102.
弥吉光長．脱活字化の世界．*op. cit.*
バグディキャン，B. H．インフォメーション・マシーン—人間とメディアへの影響と情報環境革命の展望．岡村黎明訳．東京，サイマル出版会，1973．372 p.

〔9〕清水，*op. cit.*, p. 135-170.
西谷能雄．出版とは何か．東京，日本出版エディタースクール出版部，1972．476 p.
金平聖之助．世界の出版革命—変貌する出版活動．東京，サイマル出版会，1970．210 p.
通商産業省企業局．取引条件の実態調査——卸売業をめぐる取引慣行の実態．下．1972．p. 72-95.

〔10〕"大学図書館の図書選択 <特集>," **図書館雑**

誌, vol. 66, 1972, 9, p. 462-65 (今まど子: 図書館の選択権を得るために, 加藤宗晴: 電気大学附属図書館の実状, 相馬文子: 日本女子大学の場合, 渋川雅俊: 慶応義塾大学三田情報センターにおける選書と受入業務, 金子宏: 米国の事情, 編集委員会: 日本の大学における図書選択の実情——アンケート結果報告)

高島正夫. 〝大学図書館の収書計画と慶応義塾図書館,〟 *KULIC*, no. 1, 1970, p. 23-24.

柳屋良博. 〝収書方針に影響を及ぼす諸要因,〟 *KULIC*, no. 1, 1970, p. 24-33.

慶応義塾大学三田情報センター. 三田情報センターの収書方針と第二次収書計画 (昭和48—50 年度). 1973. 85 p.

弥吉光長編. 図書の選択. *op. cit.*, p. 25—36.

Carter, *op. cit.*, p. 1-41, 259-306.

〔11〕 日本の図書館 1971. 東京, 日本図書館協会, 1971. 179 p.

昭和46年度大学図書館実態調査結果報告. 文部省大学学術局情報図書館課, 1973. 62 p.

〔12〕 Bloomfield, B. C. comp. *Acquisition and provision of foreign books by national and university libraries in the United Kingdom.* Papers of the Morecambe Conference, 16 April 1972. London, Mansell, 1972. 217 p.

"Public Law 480", *Library trends*, vol. 15, October 1966, p. 90-94.

Cronin, J. W. *et al.* "Centralized cataloging at the national and international level," *Library resources and technical services*, vol. 11, Winter 1967. p. 27—49.

Savary, M. J. *The Latin American cooperative acquisitions program: An imaginative venture.* New York, Hafner. 1968. 144 p.

資料系列科目群

はじめに

「参考調査資料」および「参考調査法」については本誌の第7号に〝レフアレンス教育の動向〟[1] と題して報告されている。その後，若干の変更はあったが，大綱において変化は見られない。したがって，この2科目については同論文にゆずり，ここではこれらを基礎科目とする資料系列の選択科目群について，各科目担当の立場からそれぞれの概要，問題点および改善案を示すことにしたい。

資料系列の選択科目は現在「資料論」とよばれ，ⅠからⅥまで設けられている。このうち「資料論Ⅰ～Ⅲ」は本学科の創設以来設けられていた「参考資料・調査法Ⅱ」を継承する科目群である。これらは昭和 37 年度以降，それぞれ「社会科学資料」「科学技術資料」「人文科学資料」と改称されたが，従来の必修単位の枠内で，4単位の選択必修科目として扱われた。なお現在のように「資料論」と改められ，選択科目になったのは昭和47年度からである。

「資料論」のⅠとⅢはⅡとともに，その前身であった科目名からも明らかなように主題別資料科目として知識領域の3区分と照応させようとするものである。これらは米国の図書館学校の多くにみられる伝統的なカリキュラムのパターンにしたがうものである。すなわち必修科目としての「参考調査資料」を基礎とする上級科目として位置づけられている。このことは専門学科目改廃経緯一覧[2] からも伺える。かつて存在していた「調査及び書誌的資料と取扱法」の上級科目 Advanced Course of Informational and Bibliographic Sources and Methods, Including Reference Service を間接的に継承しているのがこれらの科目だからである。

このほか，「視聴覚資料」「児童図書資料」についても科目名の統一をはかるために，それぞれ「資料論」のⅣとⅤにしたのである。また，この際「資料論Ⅵ」が新設された。

「資料論 Ⅵ」は特に「資料論 Ⅱ」と緊密な関係にあり，Ⅱが自然科学資料の一般的な性格，特徴および，より一般的な2次資料などを扱うことを目的としているのに対し，Ⅵは，例えば「理工学資料」であるとか「生物医学資料」といったような自然科学における特定の分野を取り上げ，2次資料などの文献そのものについての知識をより深く教えることを目的としている。したがって，この科目は毎年同じ主題で取り上げるのでなく，1年おき，若しくは2年おきに同じ主題が廻ってくるような形のものであり，「資料論Ⅱ」では充分に扱うことの出来ない，個々の専門主題分野における資料類についての知識を得させることを目的としている。

I. 資料論 Ⅰ（社会科学資料）

A. 概　要

「資料論」はこれまでの科目の性格を受け継いでいるから，その前身である主題別資料科目の内容を明らかにすることによってその性格を理解する手がかりを得ることができる。したがって，まず「資料論Ⅰ」の前身である「社会科学資料」（必修）からとりあげることにしよう。

この科目は大要次のような内容からなっている。すなわち，

社会科学とは何か――その特徴
　経験科学としての社会科学
　人文科学・自然科学との相違
社会科学の成立
　社会科学前史
　社会科学成立の条件
社会科学の方法
　社会科学論と研究方法論
　研究動向とドキュメンテーション
社会科学における情報要求
　研究と資料利用の特性
　社会科学用語の問題
社会科学資料と図書館
　社会科学資料の生産と流通
　資料センター，図書館活動
社会科学分野の書誌調整
　書誌調整上の阻害要因
　分類・索引上の問題
社会科学一般の資料

社会科学資料の特性

書誌と参考図書

以上について約10回にわたって解説し，あわせてできるだけ多くの参考文献を紹介する。その上で，社会諸科学すなわち政治学，法学，経済学，社会学などの各分野にわたり，(1)その諸系譜，古典的著作と研究動向，(2)書誌と参考図書，(3)主要研究機関・団体，コレクション等について検討を加える。

このような順序で社会科学に属する諸科学の主題分野の資料の特性を明らかにし，代表的な研究および一次・二次資料の特徴を解説し，それらを利用の立場から評価することがこの科目の目的とするところである。

この科目は必修科目であり，専攻生は全員履修しなければならないことになっている。いうまでもなく　図書館・情報学科は文学部に属しているから，その専攻生は文学部の学生である。そのために，概して社会科学に関するる基礎的知識に乏しく，また関心も低調である。

このような状況で，関心のあるなしにかかわらず全員が履修しなければならないところに問題がある。したがって，資料の特性を検討する前に，まず社会科学とは何かについて解説し，その研究のあり方を理解させることが何よりも必要である。そのためには，少なくとも３～４回分の講義時間を要するが，半期科目においてこれだけ割くことは時間配分上かなりの無理がある。しかし，社会科学概論に相当する科目を必修科目として履修することを義務づけていない状況ではこれも止むを得ないことである。

また，時間的制約はきびしくても，「社会科学資料」が必修科目として他の主題関係の資料科目と学問の領域を３分するかたちをとっている限りにおいては，少なくとも社会諸科学にわたる主要な資料について解説しておかなければならない。

そのような前提のもとに政治学，法学，経済学，社会学などの分野の資料が広く選ばれるような科目内容が構成されている。しかし，一次資料について個別的に言及することは受講生の関心の面からみても，また時間的にも困難である。したがって，どうしても主要な二次資料の解説に主眼をおかざるを得ない。二次資料の説明だけでは不十分であることはいうまでもないが，二次資料についてさえも限られた時間内に紹介できるタイトル数はわずかなものである。

「参考調査資料」の場合は資料の種類の面からみてその特性を解説することを目的としていたから，各種類ごとに特徴的な資料を例示的にあげることができればよい。しかし，「資料論」の場合には主題の面から主要な資料を選ぶ方針がとられている。

ところが，主題の面からその分野の特徴的な資料を選び出すことは，実際には極めて困難である。選択する資料の数をある程度ふやすならば主要な資料を漏らすおそれは少ないが，他面，時間的制約のもとに資料名の単なる羅列的紹介に終ってしまうことになりかねない。

そこで，多分に妥協的ではあるが，講義においてはできるだけ包括的な資料の紹介にとどめ，特殊な主題に限定された資料については二次資料の作成プロジェクトによって補うことにした。すなわち，社会科学の領域から学生各人が関心をもっているテーマを選ばせ，そのテーマのもとに書誌，索引などの二次資料を実際に作成し提出することをこの科目の課題にしたのである。

社会科学分野を扱う科目として，この科目では講義においてできるだけ関係資料を広くとりあげ，それぞれの特性を検討し，その上で受講生は自分が選んだテーマのもとにその分野の資料について検討を加える機会が与えられるならば，たとえ限られた領域にせよ，専門主題に関する知識とともにその関係資料の特性を経験的に理解することができると考えられるからである。

こうした意図のもとに課する二次資料の作成プロジェクトであるから，つくられた二次資料そのものの出来栄えがどうかということもさることながら，その作成過程にこそ重点が置かれなければならない。

まず二次資料のテーマは社会科学分野に属するものであれば自分自身で関心をもっているもの，あるいは第三者から依頼を受けたもののいずれを選んでもよい。しかし，すでにすぐれた既存の二次資料があり，それに包括される一部にすぎないものとか重複する主題のものは避けることを原則とする。

したがって，予め既存の二次資料があるかどうかを調査する必要がある。存在しなければよいが，もしあればその内容を確かめ重複しないようにしなければならない。このような調査をすることによって二次資料がどのようなかたちで存在しているのか学生自身で確かめる機会をもつことができるので，たとえ狭く限定された領域であるにしても，書誌調整の実状を知る上に役立つ基礎作業となる。

一旦テーマが決定されると，社会科学分野の二次資料その他各種の資料を利用して組織的な文献探索が開始される。この際に利用される資料の多くはテーマを決める

ときに利用された資料でもある。

文献探索を実地に行なうことによって社会科学分野の主要な二次資料を実際に使ってみる機会が得られ，各種の二次資料の特徴を理解することができる。

なお，それが文献探索の技術を習得するのにも役立つことはいうまでもない。二次資料から必要な資料の書誌的事項をカードに転記し，それらを現物と照合し，さらに多くの一次資料を直接手にすることによって二次資誌の記入項目が確定される。こうして特定分野における資料の主要な執筆者，刊行機関，出版物の量的推移などを知ることもできる。

できあがった二次資料自体よりもその作成過程を重視すると述べたが，二次資料の価値はその利用価値に他ならないから，作成されたものが利用者に求められているかどうかにかなり大きな関心が払われている。

これまで数年間に作成された二次資料のうちにはすぐれたものが少なからず含まれており，『文献シリーズ』として公刊されたもの，[2] 雑誌記事として発表されたものなどもある。とくに，研究者から専門主題について指導を受けてできたものの多くは請われて寄贈されている。

評価ずみの二次資料のうち，自分で所有することを望むものとか他に譲渡を約束しているものは返却するが，これまではすべて三田の研究教育情報センターに移管することにしている。これらは情報サービス担当によって一覧表にまとめられ，主として各学部の教員に配布されている。『文献シリーズ』として複製配布されるものはこのうちから利用者の需要を考慮して選ばれる。

B. 問題と改善策

主題の面から資料に検討を加えようとする場合，主題に関する基礎知識をもっていることを前提にしなければならない。しかし，ほとんどの受講生が文学部の学生であり，人文科学についてはまだしも，社会科学に関しては主題分野の知識にうとく，また主題的関心も弱い。このことがまず第一の問題点である。

主題の知識が十分でないと，主題関係の資料の特性が理解しにくく，この科目に対する興味を減殺する主要な原因となる。また二次資料作成プロジェクトのテーマは学生各自の自由な選択に委ねられているはずであるがそれを決めることは著しく困難な状況にある。そのために自発的に希望するテーマが選ばれるというのではなく，準備不足のまま思いつきでテーマが選ばれてしまいがちである。

こうした状況を考慮して，資料に重点をおくべき科目でありながら，およそ半分の時間は主題そのものについての解説に費されることになる。その結果，やむをえないこととはいえ，もともと時間数が足りない上に，さらに時間的な制約が加わり，本来目的としている資料の解説にあてるための時間が一層不足してくる。

この問題を解決する方法として考えられる最も単純な一つの案はこの科目を半期科目から通年科目に改めることであろう。しかし，カリキュラム全体における時間配分からみて，単純に時間数をふやすことは他の資料科目との釣合い上不都合である。

第2に考えられることは文学部あるいは他学部に設けられている主題関連科目を事前にあるいは併行して受講させることを条件づけてはどうかということである。

しかし，これも『資料論』に役立つ専門科目が開講されているという保証があっての上のことである。この科目の対象とする主題範囲は社会諸科学を包括する広範なもので，特定の主題分野に関する深い研究よりも，たとえ浅くても広い視野を養うような内容であることが望ましい。

したがって，選択科目として認められる専門科目ではなく，一般教養科目の社会科学系列に属する科目の方が適当である。社会科学系列からは必ず三つ以上の科目を履修することが進級の条件になっているから，この点は都合がよいが，その選択の範囲が広く，現実にはこの科目のために必要な程度の基礎的知識を得させるものとなってはいない。

そこで，第3案として，社会科学概論に相当するものを指定し，その履修を図書館・情報学専攻の条件にすることが考えられる。しかし，同じことが他の科目についてもいえるとすると，専攻条件の履修科目が幾つにもなり，科目選択の自由を妨げることにもなりかねない。したがってガイダンス上で履修を勧める以上のことはできないだろう。また，たとえ社会科学概論に相当する科目を指定したとしても，それが資料科目の見地から基礎科目として十分役立つものといえるかどうか，履修の時期が適当かどうか幾つかの問題が残る。

他の科目に全面的に依存して社会科学の主題知識を修得させようとするのが無理であるとすれば，主題関係の基本的なテキストを紹介し，リーディング・アサインメントを課することによって資料解説のための講義時間を捻出する以外にないだろう。

リーディング・アサインメントによって主題知識を修

得させることを前提にするならば，主題資料の特性に影響を及ぼす主題の特性について必要最小限度の言及に止めればよい。したがって，大半の時間を資料の解説にあてることができる。

このように時間的な配慮をしても，社会諸科学を対象とするとなると，その領域が広範にわたり，資料も膨大な量に達するので，半期科目におさまるだけの資料をとりあげるためにかなり厳選しなければならない。

この点についていうならば，社会諸科学としてどのような学問分野をとりあげるかが解説すべき資料の量に最も大きく関係する。過去数年間の経験によれば，社会諸科学として政治学，法律学，経済学をとりあげ，その基本的な二次資料の解説をするだけで時間がなくなり，社会学，教育学その他の分野の資料については極めて簡単に言及するにとどまっている。

しかし，解説する資料を必要以上に減らすと，主題の面からみれば当然知っておくべき資料に十分触れられないことになる。とくに二次資料の作成プロジェクトにおいて使用する必要のあるものについて触れることができないならば，プロジェクトの効果は減殺されるだろう。

このような状況で社会諸科学のうちから主要な分野を選び，その関係資料をかなりきびしい時間的制約のもとに解説しようとするならば，どうしても中途半端な妥協で満足せざるを得ないだろう。

したがって，限られた時間内に社会諸科学の分野の資料を満遍なくとりあげることはやめて，社会科学資料の特性を理解するために，必要に応じて特定の分野の資料を例示的に紹介するにとどめた方がよい。

それにあわせて，できるだけ早い時期に学生の個別的関心に基づいて二次資料の作成プロジェクトのテーマを選ばせるべきである。そうすることによって問題意識を強め，主題に対する関心を高めることにもなるからである。

その際，伝統的な学問分野からではなく，むしろ problem-oriented なテーマを選ばせるようにした方がよい。そのようなテーマには幾つかの主題がかかわっているので，必然的にそれぞれの主題関係資料に広く接する機会が得られる。また作成の過程において各分野で利用できる二次資料を選び出し，それらを比較することによってそれぞれの領域における書誌調整の状況を知ることができる。さらにこうした新しいアプローチをとる二次資料は重複するおそれが比較的少ないので利用者からの要求も強くあらわれる種類のものとなる。

ただし，こうしたテーマは広い領域に及ぶことが多いので，個人でとりあげるには時間的・能力的にみて無理が生じがちである。したがって，そのような場合には2名以上による共同プロジェクトにして各自の責任分担を明らかにした上で作業を進めさせることにする。実務として二次資料を作成する場合には共同作業を必要とする機会とが多いから，共同プロジェクトを通じて得られた体験は有益であろう。

以上のような個別的関心に基づくプロジェクトを効果的に推進するためには，何よりも個別指導を強化する必要がある。しかも科目担当者の能力では十分な指導ができないと考えられるテーマが選ばれたならば，それに応じた専門家の助言ないし指示を求めることが望ましい。

こうした諸点を考えあわせると，従来通り必修科目として全ての専攻生に履修させることは，学生の関心の面からも指導上の面からも適当ではない。したがって昭和47年度の学則改訂に際して，「社会科学資料」という科目名のもとに明白に主題分野を表示することはやめて，「資料論Ⅰ」と改めて他の資料科目とのあいだに一応の領域区分をするにとどめ，さらに必修科目を選択科目に改めたことは，上述のような指導方針に即した形式を与えるものである。　　（長沢　雅男）

1) 長沢雅男．〝レファレンス教育の動向，〟 *Library and information science*, no. 7, 1969, p. 19-32.
2) 長沢雅男．〝図書館・情報学の教育，〟 *Library and information science*, no. 10, 1972, p. 4.

II. 資料論 Ⅲ（人文科学資料）

A. 概　　要

「資料論Ⅲ」は「人文科学資料」をうけつぐ科目であり，主題領域の違いはあっても，「資料論Ⅰ」とほぼ同じパターンに従っている。したがって前章において述べた教授法，問題点，改善策などの多くがそのままあてはまる。したがって，本章では『資料論Ⅰ』における問題点と共通する事項についての言及は最小限度にとどめ，「資料論Ⅲ」における特徴的な問題を略述することにしたい。

人文科学では社会科学の場合のように諸科学のあいだに共通する特性を見出すことが困難であり，それが主題関係資料を性格づけるわけではない。人文科学に属する諸科学における共通要素は稀薄であり，各学問分野の研究対象，研究方法のあいだにはかなりの相違がある。

このような場合に「社会科学資料」と同じように人文科学の方法の問題，情報要求の問題，書誌調整の問題を順次解説するパターンに従うことは困難である。

そこで，「人文科学とは何か」というテーマのもとに自然科学，社会科学との異同を明らかにすることによって人文科学の領域および特徴を検討するにとどめ，個別の学問領域の資料の解説に重点をおいている。

ここにいう学問領域としては哲学，宗教，歴史，文学，芸術などが選ばれるが，それぞれについては (1)諸系譜の古典的資料と研究動向，(2)書誌と参考図書，(3)主要コレクション，研究機関などの面から検討が加えられる。

しかし，これまでのところ時間的な制約がきびしく，芸術関係の資料にまで時間が割けない実状である。

「人文科学資料」においても「社会科学資料」と同じ趣旨から二次資料の作成プロジェクトが課され，人文科学領域から主題を選んで二次資料を作成し，提出することが求められている。これによって人文科学領域における書誌調整の実態を知り，文献探索上の問題点を知る一助とすることができるからである。

社会科学の場合と比較すれば，受講生の哲学，史学，文学等に対する関心は強いし，また，これらの主題関係科目は文学部で数多く開講されているので，選択科目として容易に履修することができる。したがって，『資料論Ⅰ』の場合ほど主題知識の不足による障害は顕著ではない。

そこで，主題そのものについての解説は最小限度にとどめ，資料の解説を中心に進める方針をとっている。ただし，単に二次資料の解説の連続であるならば，よほど資料に対する関心が強くないかぎり，著しく単調で興味の薄い講義として受けとられてしまうだろう。

こうした欠点を避けるために，資料に対する問題意識を高めることを大きな狙いとして，受講生全員に対して参考調査質問を個別的に割当てて回答を求めることにしている。そのためにあらかじめ解説しようとする主題関係の二次資料を選んでおき，それらを利用して回答を求める必要のある設問を多数準備しておかなければならない。

幸い三田の研究教育情報センターの文科系資料は和欧とも比較的充実しているので，設問回答のための演習コレクションとして活用することができる。この場合，設問の回答が得られたかどうかは第二義的な問題である。むしろ正しい回答を探索する過程においてできるだけ数多くの二次資料，さらに一次資料を実際に手にとって利用するよう仕向ける必要がある。

こうして問題意識を高めておいて，主題関係資料の解説に設問の回答を織り込めば，解説の単調さをかなり排除することができるはずである。

もちろん設問の回答は単に問題意識を高めることだけを目的にして行なわれるわけではない。二次資料の作成プロジェクトが研究者の exhaustive approach に対応するものであるとすれば，この設問回答は everyday approach に対応する。したがって，設問は架空なものではなく，実際に参考調査質問として回答を依頼された具体例の方がよい。

B. 問題と改善案

人文科学そのものについて講義する必要はないとしても，哲学，史学，文学の資料をあわせれば相当の量に達し，その主な二次資料だけでも半期科目で解説するには時間的に無理である。

したがって，「社会科学資料」の場合と同じように基本的な二次資料の解説にとどめ，二次資料の作成プロジェクトによって補うことにしたが，これにも時間配分上幾つかの障害がある。

「人文科学資料」は「社会科学資料」のあとをうけ継ぐ後期科目である。そのため前期の二次資料作成プロジェクトが予想以上に時日を要し，例年，提出期限を延期する必要に迫られ，後期に入ってから提出させざるを得ない状況が続いている。

科目が違うからとはいえ，この上にもう一つ二次資料を作成しなければならないとなると，受講生の負担はかなり重いものとなる。その結果，主題については関心があるにもかかわらず，比較的負担の軽いありきたりなテーマを選んで糊塗しようとする傾向があらわれる。

このことはこれら2科目の問題であるにとどまらず，4年次の必修科目および卒業論文とも関係がある。とくに「人文科学資料」が4年次の後期科目として決められていることは卒業論文執筆の時期と重なるので，継続的プロジェクトを課することには無理がある，したがって，他の「資料論」とともに選択科目に改められ，3年次に履修できるようになったことはひとつの改善といえよう。

（長沢雅男）

III. 資料論 II（科学技術資料）

A. 概　要

この科目の目的は，図書館・情報学科の「昭和47年—48年度の要覧」によると，〝科学技術分野の資料・文献

の発生，その特性，利用などを，文献情報探索活動という面に重点を置いて説明する″としているが，大体次のようなことにポイントを置いている。

1) 自然科学の特性と，それが科学技術文献というものに与える影響を，この分野の情報の流れというものの中で捕える。
2) この分野の二次資料についての世界的な動向というものを明らかにする。
3) 科学技術諸分野で数多く産出される文献のうち特に二次資料類についての手懸りを得るための道具としての種々の解題書，guide to the literature 類に馴染ませる。
4) この分野の主要な二次資料，特に自然科学分野で大切な一次資料である雑誌論文，研究報告書，特許文献などを探すための道具としての索引誌，抄録誌などについての理解を深めさせる。
5) これら索引誌，抄録誌などを使用しての文献探索の実際についての知識を与える。

以上のポイントの置き方によっても明らかなように，この科目の主眼は，次から次へと際限なく出版される自然科学諸分野での各種の二次資料を解題して，学生に個々のタイトルを憶えさせるのではなく，あくまでも，自然科学の情報の流れの中で文献情報の占める範囲，その役割を追究し，また，文献情報探索のための道具としての二次資料を紹介し，更に特定の分野における細かい個々の二次資料についての情報を得る手段，道具としてはどんなものがあるかということを明らかにすることにより，学生の各々が，必要に応じて，更に深く科学技術の二次資料のみならず，その他の文献について調べることができるようになることを目的としている。

従って科目内容としては，次のような事柄を取扱う。

1) 自然科学の特徴とその特徴の各々が文献に与える影響
2) 自然科学情報とはなにか
   a. 情報とは
   b. 科学者の情報に対する要求
   c. 口頭情報と記録情報（文献以外の media も含む）
   d. 学会，その他の会議における情報伝達
   e. 文献量の増加（Price などの考え方の紹介）
3) 情報の流れの中における一次資料と二次資料
4) 文献探索とは
5) 一次資料
   a. 雑誌論文（"letters″ などの速報誌を含む）
   b. 研究報告書類
   c. 特許文献
   d. 学位論文
   e. その他の一次資料
6) 二次資料(主として manual search のためのもの)
   a. 二次資料の世界的な動向
   b. guide to the literature 類
   c. 数学，天文学，物理学の文献
   d. 化学文献
   e. 地学文献
   f. 生物医学文献
   g. 農学文献
   h. 理工学文献
   i. その他
7) 磁気テープの形態の二次資料
8) 情報のネットワークについて,(UNISIST, CODATA, NIST などを含む)

ここで明らかなように前半の1から4までは科学技術分野の情報の流れと，その流れの中における文献の役割についての事柄に関係し，5と6は文献そのものを取上げているが，そのうち5は個々のタイトルについての紹介でなく，それぞれのタイプの一次資料の性格，および1から4までに取上げている情報の流れの中での役割という面に重点を置き，かつこれらのタイプの資料を検索するための二次資料の紹介を行なう。6では,自然科学各分野の二次資料について学ぶ手懸りとなる guide to the literature 類の紹介および世界における二次資料の傾向を論じたのち，各専門分野での最も重要な索引誌，抄録誌類の紹介を行なう。そして最後に7で最近二次資料の性格を大きく変えだした，コンピュータの影響と，磁気テープの形で出版されている二次資料類の意義を追究し，主要なテープについての紹介を行なう。8でこれらのコンピュータ化された情報活動用の二次資料によって生じた情報サービスのネットワーク化の傾向及びその実例を検討し，将来の自然科学分野の情報活動の予測を試みる。

上記の内容を更に細かく説明すると，1では，自然科学の知識の累積性,国際性,細分化及び異なった分野が交ってできる新分野の問題，主題別より問題別への発展，カレントな情報の重要性，情報の爆発的な増大，等々の問題を取り上げ，これらの事柄が文献に与える影響というものを論じている。そして，2で「情報とは」という

問題を取上げ ISO などでの定義を紹介しながら，主として学術・技術情報というものについて検討を加え，更に科学者の用いる研究法を考慮しながら，科学者，技術者の情報（主として文献情報）に対する要求を，user study にふれながら論ずる，またこの段階で，記録された情報としての文献情報を口頭による情報伝達などと対比させて考え，同時に記録情報としてのビデオ・テープ，テレビ，映画，テープ，ディスク・レコードなどのメディアの存在の重要性を指摘する。また，特に，学会，国際会議，その他の学問上の集りの重要性を，口頭による情報と，記録情報との接点という角度から強調し，学会開催の計画，通知，予稿（抄録）の作成，講演のフル・ペーパーの作成，実際の講演，討議，講演集及び議事録の出版等の各段階での情報伝達ならびに学会開催のスケジュールや出版された議事録（講演集）などについての情報を提供するための二次資料類についても言及する。

そして，いよいよ文献というものに焦点を当ててゆき，D. J. de Solla Price 教授の *Little science, big science* などにふれながら文献量の増大と，それによって生じている諸問題を考える。

3 では文献による学術情報の流れの中での一次資料及び二次資料の役割およびタイプについて論じ，更にこの両者の間の境界のあいまいな点を指摘しながら三次資料などという考えの存在にも言及する。そして 4 においてこれら自然科学分野の文献探索活動の方法，タイプなどについての説明を行なう。

5 では自然科学分野の最も重要な一次資料としての学術雑誌論文を最初に取り上げ，"letters" などのような速報的な雑誌を含めた雑誌のタイプ，それぞれの役割，新しい傾向などを追究すると共に，Bradford の law of scattering であるとか，利用度の半減期などの問題に言及する。

また，研究報告書を取り上げる段階では，その持つ意義，問題点，最近の発展状況のみでなく，米国政府などの出版している，これらの報告書類を対象とした二次資料類の紹介も行なうと共に，それらの入手に関しての問題点に関連してクリアリングハウス，NTIS の活動に言及し更に Science Information Exchange, National Referral Center などの活動から，最近のわが国でのいわゆるクリアリング機構と称している一連の活動の紹介を行なう。

特許文献についても，それらの意義や現状の紹介と併せて，この分野の一次及び二次資料の紹介を行なう。

学位論文及びその他の一次資料についても大体同じような扱いをする。

6 の二次資料については，主として印刷物形式の，索引誌や抄録誌といつた文献探索のための道具類に重点を置くが，まず一番最初の時間に，これらの二次資料の世界的な動向としての，コンピュータを使用しての作成，及び磁気テープ化された二次資料，また，それらのデータベースを使用しての情報サービスのネットワーク化などの問題を論じて，この大きな変化の中での図書館及びそこで行なわれる，人手による文献探索サービスの役割及び将来の運命などについて考えてみる。

その上で，数学，物理学，化学，地学，生物学，医学，農学，工学などの諸分野での主要な二次資料を，主として索引誌，抄録誌に焦点を当てて解題する。ここでは，時間の関係と焦点を自然科学の文献の性格及び役割に当てているため，細かい二次資料の解題に重点を置かず，本当に主要な幾つかの二次資料を説明するにとどめ，個々のタイトルについては，自分で必要に応じて guide to the literature 類から情報を得るように指導する。

そして 7 で，最近数多く出て来た磁気テープの形の二次資料及びそれを使用する情報サービス，情報システム，などについて説明し，そこから派生する諸問題を検討する。そして最後に 8 で情報サービスのネットワークについて論じ，MEDLARS の発展経過及びその意義であるとか，CAS のサービスや，INSPEC などの国際協力態勢および INIS の活動その他について論じると共に，世界的な情報サービスのネットワーク案である UNISIST であるとか，日本におけるネットワーク案である NIST についても言及し，更に CODATA の活動にも検討を加える。

B. 教授方法

目的を自然科学文献の自然科学諸分野における学術・技術情報の流れの中での役割およびその特徴，動向というものを明らかにすることに置いているために，必然的に講義が中心となっている。そして講義での説明の不足を関連文献を読ませることによって補っている。しかし，ここで関連文献の reading assignments は，単に読ませるだけでなく，読んだ文献を抄録にすることを求めることにより，繰り返し強調される書誌調整の必要に関連して，抄録というものの性格を，自分がそれを書くことによって習得させることを狙う。また，特許文献などのような特殊の資料の説明に当っては，その分野の専門家に頼んで話して貰うこともある。

個々の二次資料の説明に当っては，出来る限り現物を回覧させ，これに馴染ませる方法を取るが，特に guide to the literature の説明にはこの点を注意する。

また化学，生物医学系の二次資料については，医学部の医学情報センターを使用すれば，これらの資料を使用しての実習が容易であるため，文献探索実習用の問題を学生に与えて，グループで実際に探索する宿題を与える。

時には，学生に特定の主題を選ばせて，その主題についての書誌を作る宿題を与えることによって，より深く，より広く，自然科学分野の二次資料に接する機会と，その作成の糸口をつかむために実際に幾つかの guide to the literature を使用する経験を持たせることを狙ったりする。

C. 問　題　点

資料論での問題点は，この「資料論Ⅱ」で取っている立場のように，特定分野の記録情報としての文献というものをその分野の情報の流れの中にとらえて，その特性，役割，動向などを明らかにすることに重点を置くことも必要であるし，同時に，個々の二次資料などについての知識を学生に持たせることも重要である。しかし例えば自然科学といつても広い分野にまたがり，それら総ての分野の二次資料を網羅的に説明することは，時間の上からも，1人の教員の能力を考えても無理なことであるし，まして文献資料の性質の解明に重点を置く場合には，個々の二次資料について，細かい検討を与えることはほとんど不可能である。

また，二次資料も一次資料の増加に応じて，その数を増しており，自然科学全般といったような広い範囲を対象とする場合は，タイトルの説明のみでも網羅的に行なうことは無理であるし，主要な二次資料といえども，その構成，索引，形式その他が絶えず変化するので，そのような点を細部にわたって説明することの意義は甚だ疑わしい。しかも，それらの説明を黒板を使用するのみで行なうことは，まるで食物の味を言葉で説明するのと同じで，本当に学生に理解させることはできない。その欠点を，よしんば説明している二次資料の現物を回覧することによって補おうとしても，短い時間に表紙をなぜるだけで終り，その二次資料そのものを理解するにはさほど役に立つとは思えない。

また，これは慶應義塾大学の図書館・情報学科にとっての特有の問題であるが，学科の置かれている三田のキャンパスには，自然科学系の学部は存在せず，従って，この分野の二次資料は皆無に等しい。図書館・情報学科の図書室には幾つかの二次資料のサンプル・コピーが準備されているが，それはほんのわずかの数であり，しかも，前述の如く，これらの二次資料の内容はほとんど毎年のように変化するため，サンプルが，サンプルとしての役を果たさなくなっている。勿論，医学部または工学部の情報センターの資料を借りることは可能であるが，二次資料は当然のことながら館外貸出しを禁じている種類のものが多く，仮に特別に授業の時だけ借り出せても，1回に運べる冊数には限りがある。また，授業のために二次資料のサンプルを学生に示すことができても，講義中のわずかの時間での回覧では，これらを充分に検討することは不可能である。しかし，二次資料の性格上，長く図書館・情報学科の資料室に借り出して，学生が余裕を持ってこれらを検討できるようにするわけにもゆかないのが実情である。

ところで自然科学文献の性格の検討に重点を置いている現在の問題点は，図書館・情報学科が文学部に属するためか，学生の自然科学分野の情報の流れについての理解も興味も必ずしも充分ではないように思われることである。また，そうであるからこそ個々の二次資料のタイトルを憶えるよりも，自然科学文献そのものの性格，役割，動向などについての知識を持つことのほうが大切と考えられるのだが，そこに重点を置いているために，自然科学各分野の二次資料を充分に広く取り上げて説明することは勿論無理になり，ほんのわずかの主要な二次資料のみを紹介して終ってしまう点も問題である。そこで「資料論Ⅵ」にこの面の不足を補うことを期待することになる。

自然科学文献の性格を学生に修得させる上での，今一つの問題点は，適当な教科書が存在しないことである。雑誌論文，研究報告書などの歴史，現状，意義，二次資料の動向等々について雑誌論文は国内，国外の関係雑誌に数多く発表されているが，これら総てをまとめたものはなく，わずかに化学分野の文献や情報といったものを論じた本が幾つか存在するにすぎない。したがって，関係論文を読ませて抄録を書かせても，それぞれの学生は数多い断片的な主題に関する論文のうちのほんの幾つかに接することができるだけである。

個々の二次資料についての説明の不足は，guide to the literature を充分に紹介することによって補おうとしているが，その紹介自体が，黒板を使用しての二次資料の解説と同じように，何か特別にこれらに馴染む方法を考えない限り，充分な効果をあげることは期待できない。

文献探索の問題を学生に出して2次資料を実際に使用する演習を行なうにしても，図書館・情報学科のある三田のキャンパスには，それらの二次資料がないため，学生は信濃町の医学情報センターであるとか，日吉の理工学情報センターなどに行って．これらを使って探索しなければならない。三田から日吉，信濃町までの距離を考えるとき，この問題集による二次資料の使用の演習にも自から限度があることになる。

D. 将来の改善策

まずこの科目のための教科書，またはシラバスを作る必要がある。ただ現在自然科学全分野での情報の流れ及びその中での文献の役割，性格，その動向などについての教科書として適当な本がないことをみても判るとおり，1人でこの主題の教科書を書くには，対象が広すぎるかも知れない。したがって各主題分野の文献情報にくわしい人達と組んで書くことを考えるべきかも知れない。

また，三田においての自然科学諸分野の二次資料の足りない点を充分に補う方法はありそうもないし，また，それらの二次資料の無いところで資料論を教えることには根本的に無理があるので，この科目はその時間を調節して，少くとも主要な2次資料の幾つかを備えている信濃町の医学情報センターか，日吉の理工学情報センターを使って行なうべきであろう。

焦点を文献の性格，特徴，役割，動向に置くことは将来においても妥当だと思われるが，そのために生ずる弱点である。個々の二次資料を充分に教えることのできないことを補うために，各主題分野の guide to the literature の類をより丁寧に紹介する必要があると共に，学生に主題を選ばせて，その主題についての書誌の作成を積極的に行なわせる必要がある。また主要な二次資料を使用して文献探索を行なわせて，実際にこれらの二次資料に馴染ませるための問題集を充分に整備する必要がある。

さらにこの科目が本当に効果をあげるようになるためには，「資料論Ⅵ」との緊密な連繋が必要である。

（津田　良成）

Ⅵ. 資料論 Ⅴ（児童図書資料）

A. 目　　的

児童図書に関して専門知識を必要とする専門職には，それらの製作出版にたずさわる作者，編集者，出版者，批評および研究にたずさわる批評家，研究者，教材として利用する教員，保母，さらに，組織的に収集整理して利用に供する児童図書館員，司書教諭と多岐にわたっている。それらの専門職の何れもが，広汎なジャンルにまたがる各種児童図書について基礎的な理解が必要であるが，同時に，創作方法，印刷出版技術，評論，歴史的研究，読書指導，図書館活動など，児童図書に関連するさまざまな側面を見るとき，アプローチの方法は必ずしも同一である必要はなく，また学習対象に比重の差がでてくることも当然である。

しかしながら，このコースにおいては，可能な限り上記各種専門方向に進む学生にとって必要な基礎知識を習得させながら，尚且つ，一般地域社会において，また，学校教育の場において，児童図書資料の専門家としての役割を果す児童図書館員，司書教諭にもっともふさわしい知識，評価力，指導力を養成するのが目的である。

またこの目的は，「資料論」各コースとの関連においてより明確に捉えられるべき性質のものである。つまり，「人文科学資料」「社会科学資料」「科学技術資料」などの各コースが，各知識分野の基礎的資料の把握を目的とするのと全く同様このコースは児童を対象とする資料を，その分野の図書館・情報活動を指向する学生にとって必須のものとして独立させたところにある。

しかも，この目的が，児童図書館員，司養教諭の資料に関する専門知識の養成にあることの特徴として，当然，児童図書の利用者である児童の理解，児童図書館，学校図書館における蔵書の分析，児童と図書を結びつけるブックトーク，ストーリーテリングなど，広い読書指導の意義と技術についての基礎的な理解が含まれる。また，児童図書資料の組織，管理・運営，各種活動は，「情報システム管理Ⅵ」（学校図書館・メディア・センター），「同Ⅴ」（児童図書館）において詳述される。

B. 方　　法

資料コースは，代表的実例を直接読み，評価分析するのが，もっとも具体的且つ効果的であるので，授業方法は，講義と偏重せずシラバスの単元にそって，次のように行なう。単元毎に，まず概要を講義し，つづいてブックトーク，映画，スライド，録音教材を併用して，代表例を，実際の図書及び事前に準備した上記 A-V 教材によって multi-media のプレゼンテーションを行なう。絵本，昔話，詩などのジャンルでは，この方法により，単なる講囲だけではふれることのできない範囲に及ぶことができるだけでなく，それぞれのジャンルの特質に，講義では不可能な程度にまで迫ることができる。また，

プレゼンテーションが効果的であるのみならず，学生に教えずして，multi-media のプレゼンテーションを学ばせることができる。

一方，学生には実習的課題として，各単元毎にリーディング・アサインメントの他に，シラバスにとりあげた代表的例に自己選択の例を加えて，実際に読み，評価する課題を課す。その発表方法としては，教室での討論，oral book review（口頭による書評），書評カード・レポートの提出がある。書評カードの作製にあたって，代表的書評誌を積極的に利用させて，書評メデイアに習熟させ，また，提出された書評カードは，後日，教室で．若干の例により，利点欠点を指摘する。

児童図書の実例は，当学科のサンプルコレクション及び公共図書館，学校図書館の児童図書を積極的に利用させる。当学科のサンプルコレクションは，代表的受賞図書をはじめ，積極的価値をもたない例をも含む評価の教材としてのコレクションであり，best books のコレクションではない。

C. 範　囲

児童図書研究の方法には，大別して歴史的アプローチとジャンル別アプローチの二つが考えられる。前者は教育史，文学史，出版文化史などと並行して，児童図書の変遷を歴史的にたどり，各時代の思潮が児童図書の上にどのようにあらわれたかを考察し，ひいては児童図書の時代的価値，古典的価値を分析しようとする方法である。後者は現状に立って，つまり今日の子どもが読むということを前提として，児童図書を絵本，文学，知識の本などに類別し，各ジャンルの図書の特質，評価の規準，代表的例などについて研究する方法である。

このコースにおいては当然のことながら，後者の観点に立ち，児童図書のジャンルを，幼児から少年期（小学校高学年），ローティーンに至る年令の発達段階に順応させて配列し，前述したように，各ジャンルの特質，評価規準，代表的例を考察し，さらに，それぞれに適切な読書指導の方法に言及する。

序　論

児童観の推移が児童図書に及ぼしてきた影響，子どもの生活環境と読書実態，現代社会における児童図書選択の意義，公共図書館と学校図書館の相違などを概説し，各ジャンルの児童図書評価に共通する基本的な批評の態度についてふれる。

1.　児童の発達課題と読書興味

この単元においては，読者であり利用者である児童の基本的要求について概説する。即ち，発達課題，感情，思考，言語，知能，情操などに関連して児童の基本的要求を，発達段階的に考察し，読書の果す役割をみる。

2.　児童図書の領域区分と分類

図書館学での分類と児童の読書興味との関連，また，出版の慣習による類別と児童の読書興味，児童図書の成人を含めての各種利用者などの諸問題を検討して，児童の読書興味と発達段階にもっとも適切なグルーピングについて考察する。

3.　絵　本

児童図書のジャンルを発達段階に即して配列すれば，まず最初にとりあげられるべきものが絵本である。絵本の対象は，主として1～3才，3～5才，5～7才の幼児であり，それぞれの年令グループで，望ましい絵本の特徴をあげることができる。この単元では，幼児の言語，美的感覚，空想力，情緒，知識などの育成に寄与する絵本の働らき，すぐれた絵本の条件，アメリカ，イギリス，ドイツ，フランス，スイス，チェコスロバキア，ポーランド，スエーデン，フィンランドなど諸外国及び日本の代表的絵本を比較し，画家の作風，絵画的伝統の相違，絵本に現われた文化的風土の相違，児童感の相違，古典的絵本と現代的絵本の比較，歴史的推移など考察して，絵本の世界に広く親しむようにする。

4.　伝承文学

大昔，素朴な空想力から生みだされた昔話をはじめとする伝承文学の中には，その単純な物語構成，普遍的な真実感，明快な語り口などの要素により，子どもの文学に適するものが多く見出され，また民話の文化遺産，文学その他の芸術の源として，子ども時代に与えられるべき多くの価値をもっている。伝承文学のジャンルには，民話，神話，叙事詩，伝説，寓話，説話などが含まれるが，それぞれの子どものための再話を評価するために必要な典拠，物語の類型と特徴にふれ，子ども向きの代表的再話集の比較評価を行なう。

5.　絵本の与え方とストーリーテリング

図書館で集団の児童に読書指導を行なうには，図書館にふさわしい読書指導の技術があり，幼児，低学年の児童には，これまでにふれた絵本，伝承文学を紹介するのに，「絵本の与え方」とストーリーテリングがある。この二つの方法について，その意義，絵本あるいは物語の選択，準備，読み方，話し方の技術，応用，プログラムの構成などについてふれる。3．4．5．の単元では，映画，スライド，録音教材を積極的に利用し，資料の内容

把握を容易にさせると同時に，方法のデモンストレーションを行なう。

6. ファンタジー

近代にはいってからの創作児童文学の主要部分を占めるものがアァンタジーであると同時に，児童の読書段階においても，伝承文学の次に読み進む領域が，空想的な物語，即ちファンタジーである。このようにファンタジーは，児童文学の歴史の中で，もっとも重要な位置を占める分野であり，研究者に多くの課題を提供するのみならず，読書において児童に与える影響も大きいので，シラバスにおいても充分な単元を考慮されている。定義，ファンタジー作品の特質，伝承文学から現代作品に至る系譜，類型，『天路歴程』『アンデルセン童話集』『星の王子さま』『ふしぎの国のアリス』『ピーター・パン』宮沢賢治の作品など内外の名作が数多くとりあげられ，リーディング・アサインメント，書評などが課せられる。

7. リアリズムの作品

空想的な作品と同時に写実的な物語も，児童文学の大きなジャンルであり，この単元においてもファンタジーの単元同様，内外の古典的名作にふれ，それらの価値を尺度として現代の作品の評価を学ばせる。

8. 歴史小説，伝記

前者はフィクションであり，後者はノンフィクションとして一般的には類別されるが，児童の読書興味では，相互に密接に関連した題材である。従って，それぞれの特質や評価規準の類似点，相違点に留意しながら，文学と史実の相違が，児童図書の中で，どのように取り扱われるべきか，またそれらが，児童の読書興味に，どのような影響を与えるかを考察する。

9. 詩

詩は，これまでふれた児童図書のジャンルと全く異なる取り扱いを必要とする特殊なジャンルであり，詩を好む子ども，子どもが詩を読む時などのデリケートな心情の理解が必要であり，また，個人詩集の選択以前に，すぐれたアンソロジーの存在価値を認識させる必要がある。すぐれた詩人の朗読レコードなどにより，詩の感覚にふれさせる。

10. 知識の本

人文科学，社会科学，自然科学，工学などの諸分野の児童図書は，文学部門と比較して古典的価値を備えたものが少ない。従ってカレントな実例をとりあげながら，情報の正確さ，記述の適切さなどを中心とする選択上の留意点にふれ，文学と異なる評価基準について学ぶ。

11. 参考図書

児童向きの百科事典，辞書は，成人用の本格的参考図書に比して際物的性格が強く，恒久的価値を持つすぐれたものが少ない。しかしながら，児童が理解力に則して各種の参考図書の利用になれることは，将来のためにも必要である。従って，一般の参考図書評価基準を応用して，代表的な児童用百科事典，辞書の分析評価を行ない．児童室あるいは学校図書館に適する好例と，それらの利用指導の方法にふれる。

12. ブックトーク

図書館で集団の児童生徒に図書を紹介するもっとも適切な方法の一つにブックトークがある。ブックトークは，読書意欲を刺激するのが目的であり，図書の内容をダイジェストして与えることではない。あるトピックや主題を中心として，読書レベルや読書興味の異なる子ども達に，数冊以上の本を，それぞれの特徴だけにふれながら興味をそそるように紹介する方法である。この単元では，ブックトークの意義，トピックの選び方，図書の選択，準備，話し方の技術，プログラムの構成などについてふれる。

13. 選択書誌，書評メディア

児童図書選択のための書誌，基本図書目録，書評メディアの範囲，特徴，利用方法についてのべ，実習を課する。

D. 授業時間数

現在は，半年2単位コースであるが非常に広汎な範囲を網羅するので，通年4単位は最低必要である。

E. 問題点

1. 現在は，他の時間割との配分上半年2単位の科目になっているため，講義，課題共に皮相的にならざるをえない。児童図書館員，司書教諭の何れを問わず，児童図書資料の専門家であるためには，この科目の修得に充分の時間が配されることが望まれる。現場における経験者の間にある強い要望でもある。

2. 学科に，児童図書購入の予算がなく，収書の多くは，個人的コネクションによる若干の出版社よりの寄贈であり，バランスのとれたサンプルコレクションの保持が困難である。

3. Multi-media のすぐれた資料が生産されているにもかかわらず高価で入手できない。

4. 学生の子ども時代の読書経歴に驚くべきほどの差異があり，授業内容の理解および進展に大きな影響を与えている。

参考文献については

児童図書研究シラバス，Ⅰ（児童の発達課題・絵本・伝承文学）*Library and Information Science*, no. 6. 1968，児童図書研究シラバス，Ⅱ（ファンタジー）*Library and Information Science* no. 7. 1969 に詳述してあるので参照されたい。（渡辺　茂男）

V. 資料論 VI.（理工学資料）.

「資料論Ⅵ」（後期）の講義内容は「資料論Ⅱ」（前期）と密接な関連をもっている。科学技術分野の全般について，その学問研究の特徴，文献情報の流通，文献情報の性格，情報利用のパターン等を総論的に解説するのを「資料論Ⅱ」とすると，「資料論Ⅵ」はこれを受けその延長線上で主題を細分化して講義を進める各論的性格を帯びている。

このため，「資料論Ⅵ」の中味を必ずしも理工学資料に固定する必要はない。医学・薬学・生物・農学といったライフ・サイエンス系列の主題領域が当然その対象と考えられてよい。事実，これらの主題領域はかつては資料論の中味であった。また将来もこれらを順次その内容としてとり入れ，一定期間ごとに「資料論Ⅵ」の内容を組み換えていこうとする計画が立案・検討されている。

本節では「資料論Ⅵ」を理工学資料として解説するが，その背景には以上のべた事情があることを付記しておきたい。

A. 主題範囲の限定

ここでいう理工学とは物質科学と工学（physical sciences and engineering）のことである。基礎科学としての数学・物理学・化学と，その応用科学としての機械工学・電気・電子工学・化学工学・計測工学などが取扱われる主要な主題領域となるが，以上は本塾大学工学部のカリキュラムの内容と一致している。

この講義では資料を実際に活用する場として工学部のキャンパスにある理工学情報センターを利用する。図書館・情報学科図書室に備えられている理工学関係資料は限られているのでこれはやむを得ない措置である。しかし，地理的，時間的制約が存在するためキャンパス外の機関を利用するのにもおのずから限界がある。資料論の講義では，講義の展開と現物資料のチエックとが不可分の関係にあるため前者が後者によって制約されるのはある程度避けられない。この講義の扱う主題を先にのべた範囲に限っているのも理工学情報センターのコレクションの主題範囲と無関係ではない。

B. 講義のねらい

一般的には，大学教育の目的は職業教育ではないから，図書館・情報学教育といえども現場を意識した教育に偏すべきではないかもしれない。受講する学生の大部分も必ずしも理工学分野の文献情報を扱う機関に就職するとは限らないし，就職したとしても現実にその数はきわめてわずかである。

だがこの一方で，資料論という講義の性格と理工学という主題分野の特殊性とを考えてみる必要がある。*Engineering Index* という抄録の特徴と効用とに関する知識を得たとしても，それが科学に無縁な人間の一般の生活でモノの役に立ったり，考え方の基礎になったりするというケースはまれであろう。*Engineering Index* の知識が生きるためには，理工学分野の資料室や図書館という特殊な場の存在が必要である。この場との結びつきなしに講義の目的を考えることはできない。すなわち，理工学資料の講義が狙っているのは単的にいって図書館や資料室，情報管理部門等のサービスの現場で，この主題領域に関連する専門職の仕事を遂行し得る能力を養うことである。

ところで，ふつう専門職の能力という場合，経営管理能力と実務遂行能力の両方を意味している。資料論の講義が意図するのは後者の能力の養成にあることはいうまでもない。そこでこの点をさらに詳しく説明するとまず関連主題領域の基本的な参考図書と索引や抄録などの二次資料から成るコレクションを作り上げる能力の養成が挙げられる。整備が遅れている現場やこれから新しいものを作ろうとする場合に最初に要求される能力はこれである。またこれと共に，上にのべた範囲の新しい文献情報の取捨選択に関する原理原則の習得もひとつの狙いである。

理工学分野の基礎的なコレクションが整備されればこれを用いてレファレンス・サービスの展開が可能となる。レファレンス・サービスには一次情報源を用いた fact-finding 的なものと，二次資料を用いた文献調査や文献探索を含めて考え，これらを遂行し得る人材を育成するための基本的な訓練の場を提供することを狙いとする。

また，一次情報の流通チャンネルの整備が遅れている実状にあって，どうしたらこれを確実に取得・提供し得るか，という問題を考え，それに対処できる人材の養成も講義の狙いのひとつである。

C. 講義内容の構成

90 分授業で 13 回程度という時間的制約の中に全体をまとめる必要があることから，講義の構成について 2 通りの方法が考えられる。ひとつは文献のタイプごとに単元を構成し，理工学をひとまとめにして講義する方法である。いまひとつはその逆に理工学の主題を細区分して個々の主題の中で文献をタイプ別に解説するやり方もある。どちらの方法をとる場合にも一長一短はあろうが，理工学の分野では専門主題ごとの文献情報の特徴を習得することが比較的重要と考えられるので現在はとりあえず後者の方法によっている。従って，単元の構成は以下のとうりである。

1. 講義内容の紹介と授業方針
2. 物理学と数学
3. 化学と化学工学
4. 土木工学
5. 電気・電子・制御工学(コンピューターを含む)
6. 機械工学
7. 航空宇宙工学
8. 原子力工学
9. 金属・冶金工学
10. 管理工学（経営科学，IE，OR など）
11. 特許，仕様書・規格など
12. 内外の主要な情報センター，図書館とそのサービス

この他に前後 2 回程度の試験が加わるので与えられた時間をほぼ一杯に使用することになる。個々の単元の内容はその分野の代表的な一次・二次の情報源資料を情報探索の見地から紹介・解説することになるが，この他に関連の学協会の情報活動の現状，その問題点，情報活動全般の今後の展望なども合わせて解説する。

一例を物理学と数学の単元にとると概略以下のとうりである。

物理学と数学

1. 文献情報の特徴と利用パターン
2. 主要な文献案内書（例 Yates の *How to find out about physics* や Pemberton の *How to find out in mathematics* など）
3. 基本的な参考図書：特徴と限界
   内外の専門辞書，便覧，ハンドブック，専門百科辞典など，
4. 書誌，抄録，索引
   Mathematical Reviews
   Physics Abstracts
   科学技術文献速報—物理，応用物理編など
5. 主要な一次情報源（学会出版物）
   情報源としての内外の主要専門誌，基本的な専門書，叢書など
6. 主要な学会とその活動
   AIP，AMS，INSPEC，など
7. 情報活動の現状と問題点
8. 参考文献
   例えば Slater, M. J. et al., "The growth of the literature of physics," *Report of progress in physics*, vol. 32, 1969, p. 709-769
   Lohwater, A. J. "Mathematical literature," *Library trends*, vol. 15, April 1967, p. 852-867.

この単元の構成は大体以上であるが，他の主題についてもほぼこれと同じパターンを踏襲する。講義の最後に内外の主要な図書館や情報センターのサービスの紹介を予定しているが，これは実務に携わる場合の有益な情報であり，実務の方向づけの目安ともなるべきものである。

D. 教 授 法

講義を主体とした内容とし，リーディングアサインメントを適当に課すことによってこれを補強する。また，資料の理解を深めるため模疑的なレファレンス・クェッションを出題し，その解答作成の過程を通じて理工学資料になじみ，実務の性格の一端を把握できるよう配慮する。

実際の資料は慶應義塾大学理工学情報センター所蔵のものを利用するので，一時に多数の学生が当センターに殺到することのないよう工夫する必要がある。利用すべき資料の範囲もごく基本的なものに限る必要があろう。

試験を刺激剤として適当に利用するのも効果的だが資料論の性格上暗記のための暗記を強制する結果に陥る危険がつきまとう。この意味で，ビブリオグラフィーの作成といったプロジェクトを授業の中に有効に組み入れていく方がこのコースの目的と狙いに合致した効果が生まれるかもしれない。

講義を主体とした授業では内容が単調に流れやすく，学生の学習意欲もしめりがちとなるので色々な方法を組合わせてバラエティーと刺激とを与えることが大切である。

E. 問 題 点

資料論は資料の特徴とその利用法とに関する講義である。従って，資料が常に手もとにあり，必要のつどそれを参照できるという条件が与えられることが最も望ましい。理工学資料についてはこの条件を十分にみたすことができない点がひとつの問題点である。工学部のキャンパスが利用できるとしても，その所在地は横浜市日吉の矢上台であり三田から1時間以上かかる距離にある。

また，現物チェックが可能であることを条件とするので，講義で紹介する資料の大半は原則として工学部が所蔵するものに限られている。このことは，工学部の所蔵状況が授業内容を制約することを意味するので好ましい状態とはいえない。

以上のハンディキャップが存在するため，資料範囲は制限されざるを得ない。しかし，この制約を逆に利用して内容を精選された資料に限り，これを狭く深く掘り下げるという方法をとることが可能である。

学生の語学力によって内容の理解がある程度制約されざるを得ないという問題点もある。解説する資料の主力は英語であり，理解を深める参考文献も大半が英語である。従って，学生が読むべき参考文献の選定についてはその数をできるだけ少くして内容の高いものを選ぶ配慮が必要である。

最後に，理工学の専門主題をもたない者が理工学に関する資料を用いて情報サービスを担当することができるだろうかという最も基本的な問題が残されている。受講者は原則として文学部の学生であり，理学と工学の主題分野からきわめて遠い所の存在である。理工学の用語が日常生活になじみのうすい特殊なものであるだけに主題知識をもたないということは大きな阻害要因である。このことは，理工学以外の主題分野についてもあてはまるので学部課程における図書館・情報学教育がかかえる本質的な問題のひとつといえよう。

ところでこうした反面，資料論とは本来文献資料に関する知識の体系と，それをバックにした情報探索の手法とを取扱う領域である。この領域の存在意義はすべての主題を超越した所で確立される必要があり，理工学資料もこの主旨にそうものでなければならない。この観点に立つと，主題知識の欠除は阻害要因ではあっても知識習得上の致命的欠陥となりうるものではない。

実際の講義では，この阻害要因を克服するため特に専門用語類の理解を助ける資料の紹介，解説を重点的に進める必要がある。主題の知識とは，つまるところ専門用語の知識と専門の用語と用語の間の相互関連の理解度とに他ならないからである。　　（中島　紘一）

資料組織系列科目群

A. 資料組織系列の位置

〝資料組織〟という語は英米でOrganization of knowledge, すなわち知識の組織化, として図書館学のカリキュラムに組入れられている概念をさすものである。しかし〝知識の組織(化)〟では,わが国では科学哲学への連想が強く,さし当り図書館学用語として適切でないきらいがある。むしろ〝情報資料(およびそれに関する情報)の組織化〟とでもいつた方が当を得ているであろう。〝資料組織〟はこの意味での簡略化である。従来,目録法および分類法と称されてきたものがこれに当る。

科目編成では,この系列はさらにいくつかの科目に分けざるを得ない。そのそれぞれについては追って検討することとし,これに先立って,全体としての資料組織系列を考察しよう。

まず私見として,資料の組織化とは〝資料に関する情報の伝達のためのフォーマット〟にかかわるものと考えたい。換言すれば,個々の資料の識別とその記述を通して,生成・消滅する情報資料の総体へ接近する方法である。

このことは,やや長くなるが,C. D. Needham の引用によって,より明らかにされるであろう。

> 〝すべての社会の存在は正に知識の伝達に依存する。社会がより複雑になるにしたがって,その知識も複雑になり,かつそのコミュニケーションも複雑になる;絶えず増加してやまない大量の情報は,その社会の成員間でのみ円滑かつ正確に流れるのみでなく,異なる社会との間にも,さらに過去の諸世代との間においても,円滑・正確に流れなければならない〟。[1]

このようにコミュニケーションとしてとらえた場合に,Needham の指摘するように,その〝量〟,異なる〝文化〟,隔った〝世代〟(未来も含む)を同時に考慮に入れ,これを超えるというきびしい条件に見合った〝最少限の共通フォーマット〟こそ,資料組織が第一義的にかかわることとなる。これによって,ある一個の資料が,資料の総体の中でどのような位置にあるべきかの予測性が与えられるわけである。

実際には,このような文化をこえ,世代をこえた共通フォーマットは現存しない。むしろ,文化間,世代間でのやむを得ぬ変換が必要となる。従って,具体的には自国の文化,しかも現代文化を基盤とし,これを媒介として異なる文化,隔った世代への理解を深めていく以外には手段がないであろう。

さて,学問自体としても,現実のカリキュラムのワク組の中でも,第1に考えるべきことは隣接領域との相互関係である。すでに長沢[2]が報告しているとおり,資料組織系列は他の二系列,資料系とシステム系,とともに,学部課程の図書館・情報学の三本柱を成すものである(或は,探索系列を含めれば四本柱)。もちろんこれはバラバラな柱が三本あるということではなく,一つの構造をなすことによってはじめて〝柱〟としての意味をもってくるのである。それ故,資料組織系の固有領域も,他の二系列との関係をも含めて定義しなければならない。

すでに資料組織系は〝資料に関する情報の伝達〟にかかわるものとしたが,これに対して資料系はどのように規定したらよいであろうか,もちろん,資料系といえども,個別の資料に深くかかわることは不可能であるばかりでなく,それを目的とするものではないはずである。それよりも,何らかの特性に基いた資料タイプを求め,各タイプに属する重要度の最も高い代表的資料を基点として,タイプの実証的な識別と,その図書館・情報学におけるかかわり方を明らかにすることが,有効な方法となるであろう。

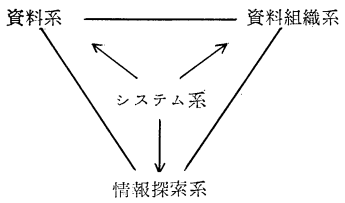
ここでいう〝資料〟には,いうまでもなく,一次資料と二次資料との双方が含まれる。一次資料の問題は新しいコトバでいえばメディア論という側面も十分にもっていよう。また,二次資料はそれ自体一つの部分的な情報検索システムであり,それ故に資料組織系とのかかわりが深くなり,実行上には若干の調整が必要となる場合もあるであろう。

一方,情報伝達の面をよりダイナミックにとらえるならば,当然〝システム系〟の問題となる。ここでは,個別資料はもちろん,場合によっては資料タイプも抽象した形で,メカニズムとして考察すべき広大な場面が存在する。すなわち,資料組織もこの立場から見れば,そのための一つのシステム(サブシステム)であり,視点お

よび方法面の差は明瞭である。もちろん，資料組織系自体をシステムとして攻究することはシステム系の見方であり，逆に資料組織系としてはシステム的検証に耐えるものを作り上げなければならない。この意味において，両者の補完的関係が明らかとなる。

なお，長沢が現行カリキュラムでは割愛せざるを得なかったという〝情報探索系〟は，資料系と資料組織系の充実した暁には，両系の接壌地帯を占めるようになるのではあるまいかと考える。

以上を総合すると，次のような図式になるであろうか。



B. 目標と条件

さいきん〝生涯教育〟がしきりに強調されてきたが，元来教育も研究もそれ自体終りはないものである。しかしながら，一定の社会的条件の下では，教育目標は有限かつ具体的でなければ，計画も立たず，実行も不可能となる。

いまここで対象とする大学学部の専門教育課程としての資料組織系の教育には，次のようなワク組が与えられている。

（ｉ） 学部２年次から実施する。即ち，教養課程１年を修了した学生を最初の対象とする。

（ii） 修士課程において情報蓄積・探索論，メディア論，システム論，分析論等が用意されていて，限定したトピックをより深く追究することができる。

（iii） 学部の２～３（４）年次にわたって，他の系と並行して行われる。

（iv） 一部は必修とし，残りは選択科目とする。必修料目は，他系列のそれとともに，図書館・情報学の共通コアーをなすものであるから，同系列の選択科目への入門であるのみならず，分節されたコアの要素として，すべての選択科目への準備ともならなければならない。

1. 単位の配分

現行カリキュラムでは，専門科目 72 単位以上が要求され，次のように配分されている。

		単位数	比率(%)
図書館・情報学	必修	28	39
同	選択	＞18	25
その他の科目（マイナス）	選択	＞26	36
合　計		＞72	100

このうち図書館・情報学のみの配分は次のとおりである。

	必修	選択	最小比率(%)*
基礎系	8	—	18
資料系	6	6～12	23
資料組織系	6	4～8	23
システム系	6	4～12	23
その他	2	4	14
計	28	18～36	101

* 最小 44 単位（必 28＋選 18）をベースとして

これによれば先に〝三本柱〟といつたが単位数では４分の１に相当する 23%となっていることがわかる。

参考のため，他の諸規程[3]における，資料組織系の単位配分状況を見ると次のようである。

（ｉ） 図書館法施行規則第４条（司書講習）
19 単位中　6～8 単位　32～42%
同第５条（司書補講習）
15　5　31

（ii） 図書館学教育基準
38　＞8　＞21

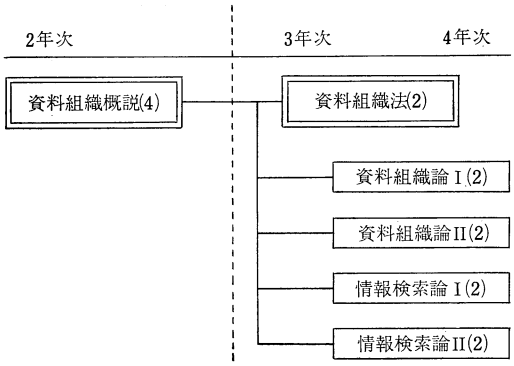
（iii） 図書館員養成課程基準
必修　＞20　＞8　＞40

（iv） 図書館短期大学学則
＞44　14～18　32～41

以上を通観すると，本学科が単位比において最低に見えるが，分母および単位数の絶対値をとってみれば正に中庸をえているともいえる。いうまでもなく，正規の学校教育では最低 10 単位をこえている。

2. 科目の分け方

現行カリキュラムでは次のように，資料組織系は６科目に分け，スケジュールされている。



二重ワクは必修；(　) の数字は単位数

先ず，「概説」は2年次，「法」は3年次の必修としていることは他の系列と同じ様式である「論」は3～4年次において選択科目とし，同系の4科目（8単位）のうち，少くとも2科目（4単位）を履修することとなっている。

とくに「概説」と「法」とは先後関係も明確であり，また前者は講義を主とする入門，後者は演習と，アスペクトも明らかにしてある。

これに対し，「論」グループは新カリキュラムで全部選択とし，その履修は原則的に独立であって，同名のⅠとⅡを取らなければならないこともなく，またⅠとⅡには先後関係もない。〔なお，このカリキュラムの全面実施は昨年度（47年度）の2年生からであり，今やっと3年になったばかりで，十分評価する実績がない。〕

3. 各科目の特性

「資料組織概説」は資料組織の全体にわたって理論的根底を与え，翌年次の「資料組織法」（演習）のためのパースペクチブを形成することを目的としている。実際の教授法としては，講義を主とし，また「図書館・情報学概論」等とも調整して，見学等加えることが考えられる。

とくにわが国の学術図書館ではいわゆる洋書を扱う機会が多く，従って洋書の取扱いには特に配慮する必要がある反面，2年次学生にとっては未だ外国語の修得期に当るため，むしろ外国語の教科書以外の洋書に対する馴れと親しみの面を含んだ授業が望ましい。

「資料組織法」は，演習科目とし，従って規範として具体的・特殊的なものを採り，トレーニングとして実施する。実際の用具としては「日本目録規則 1965（および修正・増補）」，「日本十進分類法新訂版（1961）」，ならびに「基本件名標目表改訂版（1971）」を用いることとし，必要によりDDC 18版，AACR，Sears List 10版等へ refer することとする。

演習科目としての教育効率を高めるため，1973年度より1学年を2クラスに分け，指導の徹底，早いフィードバックを期している。

特に留意すべき点は，次のとおりである。

（ⅰ） 洋書の呈示をできる限り多くする。

（ⅱ） 分類目録の作成を目的とする。

（ⅲ） 件名標目法はわが国での普及状態から見て，多少ウエートを軽くせざるを得ない，

（ⅳ） コンピュータ化への連続性をもたせること。

「資料組織論Ⅰ」（主題分析）および「Ⅱ」（書誌記述）は，アドバンストコースとして，特殊条件を設定してトピカルに運営する。

「情報検索論Ⅰ」および「Ⅱ」は，電子計算機システムの応用面に限定し，施設面からみて，当分講義を主とせざるを得ない。学内の実験システム，実用システムの充実をみて，逐次具体例のデモンストレーションを増加していきたい。

なお，「情報検索論」からのフィードバックとして，逐次刊行物の取扱い，特に索引作業の問題があり，他方，システム論との関連も強まってくると思われる。

（小林　胖）

1) Needham, C. D. *Organizing knowledge in libraries*. 2d rev. ed. London, Andre Dentsch, 1971. p. 11.

2) 長沢雅男．〝図書館情報学の教育，〟*Library and information science*, no. 10, 1972, p. 9.

3) 日本図書館協会．〝図書館関係法規基準集1970年版〟による．

I. 資料組織概説

A. 目　　標

前述のとおり，この科目は2年次における専門科目への入門を受持つものの一つである。すなわち，一方ではようやく教養課程のなかばを終えた未完成の学生への配慮と，他方，以後3年間の専門教育の第1歩としての意義とが，ここでオーバラップしているわけである。このような条件はこの科目に特有なものではないが，プロフェッショナルに本を扱うことの重さは，この科目では相対的に大きい。

さらに，この科目には技術的な面が特に大きく，しかもそのために電子計算機化の影響が強い。すでに米国においては MARC，英国では BNB のように librarianship に広汎な波及効果を生ずべき変化があり，最初は単なる環として受取られていたものが，すでに具体的・オペレーショナルなものとなってきている。わが国でも国立国会図書館が 1975 年1月を目ざして，すでに書誌情報システム（漢字を用いる）を技術的に完成し，実用化と普及の方策がとられつつある。[1)]

このような大きな変化は，図書館学校教育機関のみならず，librarianship 全体が真正面からとりくむべき問題であり，かつ今日早急な解決を求むべき時期にあるといわなければなるまい。

しかしながら，これらの〝新しい〟システムが与える個々の書誌情報は，これまでマニュアル・システムが与えてきたものと同一である。従ってこれの理解と，その背後にある思想の把握がなければ，新システムも新しい効果を発現し得ないであろう。

要するに，変化と恒常という相反する側面をもった系として資料の組織化の考え方と技術とを考察し，そのための規範とその限界を知ろうとするのがこの科目の目標である。

B. 要　素

1. 書誌情報の意義
   - (a) 資料の総体
     - 資料の総体；図書館の実態
     - 出版のダイナミックス
     - 出版物総目録（全国書誌）
   - (b) 資料の形態
     - 図　書
     - 逐次刊行物
     - 政府刊行物
     - 特殊資料
     - 文　書
     - 非図書資料（多様化）
   - (c) 仮想の図書館像
     - 蔵　書　10～100 万冊
     - 受入図書　5,000～50,000 冊/年
     - 雑　誌　1000 種
     - 設置者別　大学または公共図書館
     - 利用者　教職員，学生，または市民
     - 組織と業務
   - (d) 利用者の行動と書誌情報の役割
     - 書誌的アプローチ
     - 主題的アプローチ
     - ブラウジング
2. 書誌的ユニット：確認と表示
   - (e) 資料と書誌情報の関係
     - 排架と検索
   - (f) 主記入と標目
     - 著　者（authorship）
       - 個人著者名の形（と読み）
       - 団体著者
       - 参照；副出
       - 実用例（National Union Catalog：Author List など）
3. 記　述
   - (g) フイジカルな記述
   - (h) 書誌的な記述（の限界）
4. 主題の取扱い
   - (i) 主題と知識との関係
   - (j) ファセット分析
     - Time および Space ファセット
     - Personality ファセット
     - Foci
     - 結合順序
     - 助記性；形式区分
   - (k) 分類表および分類目録法
     - 構　成
     - 記号法
     - 相関索引
     - 索引ファイル
     - 使用例（BNB など）
   - (l) 件名標目法
     - 統制語彙の構成
     - 分類との関係
     - 使用例（National Union Catalog：Subject；CBI など）
5. 図書記号法，排架，目録の編成
   - (m) 図書記号法；排架
   - (n) 目録の物理的形態；作成法
     - カード形式
     - 書冊形式
     - （電子計算機化）
   - (o) 目録の編成
     - 書架リスト（図書原簿）

閲覧用の編成；案内

6. 逐次刊行物

(p) 記述要素

書誌的要素

特性づけ (characterization)

(q) 個別記事を書誌単位とした場合

記　述

主題の取扱い

Indexing

二次資料との関係

7. 資料組織化作業の考察

(r) 知的な作業と事務的な作業

(s) 作業の分散，集中，分担・協力

(t) 他の部門との関連

部内：収集・選択部門

参考業務部門

貸出部門

部外：同一組織・系統内

地域的

相互協力

総合目録

C. 要素の呈示順序と時間配分

1. 呈示順序と各ブロックの説明

一応上記Bにおける順序を呈示順序とするがその理由，程度を以下説明する。

1.（書誌情報の意義）はこの科目の導入部であるとともに，併行的に開始される他の科目とも関連をもたせ，調整をはかることを目的とする。

わが国では，大学入学前に学生が学校図書館や公共図書館を利用した経験が極めて乏しい。その上，英国[2]や米国[3]のように，図書館学校への入学要件として在職経験を要求することもできない。それ故，図書館・情報学科へ入学（正確には2年進級，専攻決定）した時点で十分に精神的準備をはかる必要がある。その上，多少でも数量的イメージを与えておくことが，仕事に要求される質の理解を助けるであろう。

2.（書誌的ユニット）は，資料の総体との関連において個別の資料のアイデンティフィケーションを行なうという，図書館・情報学の最も基本的な操作である。大きな実用システム（たとえばNDC，BNBなど）との関連づけは，参考・書誌作業との相乗効果を期待している。

大学図書館では，外国の図書雑誌についての資料組織者としての技術がとくに要求されるが，その前段階としてまず〝慣れ〟が必要であろう。できれば，折角学習している第二外国語（独，仏，露，中など）を活用する場も用意したい。

例外的な図書，古書，文書等の呈示は，この学科では学習能率の関係からしない方がよいのではあるまいか。

3.（記述）は即物的なフイジカルな記述，すなわち通常の目録記述の最小限度，標目，書名，著者標示，出版事項，対照事項の諸項目のほかに，書誌的な記述（一般には注記とされるものの一部）を，図書館目録の完結性を確保するために，強調すべきであろう。たとえば，原書と翻訳書，版種 (version) などがそれである。情報の二次伝達についても注意したい。ただし，これには，目録規則の補足，作業能力・効果などの面から，なお研究すべき点が多い。

4.（主題の取扱）では，まず主題知識のかん養，より広くいえば知的好奇心を強めることが必要である。[4] このねらいは〝主題知識か図書館学か〟といういい古されたポレミックより以前のレベルにおいて，図書館・情報学のワク内での主題取扱いである。理論的には，主題取扱のフォーマル・アプローチ（アルゴリズム）がなくてはならないが，これは未完成であるため，主として経験的な方法によらなくてはならない。

分析的方法としてのファセット分析は，この場合最も有力な手段である。この手法と，各種の分類法の中の適切な schedule を援用することによって，分析用具の形成が可能となる。

次いで，DC または NDC によって，分類目録を目的とする分類作業を試行することができる。M. Mann に代表される〝分類は図書の排架のため，検索は件名標目で〟というアメリカ式の思想は，わが国の実情と著しくかけ離れている。[5] それよりも，一旦分類目録法として徹底した後に，件名標目法を統制語彙（シソーラス）を用いる実用システムへの馴化のステップとして教える方がわかりやすいと思われるからである。

5.（図書記号法，編成など）は最小限度にとどめるが，目録，分類，排架等の個別作業を総合する形でまとめることができよう。

6.（逐次刊行物）は1—7の作業別のスケジュールからいえば異質な区分であるが，とくに大学（学部）図書館では最も必要とされる専門知識であるにもかかわらず，他の科目でも十分に取上げていないために，あえてここに一つの単元としてもってみた。将来これは少くとも1科目とすべきものと判断される。

とくにここでは，目録・分類のワクから多少はみ出して，雑誌の特性づけおよび雑誌記事の取扱に及び，他の科目との連接をよくしたい。大学図書館員の資格についての発言[6]の一つの理由として逐次刊行物についての知識の欠落が強調されているのではないだろうか。

最後に7.（作業）で作業を管理の面から考察し，これを拡大して協業化，さらに図書館協力に及ぶ。

D. 時間の配分

以上を通観すると，教えるべき項目に比していかにも時間（30時限）が不足する感がある。この科目では，むしろ3年次における「資料組織法」（演習）を見こんで，基本的な要素の呈示にとどめるものとして，時間を配当してみると次のようになる。

ブロック	単元数	時間配当	時間計
1（意義）	4	1，1，1，1	4
2（書誌ユニット）	2	2，2	4
3（記述）	2	1，2	3
4（主題）	4	1，2，4，3	10
5（編成）	3	1/2，1/2，1	2
6（逐次刊行物）	2	2，1	3
7（作業）	5	1，1，1	3
合　計	20		30

E. 教授方法，教材，用具

1. 講義要綱とテキストブック

講義型式は一方向コミュニケーションとして，時間当りの伝送量は，あるいは最大にし得るかもしれない。それ故，多数の学生に対して最も便利な手段として多用されている。この科目も例外ではない。

しかし，受け手の側に立ってみれば，伝達される量はむしろ予測との一致度に依存するのではあるまいか。すなわち，前述の如く，学生は入学前の在職経験はもちろん，図書館の利用体験すらもたないといってもよいから，この科目の講義では，何のために，何について，どのように行なわれるか，学生が的確に予習してくることが，最も多く受けとることになるわけである。このためには最低限度講義要綱（syllabus）が必要である。

さらにテキストブックがあればこの効果は飛躍的に向上し，場合によってはalternativeを与えることも不可能ではなくなるであろう。その一例として，名著のほまれ高きMargaret Mannの*Introduction*……[7]がある。この各章末におげる参考文献はのべ297件（うち，単行本99；逐次刊行物記事208件）に達する。これらはすべて英語（主として米国）のものであり，教育内容は自国のプラクティスと一致しているようである。

このことは，一冊のテキストブックといえども，著者の労作であると同時に，その国のlibrarianshipの反映であることを示しているといえよう。

他方，これと比較して，英国のC. D. Needham（2版，1971）[8]，A. C. Foskett（2版，1971）[9]は，電算機化システムまでの連続性が第一印象としてあざやかである。同時に，分類目録への傾斜，従って辞書体目録に対するかなりの留保は，英国におけるプラクティスおよび，分類学の研究の深さ（たとえばPRECIS）によるものであろう。

K. Davisonの著書（1966）[10]は少し古くなったが，LA最終試験のためのシリースの一つである。これが基本テキストブックとしてあげているものは下記のとおりである。

Bliss: *Organization of knowledge in libraries* (1939)

Mills: *A modern outline of library classification* (1960)

Needham: *Organizing knowledge in libraries*（初版，1964）

Palmer Wells: *The fundamentals of library classification* (1951)

Sayers: *A manual of classification*（3版，1955）

このほか参考としてD. J. Eoskett, Palmer, Ranganathan, Shar, Vickeryもあげられてあり，さらに驚くべきことはDorking会議報告も引用されている。

LAの最終試験[11]は，日本でいえば大学学部程度と考えられるものであるが，その受験参考書がこの程度の高さをもつことには，ただ頭が下がる思いがする。もちろん，私どももこれを目標として努力を惜しんではならないが……。

なお，シラバスあるいはテキストブックを補完するものとして，基本的用具，とくに分類表，同相関索引，件名標目表，およびそれぞれの使用例のサンプルのコピーがあることは著しく授業能率を改善するので，少くともシラバスと同等以上に考慮すべきものである。

2. 教　材

ここで教材というのは，資料組織の理解を助けるために，演習的に用いる図書その他の資料である。一般的にいえば，図書館の資料はすべて教材たり得るはずであるが，実際にこれを講義のスケジュールに合わせて用意す

ることは，必らずしも容易でない。

しかも，単に教壇で示したり，回覧することは殆ど効果がないか，却って進行を妨げることすらある（学生数10人程度なら可能！）。学生の演習用には，ある程度複本がほしいこともある。このような教材が用意されると，これによって演習による個別指導，その積上げによる全体の評価，フィードバックが可能になる。

実物としては，図書，逐次刊行物はもちろん，さらに少くとも政府刊行物が必要である。このほか，基本的二次資料(全国書誌，索引・抄録誌，政府刊行物目録など)がなければならない。当学料は専用の図書室をもっているので多くの便宜を得ているが，なお不足のものは綜合大学として，豊富な蔵書がある利点をもっているにも拘らず，十分に活用し切れない点は反省している。

スライド，写真その他の映像資料は当然活用すべきにも拘らず，（i）備付けが十分でない，（ii）記録し難いので.呈示方法を工夫する必要がある，(iii) とくに映画，ビデオは単に高価であるのみでなく，専任のスタッフとラボが必要不可欠である，などで十分に用い得ないのは残念である。

3. 見学およびディスカッション

グループあるいは個人による見学は，よく準備され，効果確認の手段を欠かさなければ，大きな効果をもつものである。場合によってはロジカルな効果もあるが，あるいは心理的効果の方が大きいのではないかと思われる。1クラスの学生全員（50～60名）による見学は，相手方への影響も少くなく，そのわりに効果が散漫となりやすく，また実行もおっくうになりやすい。資料組織のような地味な業務では特にむづかしく，またそのためだけに見学するのがよいか，他の科目との相乗効果（従って引卒者も複数）をねらうべきかも問題点の一つとして残されている。

東京にある特典としては，関連の施設あるいは催物が豊富な点があり，明らかに地方にある場合と比較して，恵まれすぎているために，恩恵を感じないのかもしれない。学生の参加によるディスカッション形式の授業は，一方向のコミュニケーションに比して，多様な，かつ大量な情報交換が可能であり，奨励すべきものであるが，この科目のように技術的側面の強いものにおいて，最適か否か未検であって，今後，見学とともに，さらに研究したい。

F. む す び

資料組織は図書館・情報学教育においては基礎的科目であり，その入門としての「資料組織概説」は単に将来のプロフェッションの内容をなすのみでなく，すでに学習過程において日常必要なコミュニケーション手段でもある。換言すれば，他の科目においても書誌として扱われ，ノート，レポート，卒論においては自から生産すべきものとして実行される。

このことは，この科目の学習効果は常に他の科目の評価をうけることを意味する。故に常に教育内容の向上，そのための能率の改善，さらに時勢の変化への対応を研究し，具体的にはシラバスの常時更新，教材の整備充実，最終点にはテキストブックの刊行を目標として努力すべきである。 （小林 胖）

1) 〝国内出版物目録〟についての文献はないが，昭和48年度全国図書館大会（高知）で報告されている．**図書館雑誌**，vol. 67, no. 10, 1972, p. 448.

2) 渡辺茂男．〝イギリスにおける図書館学教育の現状，〟*Library and information science*. no. 10, 1972. p. 54.

3) 今 まど子．〝アメリカの図書館員の場合〟，**現代の図書館**，vol. 9, 1971. 6, p. 71 では〝望ましい〟としている．

4) もっと積極的に言えば，学部課程全体を pre-library-school コースと見る，たとえば Shera, Jesse Hauk, *Sociological foundations of librarianship*. London, Asia Publishing House, 1970. p. 143 の考えがアメリカでは正統的であろう．

5) 日本図書館協会整理技術委員会．〝図書の整理に関する調査報告，〟**現代の図書館**，vol. 11, 1973. 6, p. 54-55 の表7によれば約10%である．〔なお，Mann の Chapter Ⅲ は分類に関する典型的なアメリカニズムである．〕

6) 学術審議会学術情報審議会．学術情報の流通体制の改善について（報告）．1973. p. 36.

7) Mann, Margaret. *Introduction to cataloging and the classification of books*. 2d ed. Chicago, American Library Association, 1943. 276 p.

8) Needham, C. D. *Organization of knowledge in libraries;* an introduction to information retrieval. 2d rev. ed. London, Andre Dentsch, 1971. 448 p.

9) Foskett, A. C. *The subject approach to information*. 2d ed., London, Clive Bingley, 1971. 429 p.

10) Davison, Keith. *Theory of classification;* an examination guidebook. London, Clive Bingley, 1966. 59 p.

11) 渡辺，*op. cit.*, p. 41-42.

II. 資料組織法

序

資料組織法という科目はどの程度にどのように教育したらよいのかという問題は，日本でも外国でもこれまでにしばしば論じられているが，いまだに大方の一致した意見というようなものはでていない。米国では Margaret Mann の *Introdution to cataloging and the classification of books* の初版が 1930 年に出版されて以来，代表的な教科書として多くの図書館学校で使われていたが，時代の変化に応じてその改訂版が出されたのも既に30年以上も前のことである。その後パリでの世界目録会議を経て新しく英米目録規則ができたり，DC は版を重ね，目録法の世界にも電算機が導入されたので，さらに変化は著しく，「資料組織法」の教科内容も変って来て，時代に即応する新しい教科書が欲しいという要望も強く出ている。これにこたえて，若干の出版社が図書館学教科書シリーズというような企画に着手している。たとえば，Libraries Unlimited, Inc. は Library Science Text Series を，McGraw-Hill Book Company は McGraw-Hill Series in Library Education を出し，前者の中には Bohdan S. Wynar 著 *Introduction to cataloging and classification.* 後者の中には John J. Boll 著 *Introduction to cataloging* が含まれている。Boll のものは3巻からなり，第1巻の記述目録部分だけでも 400ページにおよぶ大部なもので，how-to-do-it ブック風の懇切丁寧な詳しいものである。前者の Wynar のものは現在第4版と版を重ね，1冊で目録分類その他資料組織全般を含め，機械化の問題にもふれて新しい時代に即応する努力がなされ Mann の体裁にも似ていてかなり広く使われている。

日本では米国にくらべまだ図書館学教育は充実していなくて，教育する機関によって，科目数，単位数，扱い方等が著しく異なるので，共通の教科書を作るのはもっと難しい。問題は教科書だけではないが，この科目の基準を考える一つの手がかりとして考えてみた。図書館学教育がいまだ混とんたる状況にあるにしても，「資料組織法」は図書館活動の基本となる大切な科目であることはまちがいない。このことはすでに多くの人々が色々な表現で述べている。たとえば，19世紀のイギリスの評論家トーマス・カーライルは「目録のない図書館は何の値打もない」[1] といい，米国議会図書館の閲覧室主任であった William Warner Bishop は「目録係が作った製品の最大の利用者である私は，目録の知識は図書館のどの分野の仕事をするにも必要不可欠で……図書館学校における目録の科目は，最も有益な実際的な科目であると考える」[2] といい，もと Western Reserve 大学教授 Jesse H. Shera は「目録を作ることはライブラリアンシップの真髄である」[3] と言っている。どのような見出しで資料が記入されているかということ，書誌的な記述の知識，件名目録法，分類法等の知識がなければ，収書の仕事も，資料の出納，利用者の相談にのること等もできはしない。したがって資料組織の知識は資料組織を担当する人のみでなく，どの分野の仕事につく人にとっても必要なものであるから資料組織の基礎科目は必修科目とすべきで，また他の科目と密接不可分の関係にあることが示されなければならない。たとえば，レファレンスワークとの関係において，図書館目録はもっとも大切なレファレンストゥールの一つである。なぜならば目録は，その図書館に何某という著者の作品があるか，ある主題に関してはどんな資料があるか，こういう書名の本があるかというようなことをしらべることができる。目録は一種の書誌で，目録法の勉強は書誌を学ぶことの一部であるともいえる。著者目録を作るには，同一著者の標目は形を一定にしておかねばならず，そのためには人名辞典等のレファレンス・トゥールをしらべて確認する必要がある。

図書館管理との関係についていえば，目録が図書館活動のための大切な道具であるとすれば，この目録作りの仕事の管理は，図書館管理の重要な部分を占める。例えば，資料組織全過程の中で専門職と非専門職との仕事の分担，資料整理に要する費用の分析，慢性的人手不足をどのように克服するか，少ない予算をどのように有効に使うかというようなことは資料組織の現場で誰もが直面する管理上の問題である。

図書・図書館史の中で目録分類法の歴史の占める部分は大きい。パニッチー，カッター，デューイというような図書館史上画期的人物の業績は，機械化をも含めた最新の資料組織法にとって絶えず立ち帰るべき原点となっている。

「情報検索論」においては，KWIC 索引とかコオーディネイト・インデクシングというようなシステムが扱われているが，これらは，標目，分類，件名というような従来の目標法の技術の応用と見なすことができるし，また，従来の目録法は情報検索システムの一種として考えることもできる。

資料の選択・収集や，閲覧・貸出し等の利用者サービスの仕事とも資料組織の仕事が密接不可分の関係にあることは言うまでもなく，これらの科目で学ぶ事柄を資料組織のための栄養として吸収し，また逆に資料組織の知識を他の科目においても活用すべきものである。

A. 科目の目的と範囲

慶応義塾大学図書館・情報学科では，資料組織系列の科目は「資料組織概説」と「資料組織法」と「資料組織論」との三つの部分に分けられるが，「資料組織法」は第3年次に課される通年授業で，第2年次に学んだ「概説」のアウトラインに従い，原則に基づいて実際に作業を行なうことを中心にして，資料組織の基礎的理論と実際とを統合的に習得することを目指す必修の演習科目で，2単位とする。

この科目で使用するトゥールは，それぞれ最新版の日本目録規則 (NCR)，英米目録規則 (AACR)，日本十進分類法 (NDC)，日本著者記号表 (NAM)，基本件名標目表 (BSH) とし，このうち NCR と NDC は学生各自が所持し，AACR，NAM，BSH は一定部数を備えて教室または図書室で共用する。この他 Sears の件名標目表，米国議会図書館の件名標目表，Cutter-Sanborn 著者記号表等にもふれ，それぞれ使ってみる機会を作るが，分類法については NDC 以外は使わない。UDC，LC，CC 等の分類体系については選択科目の「資料組織論」にゆずる。

B. 教　授　法

これらのトゥールを使って，練習用教材として揃えた和書洋書のコレクションのカード目録を実際に作ってゆくが，次に掲げる単元に従って，記述目録を学んだ段階では各図書の記述を，分類を学んだら記述に加えて分類記号を附与し，単元が進むにつれて完全な基本カードを作り，トレーシングに従って各種補助カードを作り，それらのカードを排列規則に従って排列し，目録編成について学ぶ。作ったカードはその都度提出させて，教師がしさいに点検し，誤りは正し，不足は補い，他の方法がある場合はそれらも示す。例えば分類法において，NDC のような階層分類表を使えば，ある種の図書，例えば伝記書のようなものは二つの異った場所に分類することができ，どちらがよいかは個々の図書館の条件によることを示す。

資料自体については，分類し図書記号がついて資料の書架上の位置がきまったら，書棚にならべるための装備について略述する。ついで資料組織作業全体についての流れをふりかえり，目録の維持管理についての問題を考える。中央集中整理，印刷カードの利用，カードの複製等の問題を検討する。

資料組織部門の経営管理については専門職と非専門職の仕事の分担，資料整理に要する費用の問題等を考察する。実際の業務についてからも絶えず技術と知識を高めるために参考書を提示し，そのうちのいくらかは部分的に読むことを課し，報告せしめたりレポートを提出させる。

C. 単　元

授業は年間約 30 回行なわれるので，その各回に扱う項目を掲げると次の通りである。

1. 序論：科目の目的と範囲，使用するトゥール，図書館の仕事全体の中での資料組織の位置及び他の仕事との関係，目録とは何か—目録と書誌，目録の形態，目録の編成方式
2. 図書の各部：洋書，和書，和装本
3. 記述目録法
   - 記述目録の目的，原則
   - 記入の要素と形式
     - 標題事項，出版事項，対照事項，注記事項，請求記号
     - 著者主記入，書名主記入，2段式，3段式，スケルトンカード
4. 標目
   - 1個人の著作，個人著者名の形式
5. 1団体の著作，団体著者名の形式
6. 多数著者の著作
7. 無著者名の著作，既存の1著作に関係ある著作
8. 種々の形式の著作
9. 逐次刊行物
10. 逐次刊行物の処理
11. 分類法
    - 分類概説，NDC 概観
12. 形式区分，地理区分，国語区分

13〜14. 各種主題の分類作業

15. 著者記号法，請求記号
16. 件名作業
    - 件名標目表の概観，BSH 概観
17. BSH 使用による件名附与作業
18. 伝記，文学作品，チェッキング

19. 基本カード，トレーシング
20. 副出カード（著者，書名）
21. 副出カード（主題）
22. 分出，叢書類の処理
23. 参　照
24. 記入の排列
25. 目録の編成
26. 資料の装備
27. 資料組織作業の流れと記録（書架目録，事務用目録，典処カード），目録の維持管理
28. 集中整理，印刷カード，カードの複製，参考資料

D. 問　題　点

以上で科目の概要を述べたが，このような授業にはいくつかの問題点がある。

講義中心でなく，実習を中心とする授業であるから，そのための教材，トゥールを収集整備しなければならず，それらを収納する場所と施設設備の確保，維持管理の問題がある。講義中心授業の科目に比して教師の労力も多大となる。学生が実際に作るたくさんの枚数の目録カードの点検，訂正は容易なことではない。しかし，そのために学生はどういう点が理解不充分か，誤解があるかが教師の方には非常によくわかるので，よりよい授業をするための指針となる。1クラスの学生数は少ない程よく，まとめて大勢扱えないので，少人数のクラス編成をするには，そのための教員，教室の確保も必要となる。これらを一口に言うと，大学の教育が全般的に財政難，施設難でマスプロ化の傾向が著しい時，それに逆行しようとする困難を伴っているということである。

ゆがんだ経済成長のしわ寄せで，図書館・情報センターはどこでも人手不足である。極端な所では，サービスをきりつめ，閲覧時間を短縮して利用者に迷惑をかけなければやってゆけないという悲痛な声をきく。このような時，図書館・情報学の教員は困難を克服して，新進気鋭の有能な働き手となる人々を養成して現場に送り込むのが責務であろう。　（堀内　郁子）

1) Lubetzky, Seymour. "On teaching cataloging," *Journal of education for librarianship*, vol. 5, Spring 1965, p. 255.
2) Colvin, Laura C. "Cataloging—Study and teaching (excerpts and conclusions)", *Library resources and technical services*, vol. 11, Summer 1967, p. 363.
3) Shera, Jesse H. "On the teaching of cataloging," *Journal of cataloging and classification*, vol. 11, July 1956, p. 132.

III. 資料組織論 I

A. 条　件

科目の種類：選択科目
授業時間：半期（4月～9月）90分授業
内　容：主題分析
対　象：3・4年生
レベル：「資料組織概説」を前提として授業する（2年の課程を修了したレベル）
授業形態：講　義

B. 目　標

代表的な分類表，件名標目表，シソーラス等の特性を知り，この知識を通して主題分析の本質を理解するとともに他の分類表，件名標目表，シソーラス等の評価，改訂，作成ができるような基本的知識を与えるのがこの科目の目標である。

C. 単　元

1. 概観（分類法，件名法を主体として）
2. 主題分析の意義，内容，方法
3. LC，NDL の分類表
4. UDC
5. Colon classification
6. Faceted classifications
7. WRU のセマンティック・コード法
8. 分類のまとめ
9. Sears List of Subject Headings
10. シソーラス
11. 件名のまとめ（シソーラスを含む）
12. 分類，件名，シソーラスの作成
13. まとめ
14. 試　験

D. 授業内容と教授法

1. 概　観

すでに修了している「資料組織概説」で学んだ分類，件名について復習し，特に NDC，BSH を例にしてこれから関連する諸問題を考慮しつつ分類表の構成，主題群のグルーピング，記号法，助記性，件名標目表の構成，標目の形式，概念関係，細目，区分，参照等を概観する。

教材：「資料組織概説」で使用した分類，件名の部分の教材と NDC・BSH,

宿題：(1) マイクロ分類表とマイクロ件名標目表の作成，(2) 主題分析とは何か。(1) は特定分野の用語群をプリントにして渡し，これをもとにして分類，件名を作成させる。この過程において主題分析のパターンを理解させて行く，一つの実験方式であり，授業の進行にしたがって変化して行くことが期待される長期的宿題である。(2) は参考文献3点以上を調査，分析した結果をレポートとして提出させる。

2. 主題分析の意義，内容，方法

ここでは前回に出した宿題をもとにして主題分析について考察する。同時にこれから進める各単元との関係を述べる。主要な内容は次の事項である。

a) 利用の特性
利用者，要求主題，要求情報の量と質，他の情報システムとの関係，利用調査等

b) 検索方式の特性
Pre-coordinate indexing, post-coordinate indexing; manual 方式，機械方式；目録カード，パンチカード，テープ，フィルム等

c) 主題分析
一般的例（5W，1H，人事のカテゴリー）特定分野の例（図書館学，金属工学）Ranganathan の PMEST，Vickery の分析，階層的分析等

d) 主題分析の表現特性
精粗，表現形式（自然語，人工語）記号法，用語決定，組合せ表現，role と link，重みづけ等

e) 主題分析における参考事項
題名，目次，序文，本文，著者，出版者，他の2次資料，主題の参考書等

f) 主題分析の基準
各種の分類表，件名標目表，シソーラス，抄録作成の基準等

g) 主題分析の適用
分類法，件名法，抄録法，配架分類，主題目録，主題索引，抄録，要求情報の分析

h) 主題分析基準の作成
用語調査，利用調査，既存の基準の調査；用語収集，カテゴリー化，用記の選択と形式の決定，組合せ方法等

i) 分析担当者の問題点
主題の知識，主題分析の知識等

宿題：LC と NDL の分類表の構成とこれに関する文献3点以上を調べること。

3. LC，NDL の分類表

配架分類という共通点に注目し，特にその作成過程，蔵書量，階層分類，記号法等について述べる。またこの利用状況，改訂の度合いについても言及する。

教材：LC，NDL の類の部分，特色のある部分をプリントして配布する。

宿題：LC, NDL 分類表を調べてその特性を考察し，これに関する文献3点以上を読んでその内容を説明する。

この時点で分類表の一般的パターンを呈示し，分類表の特性を把握する。その内容は下記の事項である。

a) 分類表作成の目的とその経緯

b) 分類表の構造
類，綱，目の呈示，本体（細目等）助記表，相関索引，使用法等

c) 分類の構成
グルーピング(階層，カテゴリーファセット等)組合せ表現と記号（助記性，区分等）記号法，参照等。

d) 分類表の改訂頻度，改訂方法

e) 分類表の利用状況

f) 分類表の問題点

4. UDC

この分類表は日本においても広く使用されているので講義においても重点を置く，特に NDC，DC と比較しつつこの特性を述べる。特性として記号法，詳細度，共通補助標数，固有補助標数，組合せ表現，利用状況等に重点を置いて講義し，実際に分類表を使用して演習を行う。

教材：UDC の代表的な部分をプリントにして配布する。

5. Colon classification

ここから単元7までは単元3の宿題の項で述べた如く分類表の一般的パターンに当てはめて，その特性に焦点をあてて講義を進める。

Colon classification においては記号法，PMEST，利用状況，Ranganathan 等に重点を置く。この分類表は難解の点があるので実例をもって説明することが必要である。考え方には特色があり参考になるが日本での実用性という点では問題があるので詳細な講義はしない。

6. Faceted classifications

特定分野についての分類には参考になる点が多々ある

ので，2～3の例を出してこの特色を講義する。これに関連して Vickery グループの活動にも言及する。特に主題分野によって特殊なファセットがあることと一方では常に存在する形式，地理，時間等のファセットがあることを理解させる。

宿題：マイクロ分類表を faceted classification に改訂することを試る。

教材：宿題のマイクロ分類表の対象となる分野の faceted classification の部分をプリントして配布する。

7. WRU のコード法

この方式は機械検索のために抄録をコード化する方式の一例としてとり上げ，その表現性に焦点をあてて授業もする。特に Infix, semantic factor, analytic relation, synthetic relation 等について実例を呈示しながら講義する。

教材：WRU のコード表の部分と実例をプリントして配布する。

8. 分類のまとめ

今までやって来た各種の分類方式からその共通要素，特殊な要素をとり出し，これをまとめる。分類表の問題点を述べる。すなわち，主題分析のプロセス，被検索性，表現性等の問題をあげる。

9. Sears List of Subject Headings

前半で件名標目表の一般的パターンを述べる。内容は下記の事項である。

a) 件名標目表の目的と経緯
b) 件名標目表の構造
　本表，細目表，カテゴリー表，使用法等
c) 件名の構成
　件名の形式，参照の種類，細目，区分の種類，固有名の処理等
d) 件名標目表の改訂頻度，改訂方法
e) 件名標目表の利用状況
f) 件名標目表の問題点
g) 分類との比較

以上のことはシソーラスを含めて考察している。

後半では Sears List of Subject Headings の特性を上記の一般的パターンと BSH とにもとずいて比較しつつ講義をする。特に言語形式の差違から生ずる問題として単数，複数の処理，inverted 形式，key headings, 文学，伝記，地理関係の表現形式等に焦点をあてる。

教材：Sears List of Subject Headings の特定部分をコピーして配布すると同時に現物を回覧する。

10. シソーラス

シソーラスの用語の発生，現状，用字用語のためのものと主題分析用のものとの違い，シソーラスの種類，シソーラスの構成等について例をあげて説明し，件名標目表との違いについて言及する。

教材：代表的シソーラスの部分をコピーして配布する。

11. 件名のまとめ（シソーラスを含む）

今まで授業または宿題を通じて，学んだ各種の件名標目表，シソーラスを比較，考慮してそれらの共通要素，特殊な要素等をまとめる。一方これらが有する問題点についても述べる。

12. 分類，件名，シソーラスの作成

これまでに習得した分類，件名に関する知識とマイクロ分類，マイクロ件名を作成した経験とをバックに一般的作成のプロセスについて講義する。すなわち，用語の収集，カテゴリー化，用語の決定，表現方法（組合せ，記号化）参照等について述べ，できれば自動分類，自働索引にも言及する。

この項目を設定したのは図書館の目録，分類は勿論，二次資料の作成においても特殊な主題分析が必要となる場合があり得るからであり，将来はこの分野を切離して独立した科目を設けるべきであろう。

13. まとめ

ここではこれまでやって来た分類，件名等のまとめと，対象として取上げなかった映像情報や新聞記事などの主題分析をも含めて講義する。

14. 試　験

筆記試験とレポートを成績評価の主体とする。これに出欠が加味されて最終評価が決定する。

以上で主題分析に関する単元の内容と教授法について述べたがここでまとめると次のような事項があげられる。

a) 宿題を出して問題を提起する。
b) 宿題を解く過程で生じた問題点と関連させて講義する。
c) マイクロ分類，マイクロ件名を作成する。この過程は各種の分類表，件名標目表の特性を把握するのに有効であると思われる。
d) 教材は各資料からコピーして配布する。
e) 参考文献のリストはコースの始めに配布する（未完成）。

E. 問題点

1. 他の科目との関連性

この科目は「資料組織概説」は勿論のこと，「情報検索論」「資料論」と関連するので担当者は内容の精粗，講義の進度などについて相互に知る必要がある。

2. 時間的制約

今後の問題として検討する必要がある。

3. 学生数と関心

授業の内容や方法から見て学生数は30名以内が望ましい。学生がこの分野に関心を持つかどうかは最初の動機づけにかかっている。

4. 分類，件名，シソーラス作成の方法は現在でもなお明確な作成の手法が確立していない。

5. 分類，件名，シソーラスの検索効率の数値的評価に言及できない点が不充分である。

6. マイクロ分類，マイクロ件名の作成素材の選択はあらゆるケースを考えて素材を選択構成するのが難かしい。現在は運輸関係と図書館関係である。

（浜田　敏郎）

VI. 資料組織論 II

A. 目　的

資料組織系科目群の一員として，「資料組織論」は，形式的には選択料目であり，その性格としては相対的にアドバンスト・コースと考えられる。すなわち，「概説」においては理論的な概観と，プラクティスへの心がまえが準備され，3 年次において「組織法」として，NCR と NDC に基く規範的なトレーニングが与えられる。さらに，3 年次の夏休には図書館実習があり，社会的コンテキストにおいての図書館の機能，さらにその中の資料組織のオリエンテーションがなされる。

このような背景のもとに，「資料組織論II」は，3 年または 4 年次の選択科目として，何を目的とすべきであろうか。

否定的側面からいえば，その単元は「概説」および「法」における如く，必須・基礎項目をもうらすることは必らずしも必要がないと思われる。また時間的にもこれは不可能である。

一方，とくに「資料組織法」が規範的アプローチをとり，具体的には NCR と NDC の最新版を用いるとすれば，たとえば目録に関して，比較論的，あるいは史的な立場からのアプローチが明らかに不足する。

資料組織の観点のみならず，参考調査業務の面からも，現実に与えられた書誌，とくにナショナル・ビブリオグラフィーの利用は必須であり，「組織法」の規範的方法を超えた見方が明らかに要請される。

さらに，一応規範的方法が身についた上で，現実の条件に応じた目録作業のバリエーションを考察する機会もこの科目で与えることができる。わが国の現状では，基本よりもはるかに低い，いわば〝カタロギング・ミニマム〟とでもいう実態を全く無視するわけにはいかない。これと逆方向の〝マキシマム〟は，伝統的な「書誌学」などで一部カバーされていると思われるが，ミニマムとして要求される条件を明らかにし，一定のアルゴリズムとして標準からミニマムへの変換が定式化されなければならないであろう。

希望的観測としては，国立国会図書館あるいは日本図書館協会の印刷カードの普及が考えられる。とくに前者は，近く完全に電子計算機化されると聞いている。その技法はともかく，上述の〝ミニマム〟の上昇は十分期待できるとすれば，そのような流動的場面における諸問題は今から考慮に入れておく必要があるのではないだろうか。

以上のような目的は，当然そのすべてを平均に単元としてカバーすることではアブハチとらずになるおそれもある。従って一応の単元として以下述べることも，さらに運用に弾力をもたせて，むしろ少数トピックの徹底した考究の方向で理解されたい。

B. 単　元

昭和47年度には〝記述目録と目録維持について〟をテーマとした。その構成は大体次のような順序で，90分授業 15 回の予定で準備したが，諸般の事情で 11 回（120分授業を含む）で終了した。

1. 目録の機能とその変遷
   財産目録 → 資料検索具 → 書誌
   冊子目録 → カード目録 → 検索
2. カード目録の意義（Bryant の指摘）
3. カード目録のサイズについて
   Fremont Rider の推算，マイクロフィルムの効用とその応用
4. 記入の作成。ここでは主題目録関係のことがらも，重複を承知で触れる。そこで調整・統一が必要であるように，記述上，また標目の選択に統一をとることの必要性を説く
5. 目録規則とは何か？ 記入，印刷カードの読み方，理解のし方

6. 各種目録規則について
   Panizzi, Jewett, Cutter の目録規則。NCR 1952, ALA 目録規則（1949）とプロシア規則の関係，国際図書館協会連盟（IFLA）の目録原則会議，NCR 1965 と英米目録規則（1967）の比較
7. 標目選定上のいくつかの問題点
   著者の意図を尊重すべきか統一か？　筆名か本名か？　最もよく知られている名称とは？　古典と同時代人の場合での差違，筆名・本名の使いわけをしている場合，時代によってまたは身分の変更によって姓名を変えた場合の扱い
8. 標目選定上のいくつかの問題点（続）
   著者（著作成立の責任者，寄与者）多数の場合と，その中に責任著者を 1 人に決定出来る場合，団体著者標目，団体下部機関の扱い，逐次刊行物の標目の扱いの変遷
9. 資料の明細書（書誌的記載・記述要素）
10. 標目決定上の原則と道具
    No-conflict policy とは？　典拠ファイルの維持（典拠カード）
11. 記入を 2 つ以上作ることの必要性
    副出，分出について，主題目録法について，特に重出の概念の説明，参照記入（カード）の種類，記入（カード）の複製，集中目録作業について
12. 書誌センター，総合目録とその維持
13. 辞書体目録とその維持
    排列規則，見出しカード，カード抽出しラベル，カードの移動
14. 目録部（課）における管理上の諸問題
    主題目録，シェルフ・リストと書庫管理の一部に関連させて，作業室，作業手引書，参考具，必要経費の標準，作業統計，資料廃棄の場合の事務処理，その他

C. それぞれの項目の説明と問題点

どの項目をとっても，それについての網羅的説明をすることは不可能であり，また不必要である。しかし資料組織関係のそれぞれの科目，当学料の場合には「資料組織概説」「資料組織法」更に「資料組織論Ｉ」で受講生がどの程度までの知見を有しているかは簡単には把握できない。当学料の場合でいえば，担当の３～４名のものが，絶えず接触を保ち，シラバスの交換，実際の授業の経過についての情報交換をしてはじめて可能のことである。その上に折にふれて，学生自体から聴取しなければならない。そして，このことが一義的には容易に把握出来ないことは誰にでも推察できるであろう。

前述のスケジュールは大体，90分授業１回分を予想して作成したものであったが，実際に行ってみると，学生の反応に応じて，２回以上をあてなければならない場合も生じ，順序も変更せざるを得なかったこともある。以下順をおって，私見をつけ加えて説明を試みよう。

1. の目録の機能を考察する場合，資料組織関係にとどまることができないのは当然である。特に資料選択，参考調査にも関連づけながら論じてゆかねばならない。情報の〝蓄積と検索〟とは盾の両面であって，〝検索の際の便利をあらかじめ考慮しての蓄積〟と考えた場合，この科目「資料組織論」につながることを考えてゆくよいチャンスである。学生は反問してくるであろう。その便利さとは何で測るのであろうか？「資料組織論Ｉ」での主題からの検索に対しての，利用調査だとか再現率，適正率の定義を思いおこしてもらうことで済ますこともできる。資料の成立に関しての，著者名，書名，出版事項，対照事項などが主となる，いわば外面的特徴を記録してゆく記述目録では問題はすくないのであろう，とクリアー・カットで考えている学生がたとえ数人でもいたとすれば，その疑問を尊重して，なるべく討議を行なわせる。

定量的には，その考えの妥当なことを認めながらも，どんなにか，この記述目録での決定に不一致がおこり得るかを調べさせ，それを 11. の項目でどの程度に解決し得るかを後日に論ずることにして進んでゆく。

機能達成の程度をみる，目録利用調査がどのように行なわれているかを紹介しておく。私は ALA 1958 年刊の *Catalog use study* (V. Mostecky 編) を見せて，館種，規模の大小による差違がどんなにか見通しつけにくいものであるか，しかしそれにもかかわらず，いくつかの点でこの調査が価値ある目録作業改善をもたらすかを読みとってくれるように要望しておしえる。読んでゆく際の留意点としては，いわゆる既に知られている資料がその図書館にあるかないかを確かめるための目録利用の場合と，主題による探索の場合の区別，それぞれの場合のデータの読み方などを挙げておく。熱心に読んでデータを較べてみた学生が，〝両方の場合での成功・失敗という考え方に相当の幅があること〟に気がつけば，この項目はおわってもよいと考える。状況によっては，３回続けの講義になってもかまわない。

2. のカード目録の意義では,歴史的にこの事情を説明してゆくと相当の時間を必要とする。J.C.M. Hanson の *A comparative study of cataloging rules*.....(1939) を紹介した上で，カード目録と印刷カードに関連して，C.C. Jewett だとか C.A. Cutter の功績，アメリカの議会図書館が印刷カードを 1901 年から外部に配布を開始した状況などを，30分位で概説した。但し選択科目になった際には，Hanson の著作をジックリと紹介して2～3回に講じてもよいのでないかと考える。

3. のカード目録のサイズに 90 分をあてるのは贅沢と考える人もあろう。しかし私は，館界に大きな革命をおこしたという意味で F. Rider の説得力のあったあの報告を重視している。目録カードのサイズと言う場合のサイズとは何を意味するか？ カード目録のサイズとは？ 前項の *Catalog use study* で大学図書館をその規模で ABCDに分けたときの分け方が，蔵書量と目録のカード枚数（150～500 万枚，90～120 万枚，45～60 万枚，15～16万枚）によってであることを説明した。そして，大きければ大きい程失敗率も上昇（20—40%；主題からの探索の場合は 8—23%）するといったことなど思い出してもらい，それをどう考える，解釈するかを問うたりした。ランガナタンの図書館学5原則の1である〝図書館は成長してゆく有機体である〟と考えあわせて，目録技術の限界を感じてしまう受けとり方と，この困難にうち克ってゆく対策を追求してゆく両様の態度を考えてゆくのもよい。ライダーが論じているのは,空間の問題で,何もカード目録の為の空間だけを論じているわけではないが，具体的な例としてとらえる場合に学生はより切実に感ずることも多い。選択科目になった場合も，特にマイクロ資料関係の科目が設けられるまでは，この科目で論じてもよいものと思う。

4. は従来の科目で相当よくカバーされていることなので，あまり時間をかける必要はない。主題目録の場合程,強くはないが,矢張り野ばなしではなく調整が不可欠なことを考えてゆけば目的を達する。具体例については 11. でも後述するということにして 5. と両方で1回ですますことも考えられよう。

6. については, Hanson も紹介したのであるから，長時間をかけることは避けて，1回で終了にすべきであろう。その時間も不足するような場合には，資料の紹介だけにとどめ，最後の時間を利用してクイズによって，確認するのもよい。

7. 8. はそれぞれ1回づつわりあてるが,内容は適宜,学生達の反応に従って変更してもよい。昨年度は，この予定から離れて，注釈書・注釈者の解釈を NCR 1952, NCR 1965, 英米目録規則（1967）のアメリカ版と英国版の差違などを，文章上・適用上から比較検討しているうちに時間切れになりそうになり，あわてて，団体下部機関の扱い方，逐次刊行物の扱い方を，NCR 1965 での例だけで20分で説明した。こんなことができるのは，既に「概説」と「法」で一通りの知見を有していることが期待されているからである。

9. の資料の明細書作成は，時間が不足の場合には，和書・洋書についてのカード記入での雛型を書かせてみて確認しても，即ち宿題ですますこともできるが，なるべくは従来の規則から離れて，一般的な資料要求者の心になっての常識にもとずいての書誌的記載・記述要素を網羅的に列挙させてみることにする。勿論1人の学生の反応だけで，いろいろの可能性がつくされるということは期待されないが，10 名～50 名の学生の回答を累積してみると，相当の要素が出てくる。その中には一見不必要な要素も混じってくるが，それぞれを，どんな場合に識別，確認の役に立ち得るかを討議してゆくことは，目録の機能について考えてゆく刺激となる。

学生側からの反応があまり多様にわたらなくて，討議が活発になりそうもない場合には，B.C. Vickery の *Techniques of information retrieval* (1970) の第7章 "Bibliographic description" の前半 (p. 66—69) は良い補助読み物となる。またこれを論ずるにあたり，国際標準図書記述（ISBD 1971, 日本語訳は「現代の図書館」1972, no. 3,), さらに関西で唱道されている記述・標目の分離方式を説明する良いチャンスである。

それからまた,同じ概念が異った名称で表現されたり,包括語とその一部分が相互交換的に用いられたりしている場合を指摘して，討議してゆくのも，用語に対する考え方を確実にしてゆくのに役立つであろう。

時間に余裕があれば，印刷カードの普及，更には電算機導入の書誌データ蓄積がすすむに従って，従来の主記入カード，副記入カードでの標目の差違が顕著でなくなったことを論じてゆくのもよい。そしてこれをふまえた上で，10. 11. の説明を行う。

12. で総合目録とその維持をとりあげたのは，著者目録なり,書名目録なり,いわゆる個別目録で排列が比較的簡易なものを,簡単に慣れさせるという意図であったが,昨年の場合には，辞書体目録の排列規則の説明の〝まえおき〟のように扱った。

13. の辞書体目録とその維持は，NCR 1965 の中では著者書名目録中での条項なので，充分とはいえないので，洋書のカード目録の例で説明を補足しておく必要がある。BSH（基本件名標目表）改訂版も普及してきているので，和書についての，あるいは洋書にも BSH 件名標目で作業したものについての説明も将来は考慮すべきであろう。

見出しカード，その他の項目は，非常に機械的のことのように思われて，どこでも忘れられがちである——実際にこれらは習うよりは慣れろ式に，やってみれば一回で会得できることなのかもしれない——私はしかしながらこんな簡単なことを怠った為に，カード目録が全然役に立たなかった，という極端な事例を紹介することにしている。それは，もう 20 年も以前のことではあるが，非常に熱心な目録係，参考係がいる専門図書館で私が見聞したことである。目録の記入（カード）も立派，見出しカードも規程通りに入っており，カード抽出しのラベルも非の打ちようもないように書き入れてある。但し各抽出しにはそれぞれ 1500 枚～2000 枚もギッシリとつまっていて，カードの移動が適正に行なわれていない。この作業，指示さえよく行なえば中学生にもできるような作業を怠ったばかりに，この苦労の結晶ともいうべきカード目録が全然一般の利用者には活用されていなかったのである。更に恐しいことは，〝使用されていない〟ということすら，司書は気がつかずに，ただやたらと質問が集中して忙がしい思いをしていることに〝生き甲斐〟を感じていたことである。勿論スペースの不足，予算がないこと等々あげればいくらも弁明はできることであろう。しかし利用者の身になって，目録の検索を考えようとしなかったこと，目録がその本来の機能を果しているかどうかをチェックしてみなかつた点は許されない。勿論このように極端な例は現在はないであろう。しかしこれに類した例，たとえば〝カードの移動はしたが，ラベルは書きかえない〟，〝見出しカードが不充分〟で利用者の検索にブレーキになっている点は今日もすくなくない。

14. はまた 1. と同じように，他のいろいろの科目と関連をつけながら説明してゆかねばならない事項を含んでいる。時間は何回かけても充分とはいえない。しかし同時に，大部分を他の科目に分散してしまってもかまわない。ただ最後に述べた廃棄処分に付随する事務，特にカード目録の中からそれぞれの記入（カード）をひきぬく作業には言及しておきたい。そこではじめて，基本目録における副出記入表示の原語が“tracing”であることの理由も了解されることとなろう。また目録作業での参考具という概念には目録規則，分類表，件名標目表，その他の参考図書類の他に，自館の基本目録，シェルフ・リスト，各種典拠ファイルなども含めて解釈，説明しておく。

この項目は，選択科目となった場合には触れにくいのではなかろうかと思う。その場合資料廃棄にともなう事務処理は，目録とその維持と併せて説明することとなろう。

（中村　初雄）

V. 情報検索論 I

序

情報化社会とよばれる今日，情報検索（Information Retrieval）ということばが，広く使われている。情報検索とは，情報を収集し，分析・加工し，蓄積し，要求に応じて取り出す過程をいい，これには，狭義の情報検索（データ・リトリーバル，あるいはファクト・リトリーバル）と，文献検索が含まれる。このように，どこに焦点をあてるかによって，その意味する概念は，分野によりいろいろである。たとえば，一般企業における情報検索は，データあるいはファクト・リトリーバルを意味することが多いのに対し，図書館・情報学では，文献検索が中心となる。したがって，情報検索に関する理論がカバーする範囲がどこまでであるかを，それぞれの分野で明確にしておく必要がある。

本学科における「情報検索論」は，「Ⅰ」と「Ⅱ」の 2 つに分かれており，共に資料組織系列に属する選択科目である。以前は 4 年次に履習せねばならない必修科目であったが，昭和48年度の 4 年生を最後に，3 年あるいは 4 年次に履習できる選択科目と変更された。この変更と時を同じくして，半期 2 単位であったものが「Ⅰ」と「Ⅱ」とになり，それぞれ 2 単位が与えられる科目となった。現在，「Ⅰ」が前期，「Ⅱ」が後期に開講されている。

本稿では，「情報検索論Ⅰ」の目的，内容，他の関連科目とのつながり，授業方法，問題点などについて論じる。

A. 目　的

当学科において，情報検索（以下 IR と略称）の対象となるのは，図書，各種論文などの文献情報を中心とする記録情報であり，「情報検索論」は，IR の基礎知識を，主として文献情報処理の立場から講述する科目である。

当科目は，「資料組織論」と共に，「資料組織概説」および「資料組織法」を土台とする科目であるが，これは「検索論」で蓄積（すなわち組織）に関する理論や方法に触れないことを意味しているわけではない。検索は，蓄積なしでは行うことが不可能であり，蓄積に関する理論や方法は検索のそれらと宿接に関連している。したがって両者を独立に扱うのは，あまり適当ではない。情報検索ということばが，「情報の蓄積と検索」の省略語であることも，蓄積が検索と切り離せないことを示している。

旧来の図書館においても，IR の機能は存在していたが，その主要な対象が主として単行本，つまり物であるため，蓄積・検索の理論および方法は，それを反映したものであった。

記録情報の種類および利用者の情報要求が多様化され，その量も著しく増加している現在では，旧来の検索機能だけで情報要求を満足させるのは困難である。そのため，情報を荷なう媒体（たとえば，単行本および各種論文など）の中味を処理の対象とする，新しい理論や方法が開発されている。

当科目では，これらの理論や方法の基本を，蓄積および検索を含む情報処理作業の流れに沿って説明し，IR の理論に対する基本的な理解を深めさすことを目的とする。このような理論や方法は，電子計算機の出現による影響を大きく受けているため，当科目でも電子計算機利用の観点からのアプローチが，ある程度強く打ち出されている。しかし，計算機に強くするのがねらいではなく，IR の理論や方法を学ぶことにより，結果として，電子計算機に対する理解をも得られることをめざすものである。

図書館・情報学における伝統的な蓄積・検索の理論や方法は，新しく生れたものと本質的に差異はなく，また，それらを生み出す母体の一つでもある。したがって，これらを講述する「組織論」は，内容的に密接な関連があるが，ただ，重点のおき方およびアプローチに大きな差異がみられる。つまり，「組織論」がいろいろな種類の図書館全般に共通する，検索をも含めた蓄積の問題を扱うのに対し，「情報検索論」では，多様な情報要求に応じて，大量の情報を迅速に処理し，適合情報を利用者に提供するのに必要な，理論や方法に重点がおかれる。

当科目は，現在広く使用されている理論や方法，あるいは新しく開発されたものをそのまま紹介し，解説するものではない。それが何故使用され，あるいは開発されたかなどの背景を充分考察する。それは当科目で習得した知識が，直ちに実社会で役立つものであるよりも，それを基礎として，各自が与えられた条件のもとで，一番適した方法を考案できる応用力を生みだすものであることを重視するからである。つまり，当科目で取扱われる方法や理論は，どんな機械も使用しない簡単なシステムから，電子計算機を使用した高度に複雑なシステムにまで適用できるものである。

なお，「検索論Ⅰ」と「Ⅱ」との大きな差異は，「Ⅰ」が基本的な理論に重きをおくのに対し，「Ⅱ」では機械化された図書館システム，および各種の情報検索システムなど，応用面に重きがおかれることである。

B. 内　容

「情報検索論Ⅰ」では，情報処理の過程を，情報の流れに沿って講述する。

その具体的な内容は，序，索引の作成，索引用語，蓄積，検索，システム評価，カレント・アウェアネス・サービス，情報検索システムの具体例の8つの部分から構成されており，それぞれの構成要素は，下記に示す事柄を主としてとりあげている。

1. 序

データ，情報，IR，IR システムなどの定義，および IR システムの構成要素についての概観を行う。

2. 索引の作成

索引作業とは何かを一般的に説明し，事前結合索引と事後結合索引について講述する。事後結合索引については，概念の整合（coordination）と，複合概念を表わすのに必要な論理関係の説明を行う。

この項で一番重点がおかれるのは，索引の方針と一意性についてである。索引方針では，索引作業の網羅性（exhaustivity）および索引言語の専門性（specificity）の概念と，それらが検索効率に与える影響などについて言及する。索引の一意性に関しては，その必要性とそれを保つためにどのような手段が講じられているかを論じる。

3. 索引言語

まず索引言語の定義，および一般的な説明を行い，引き続き分類，シソーラス，リンクやロールなどの補正手段について言及する。

分類においては，DC，UDC，NDC などの階層分類およびファセット分類，コロン分類などの組み合せ分類をとりあげるが，分類（特に階層分類）については，「組織法」および「組織論」で重点的に

取り上げられるので，ここでは概要を述べるだけになる。

シソーラスについては，その意義，機能，構成などについて，蓄積および検索の2つの側面から言及する。

補正手段については，リンク，ロール，重みづけについて，その目的や機能を説明する。

4. 情報の組織的蓄積

情報を蓄積するにあたって，文献とそれに添付された索引語との間の関係を示す方法として，ターム方式とアイテム方式を説明する。さらに，蓄積方法として最も基本的な方法である，逐次配列法，チェイニング法，リスト構造について，例を使用して言及する。また，蓄積方法は，蓄積媒体および探索方法と密接に関連するので，これらの関連についても言及する。

5. 情報の検索

IR システムの重要な評価基準である検索効率，すなわち再現率と適合率についてまず説明する。次に情報要求と検索質問との関連についてふれ，情報要求を的確に検索質問に変換することの重要性を論じる。引き続き，探索戦略および探索方法について言及する。

探索戦略については，情報要求の目的にあわせた探索戦略をたてる必要性を論じ，そのためのいくつかの方法を説明する。

探索方法については，蓄積ファイル中から必要情報を実際に捜し出す方法について論じる。情報の物理的探索は，ファイルの蓄積媒体および蓄積方法と密接に関連する。このことを考慮しながら逐次探索法，二分探索法，直接番地指定法など基本的な探索方法を，カード目録を例にとって説明する。

また，利用者がシステムのスタッフの手を介在させず，直接システム中のファイルと応答して，必要な情報を求めるオン・ライン情報検索システムにも言及する。ここでは，利用者とシステムとの応答がどのように行なわれるかに重点がおかれる。

6. システムの評価

システム評価をするにあたっては，利用者とシステム側の2つの立場があり，それぞれにいくつかの評価基準が考えられる。たとえば，利用者側の立場からは，検索効率，待ち時間 (response time) などが基準となり，システム側では，システムの存在意義などがあげられる。

ここでは，これらの評価基準について説明する。

7. カレント・アウェアネス・サービス

情報提供の形態として脚光をあびている，カレント・アウェアネス・サービスについて講述し，とくに，SDI システムと KWIC システムをとりあげ説明する。近年の市販磁気テープの増大は，SDI サービスに大きな影響を与えているが，これらの磁気テープについても言及する。

8. IR システムの具体例

既存の IR システムのうち著名なもの，たとえば，MEDLARS あるいは SMART などをとりあげ，その特色を説明する。

図書館・情報学は，おもにアメリカおよびイギリスを中心とした諸国で発達してきたので，わが国で図書館・情報学のカリキュラムや各科目の内容を検討する際には，これら欧米諸国のものを参考にすることが考えられる。

当学科の「情報検索論」で扱かわれるトピックと思われるものが，アメリカでは以下のようなグループに分けられている。

1. IR に関する科目。
2. データ処理の自動化に関する科目。
3. 図書館・情報学のための電子計算機およびプログラミングに関する科目。
4. 図書館におけるデータ処理に関する科目。

このうち，1は「検索論Ⅰ」2，3，4は「検索論Ⅱ」でカバーされる内容と大体一致する。以下に示すのは，グループ1に属する科目の例である。

School of Library Service, UCLA

a) Information retrieval systems

School of Library Science, Case Western Reserve Univ.[1]

b) Introduction to information retrieval theory

c) Information retrieval system

Graduate Library School, Univ. of Chicago[2]

d) Theories of indexing and information retrieval

e) Information storage and searching

Division of Librarianship, Emory Univ.[3]

f) Information retrieval

Graduate School of Library Science, Univ. of Illinois[4]

g) Information storage and retrieval

Graduate Library School, Indiana Univ.[5]

h) Information storage and retrieval methods and techniques

School of Library and Information Services, Univ. of Maryland[6]

i) Introduction to information retrieval systems

j) Testing and evaluation of information retrieval systems

School of Library Science, Univ. of Michigan[7]

k) Introduction to documentation and information retrieval

上記のうち a), c), e), f), h), i) の内容は「検索論Ⅰ」とほとんど同様である。j) はシステム評価の観点からIRシステムの構成要素に言及している。b) はIRシステムのモデルを構成するための数学的手法の説明，およびこれら手法のシステム設計や評価への応用などを扱う。d) は索引および主題分析に関連する問題を主な対象とし，索引と検索の効果との関連を表わす数学的モデルなどが扱われる。また，索引および検索の評価に関する研究調査法に重点がおかれる。

g) は IR に関する問題を図書館システムの立場から分析する。k) は IR の問題だけでなく情報処理に関して図書館および情報センターなどの役割を論じる。

以上の内容から，アメリカではシステム評価の問題が，かなり重視されていることがわかる。これは，多くの IR システムがすでに稼動しており，その評価が大きな関心事であることと，大学と実社会との結びつきが強いこととを示している。また，Case Western Reserve 大学には Information science laboratory（以前は Information retrieval systems laboratory と呼ばれていた[8]）がある。これは，学生をも参加する IR に関するリサーチ・プロジェクトと授業とを密接に関連させ，リサーチで得られる経験あるいは成果を授業に，授業で習得する知識をリサーチに反映させることにより，IR に関する知識をより効果的に習得させようとするものである。この科目は一種の実験あるいは実習科目と見なすことができる。

わが国でもシステム評価の問題は，これからますます重要になると思われる。そのため，当科目においてもシステムの評価の問題を，もっと重視する必要がある。そのためには，具体的な評価の対象がなく，抽象的にその問題を扱うよりも，たとえ実験的な小さいものであっても，評価の対象が具体的にとらえられる実在するシステムを対象とするのが効果的である。この意味で近い将来，Information science laboratory のような科目の設置がのぞましい。

C. 授業方法

現在，「検索論Ⅰ」は，すべて講義形式を採用しており，Bに示された順序に従って講義を行っている。厳然たる意味では教科書を使用していないが，参考書として F. W. Lancaster の *Information storage and retrieval* を勧めている。また，講義と関連して適当な文献を読ませ，レポートを提出させている。試験は少くとも一回は行うことにしており，試験結果，レポート，および出席回数で最終的な評価を行っている。

T. Saracevic[9] が述べているように，単なる講義だけでは，その科目の目的を達成することはなかなか困難であり，Information science laboratory のような新しいアプローチが必要である。この種の科目設置の前段階として，IR システムを使った小実験を授業の中に組み込むことが考えられる。たとえば，学生各自が検索質問を考え，それを論理式を使って検索式に変換し，システム中のファイルと照合し，検索結果を検討することがその一例である。この種の実験を通じて，IR の諸問題を各自が身近に捕えることができれば，授業効果を高めるのに大いに役立つと思われる。

現在，当学科には IR システムはないが，三田情報センターで MARC テープを購入してあり，それを蓄積ファイルとすることができれば，実験的な IR システムの開発は困難ではない。ただ，この種の IR システムは，他の科目でも利用できるので，学科内での調整が必要である。

（細野　公男）

1) Case Western Reserve University. *School of Library Science bulltin*: 1972-73. Cleveland, 1972. 40 p.

2) University of Chicago. *The graduate library school announcements*: 1971-73. Chicago, 1971. 55 p.

3) Emory University. *Division of Librarianship*: *Bulletin*, 1973-74. Atlanta, 1973. 31 p.

4) University of Illinois. *Graduate School of Library Science*: 1970-72. Urbana-Champaign, 1970. 45 p.

5) Indiana University. *Bulletin, Graduate Library School:* 1973-74. Bloomington, 1972. 22 p.
6) University of Maryland. *The School of Library and Information Service:* 1971-72. College Park, 1971. 61 p.
7) University of Michigan. *School of Library Science Bulletin*: 1971-72, 1972-73. Ann Arbor, 1971. 48 p.
8) Saracevic, Tefko. "Linking reserch and teaching," *American documentation*, vol. 19, Oct. 1968. p. 398-403.
9) *Ibid.*, p. 400.

VI. 情報検索論 II

序

近年における電子計算機の発展がいかに目覚ましいものであるかは，今さらここで論ずるまでもない。その応用は多方面に浸透し，文献情報や図書館業務への適用は，1960年代に入るとともに，主としてアメリカにおいて実験段階から実用段階に移行した。

1967 年に開設された図書館・情報学の修士課程には「情報処理機械論」（4単位）が必修科目として設けられたが，学部課程にはこれに相当する科目がなく，関連科目において断片的に触れられるにすぎなかった。

今次のカリキュラム改訂によって「情報検索論」は「I」と「II」に分れ，「I」が情報検索一般を講ずるのに対して，「II」はコンピュータ・ベースの情報検索に焦点を絞ることになっている。とはいえ，「I」の情報検索がいわゆる IR を指しているのに対して，「II」の情報検索は IR のみに限定せず，library application of a computer ないしは library automation にまでその範囲を拡げ，いわゆる house-keeping をも含めるというのが，本科目に対する担当者の基本的態度である。

このような見地から編成した「情報検索論II」（後期，2単位）の構成と内容の概略を次に記述してみよう。

A. 科目の概要

1. 電子計算機のハードウェア

1. 1 電子計算機の種類と世代

本科目で扱う電算機は計数型（digital）に限定するが，ここでは相似型（analog）との対比において計数型電算機の特性を理解させるとともに，処理速度の変革を中心にその発展と世代を説明する。

1. 2 電子計算機の構成

電算機を構成する中央処理装置，入力装置，出力装置の機能を解説し，情報の流れを理解させるとともに，主要な入出力装置であるカード・リーダ，紙テープ・リーダ，磁気テープ，磁気ディスク，磁気ドラム，ライン・プリンタの機能と特性を概説する。

1. 3 二進法と記憶

二進法の原理を説明し，十進数の二進数変換法と二進数の十進数変換法を解説する。さらに二進法を応用した記憶の原理を説明し，ビット，バイト，ワードの関係や番地の概念を理解させる。

1. 4 情報量

電算機を離れるトピックではあるが，前節においてビットを説明したのを機に，情報量の問題をとりあげ，若干の具体例について情報量の計算法を解説する。

2. 電子計算機のソフトウェア

2. 1 プログラム

電算機と卓上計算機の相違を通してプログラムの意義を理解させ，プログラム記憶方式を説明する。

2. 2 プログラミング言語

プログラミング言語の歴史的変遷に触れ，機械言語，記号言語，自動翻訳言語の特性を概説し，自動翻訳言語については，その代表例として FORTRAN, ALGOL, COBOL, PL/1 をあげ，その特徴を解説する。

2. 3 プログラムの処理

原始プログラムが言語プロセッサーによって目的プログラムに翻訳され，目的プログラムが実行されてアウトプットが作られるまでの過程を理解させる。

2. 4 フロー・チャート

フロー・チャートで使用される標準的記号を説明し，具体例をあげてその読み方と作り方を教える。

2. 5 電子計算機のアルゴリズム

若干の簡単な数学問題を例に，フロー・チャートの形で電算機独特のアルゴリズムを理解させる。

3. 探索

3. 1 探索の定義と要件

情報検索の基本的機能である〝探す〟ということを電算機の立場から定義し，その望ましい条件を考察する。

3．2 逐次法

逐次探索法を解説し，その利点と欠点を考察する。

3．3 二分法

二分探索法を解説し，その利点と欠点を考察する。

3．4 直接番地法

直接番地法を解説し，その利点と欠点を考察する。

3．5 変換番地法

キー・コードの分布が一様でない場合に使用される変換番地法の代表的方式として二乗中央値，オープン・ハッシュ，オーバフロー・ハッシュを解説する。コードの分布が一様でない例としては英単語における英字の使用頻度をとりあげる。

3．6 リスト構造

リスト構造の原理を解説する。

4．ファイル構成

4．1 ファイルの概念と分類

ファイルとは何かを講説し，その分類を示す。

4．2 ドキュメント・ファイル

ドキュメント・ファイルの特性を実例をあげて解説する。

4．3 インバーテッド・ファイル

インバーテッド・ファイルの特性を実例をあげて論じ，その作成手順を解説する。

5．論理探索

5．1 論理演算

論理演算の原理を明らかにし，論理積，論理和，論理否定の関係をベン図によって説明する。

5．2 論理探索のプロセス

質問から回答に至る論理探索のプロセスを説明する。

5．3 検索式の作成と解析

質問の検索式表現を解説し，電算機による検索式の解析とマッチングのプロセスをドキュメント・ファイルの場合とインバーテッド・ファイルの場合に分けて説明する。

4 探索とエラー

適合率と引出率，第一種エラーと第二種エラーについて考察する。

5．5 誤結合

フォールス・コンビネーションを実例によって説明し，それを防止するリンクの機能について考察する。

5．6 ロール

索引語が主題という文脈の中で担っている役割りをとりあげ，それを無視することによって生ずるエラーを実例によって説明し，それを防止するためのロール・インジケータの機能を論ずる。

6．カレント・アウェアネス

6．1 自動索引法

Luhn が関発した KWIC 索引の特性を論じ，その作成手順を解説する。語の抽出とデリミター，重要語と不要語の問題を論ずるが，辞書についてはリスト構造のものを具体例として解説する。類似索引である KWOC や WADEX についても簡単に触れる。

6．2 自動抄録法

Luhn が開発した自動抄録法の原理とプロセスを解説する。

6．3 SDI

他のカレント・アウェアネス・サービスならびに遡及探索と対比させながら SDI の特性を論講し，そのシステムの流れを理解させる。

7．ハウスキーピング

7．1 受入業務システム

モデル・システムを設定し，発注・納入・支払・登録・請求記号決定の各段階で発生する情報の入力とファイルの更新，ならびに各種アウトプット作成のプロセスを解説する。

7．2 目録業務システム

冊子体目録作成システムとカード目録作成システムに分けて解説する。冊子体目録作成システムでは，入力すべきデータと，それらがいかなるプロセスを経てアウトプットしての各種目録を生成するかを説明し，カード目録作成システムでは，MARC テープを利用して目録カードをプリント・アウトする例を説明する。MARC II プロジェクトについても解説する。

7．3 貸出業務システム

バッチ処理システムとオンライン・リアルタイム・システムについて，貸出・返却・予約・延滞督促などの主要処理を解説する。

7．4 逐次刊行物管理システム

本学の医学情報センターが開発した SRCC や UCLA のシステムなどを参考に受入管理のプロセスを解説し，筆者らが開発した PICC システムを例に雑誌総合目録の作成を解説する。

8. 著名システム

MEDLARS, MEDLINE, INTREX, OCLC (Ohio College Library Center) などの著名システムを概説する。MARC は 7. 2 で解説するので省略する。

B. 問　　題

序で述べたように,「情報検索論」の「Ⅰ」と「Ⅱ」は一般と特殊の関係にある。特殊が一般を前提として初めて成立するものだとすれば,「Ⅰ」は「Ⅱ」の前提要件でなければならない。ところが,履修制度上では,「Ⅰ」も「Ⅱ」も共に選択科目であり,学生はそのいずれを履修してもよいことになっている。この制度は図書館・情報学体系の中における「情報検索論」の位置づけを反映しているのであるが,すなわち,その体系の中では「情報検索論」そのものが一般に対する特殊の位置を占め,「Ⅰ」と「Ⅱ」は親子として捉えられるのではなく,特殊グループ内の兄弟として関係づけられているのである。この点に関しては,全体として考えられた木構造と,IR 担当者の脳中に描かれた部分構造との間に若干のズレがあることが認められる。このズレの調整が「情報検索論」の担当者にとっては最大の問題であろう。これについては,学則という制度上の建前は別にして,「Ⅱ」の履修希望者には「Ⅰ」も履修させるというガイダンス上のルールを設定することによって問題の解消に務めざるをえないであろう。

第一の問題が解決したとして残る問題は,「Ⅰ」と「Ⅱ」の内容の重複であろう。同じく情報検索を論ずる以上若干の重複は避けられないし,ある種の重複はむしろ必要でさえあるが,無用の重複はあくまでも避けねばならない。これは担当者同志の緊密な連絡と調整に待たねばならない。

第三の問題は,この科目の基本的性格に関わる重大なものであるが,履修学生が電算機の基礎とプログラミング言語を修得していないという実情である。勿論学内には電算機関係の科目が情報科学研究所によって設置されており,図書館・情報学科の学生にはその自発的履修が勧められてはいるが,大半の学生は履修していないのが現状である。「Ⅱ」の科目内容はこの現状を踏まえて構成されている。いきおいそれは講義中心の入門的コースの色彩を濃くせざるをえない。とはいえ,「Ⅰ」に対する「Ⅱ」の特殊性を考えれば,「情報検索論Ⅱ」を「電子計算機入門講座」には終らせたくないし,また終らせるべきではないと考えている。この辺に担当者の大きな悩みがある。

以上この科目の問題点をあげてみたが,まだスタートしたばかりの現時点では,堀り起せない問題をいくつか残しているはずである。この科目が望ましい成長をとげるには,かなりの時を必要とするであろう。

(安西　郁夫)